

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数一五枚）」の記載あり〕

目録

天璋院殿改称布告

徳川宰相上様ト称スヘキ旨布達

勝麟太郎等汽船ニ搭シ来麿

久光公勝麟太郎へ与ル書簡

勝義邦齊彬公ノ為人ヲ談ス

参考 安田助左衛門日記抄

幕府大奥某密書

西郷隆盛僧月照ト投海ノ始末

疑獄弁難

無名建言

堀田備中守婦府京師事情概要

継嗣事件営中ノ概況

井伊家公用方秘録抄

水野筑後守建言

天璋院殿継嗣

福井侯営中ニ於テ井伊直弼ト談話

井伊直弼大老ニ任ス

堀田正睦福井侯ニ水戸公ノ建白ヲ改メシメント請フ

薬師寺筑前守水戸越前等ノ諸侯ヲ井伊直弼ニ讒構ス

福井侯將軍ニ直諫セント堀田正睦ニ謀ル

井伊家人へ送ル無名書

井伊直弼所司代ノ交迭ヲ謀ル

所司代本多美濃守婦府御暇参内

齊彬公伊達宗城公へ与ル書

齊彬公島津豊後ニ与ル書

安田助左衛門日記抄

水戸国老歎願書

〔^{願カ}参考 伊地知貞馨自記抄〕

水軍創設費用布告

齊彬公七月八日大砲操練ヲ天保山ニ覽玉フ

江夏干城自記鈔

中山王使参府猶子達書

徳川慶福公家茂公ト改称布告

江戸在勤鎌田正純ニ帰国ヲ命ス

御知政中獄中空虚犯罪人寡カリシ事実

西郷隆盛齊彬公ニ天下ノ形勢救フニ道ナキヲ上申ス

国政ノ成就ハ衣食ニ窮民ナキニアリ

参考 薩摩順聖公齊彬ノ遺事鈔

折ニ触レ御微行民情視察セラレシ事実

大ニ水田ヲ開墾シ玉フ

諸郷士ノ格式ヲ復旧セラレムトス

櫻島洗出又ハ神瀬其他砂揚場等へ砦堡建築目論見

参考 安政紀事鈔

久光公国老新納駿河へ与フル書

將軍家定公薨去謹慎布告

番頭喜入主水ニ江戸在勤ヲ命ス

〔脱琉球人へ可相尋条々〕

三五七 天璋院殿改称布告

大目附江

御臺様御事、天璋院様ト奉称候、此段向々へ可被達候事、

八月

右之通、從 公義被 仰渡候段申来候、依之 天璋院様ト統候文字并同唱迄モ可致遠慮候、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

九月

左衛門

三五八 徳川宰相上様ト称スヘキ旨布達

大目附江

宰相様御事、今日ヨリ 上様ト奉称候、弥以可励精勤ヲ旨被 仰出候段、今日出仕無之面々へハ、同席ヨリ可被達候、

八月九日

別紙之通、從 公儀被 仰渡候段申来候、此旨御役人限并詰衆へ可致通達候、

九月

左衛門

三五九 勝麟太郎等汽船ニ搭シ來麿

安政五年、余蒸氣威臨艦ニ航シテ、再ヒ鹿兒島ニ到ル、是国主齊彬公ノ内約有ルヲ以テナリ、公直ニ艦内ニ來ラレ、余ニ對シテ曰ク、弊藩ニテ大祿ヲ食ム者凡廿數家、大抵世間ニ出サルナリ、障無キカ如クハ悉ク艦内ニ呼ヒ、一見其識ヲ博メシメム如何ト、余甚タ可トス、爰ニ至テ陸統艦内ニ來ル、公マタ其中一員ヲ余ニ示シテ云、是レ島津周防ト稱スル者、実ハ我カ弟ナリ、彼若年ヨリ学ヲ好ム、至于今ハ博聞強記、我カ及ハサル所、亦其志操方正嚴格是レマタ我ニ勝レリト、談笑和易、国主ノ威嚴ヲ以テ忘レタル如ク、歡心其面上ニ溢ル、和蘭教師等大ニ其懇篤意外ニ出ルヲ歎賞シ、敬服シテ措カス、悉ク艦内一見ヲ終ヘタリ、公マタ上陸、馬上ヲ以テ教師已下ヲ率ヒ、磯ノ別邸ニ到リ、壯士ノ銃隊操練及ヒ造ル所ノ器械雛形ヲ示シ、其可否ヲ問ハシム、其中宴ヲ張り逍遙散步終日ニ及フ、嗣後公近習密事ヲ命スル、甲河三郎(江夏十郎ノ誤ナリ)ヲ出崎セシメ、余ニ蒸汽船ノ種類且ツ其新造ノ年月・代価、其他大砲新式等ノ事ヲ、内密和蘭教師ニ問ハシメ、新造注文ノ拳アラムトス、是等ノ質問緒ニ付クノ後、表向申

立其乞ニ及ハムトナリ(御逝去、文久元年此凶形ニ依リテ和蘭國へ逃ヘタリ、之ヲ豊瑞丸ト名ツク)、是ヨリ後數日甲河氏來訪、面色死者ノ如ク大息永歎告テ云、鹿兒島ヨリ急報昨夜到レリ、我公急疾危篤且夕ニアリト、再報今明兩日ニアラム、若シ不幸ニシテ公世ヲ去ラハ百事瓦解、其大志何レノ日カ達セム哉、嗚呼天ナル哉ト、余モマタ此告ヲ聞テ慨歎數刻、余一伝習生ヲ以テ、図ラスモ公カ殊遇ヲ辱クシ、無包藏邦家ノ安危・武備ノ緊要ヲ談セラレ、大ニ其示教ヲ蒙レリ、之ヲ思ヘハ心肝摧破スルカ如シ、後訃音ニ接スルニ及ヒ慨然思ヘラク、今哉公世ヲ去ル、其区劃遠謀、邦家ノ為ニ心思ヲ尽サレシモノ一朝水泡ニ属セム欤、余幸ニシテ島津周防君ヲ知ル、終ニ一書ヲ贈リ肺腑ヲ吐露シ、希クハ君カ力ヲ以テ、先公ノ区劃ヲ維持更張アラレムコトヲト勸告ス、其後數月ニシテ、君返翰ヲ投セラル、此翰即チ是ナリ、

三六〇 久光公勝麟太郎へ与ル書簡

芳翰辱拜誦仕候、如来命不揃ノ時候ニ御座候ヘトモ、弥以御勇健被成御座奉恐賀候、然ハ今般主君不幸之儀

(齊彬公御逝去ヲ云フ)、達賢聽被仰聞候御深情之趣(書翰卷末ニアリ) 徹心肝拜読仕候、御賢察通拙者初重役共ハ勿論、國中一統遺憾之次第、難尽毫端儀ニ御座候、就テ以来之処置巨細御教諭被成下、不淺辱奉存候、折角先君之遺志不致失墜国力不及疲弊様、家老中へ申聞候所存ニハ御座候得共、何分井蛙之偏見ニテ、諸事行届兼可申ト心痛仕候、先ハ御芳志奉謝度如斯御座候、恐惶謹言、

八月廿八日

周防

麟太郎様貴報

尚々、早速御報可申上之処、幸便無御座延引仕失敬之段御有怨奉願候、以上、

三六一 勝義邦齊彬公ノ為人ヲ談ス

明治二十年十二月、友實吉井君弊舎ヲ訪ハル、前左府公(久光公)薨逝、且昔年ノ時事ヲ話シ益々哀悼ス、談偶公ノ返翰今ニ藏スルノ一事ニ及フ、君一見ヲ乞フ、旧篋中ヲ探リ返翰、且當時ノ軼末附記數紙ヲ得タリ、捧読一過今又後ニ一言ヲ記ス、

賢達ノ心裏ヲ知ル者ハ唯賢達而已、三十數年前順聖公

(齊彬公諡号)ノ一言、公ヲ謂テ博聞強記又方正嚴格ト、此一言左府公ノ終身ヲ明察シ尽セリ、今ニシテ熟慮スルニ一絲ヲ差ヘス、豈他人ノ称誉千万言ヲ累ハスニ足ムヤ(對話記参照スヘシ)

勝安芳誌

三六二 參考 安田助左衛門日記抄(齊彬公御逝去

ノ報及ヒ又次郎殿御相統)

安政五年七月廿日

上様(齊彬公)御逝去ノ御弘有之、引統又次郎殿御事、

(願書、布達參看)

暁姫様へ御賀養子、左候テ 哲丸様御順養子被為 在候様、御遺言ヲ以テ被 仰出置候御弘有之、

三六三 幕府大奧某密書姓名不明(岩瀨)

御別紙御秘書(私云薩州ヨリ相廻ル大奧ノ秘文ナリ) 拝見被仰付、毎々不一方御懇命ノ程、身ニ余リ難有仕合奉存候、再々捧読熟考仕候処、是則南紀ノ策略、後宮官々ニ徹シ候ヨリ、遂ニ此ノ如クニ至リ候事哉ト奉存候、若シ此上浸謗膚訴増長仕、此一大事ヲ彼ノ為メニ誤ラレ候ニ至ハ、長歎息ノ極ニ御座候へハ、猶昨今迄ノ形

勢ヲモ内探可仕ト、官々別懇ノ者ニ密々模様相探リ候
 処、更ニ不相分候ヘトモ、南紀(紀州慶福公ヲ云フ)推
 戴ニハ相違無之相聞ヘ、尤當時奥向ノ義ナト世上ヘ漏
 洩候ニ付、營中表方ノ徒ト面晤ナト見合候様、奥務ノ
 向ヘハ何レヨリカハ不申聞候ヘトモ、沙汰有之候由ニ
 テ、是迄ト違ワコ、本ノマ(違ワヌマ、カ)ノ体ニ御座候、右等ニテ勘考仕
 候ヘハ、此秘書ハ秘中ノ至秘、要路ノ徒モ内心ハ反覆
 モ有之候哉ト、察候ヘト私限モ奉存、再々愚考仕候ヘ
 トモ、當時拜見而已ニテハ、別ニ其甲斐モ無之、兼テ
 御沙汰モ有之、且申上候通り報國赤心無ニ誓候心知
 ノ朋友ニ付、則極密永玄(永井玄蕃頭)ヘハ差遣シ候、即
 時一覽返却申遣候処、則返書モ差越候故奉入尊覽置候、
 御一展後御投炎奉願上候、尤自然何等ノ妨書ヲ可生モ
 無御座候ヘトモ、全ク同人ノ胸中限り相合居候迄ニテ、
 如此ノ書一見ノ事ナト決テ口外仕間數旨、誓テ申遣置
 候事故、其段ハ御安慮奉願上候、右返書ノ趣ニテハ私云
 返書敬、大ニ心得ニモ罷成候哉ニテ、余程ノ都合ニ可相
 成哉ト推考仕候、胸中清爽公明正大、以天下為己任候
 心底ヨリ一見仕候ヘハ、実ハ当今ノ枢要ニ候ヘトモ人
 心反覆難計、一毫モ私心難脱候ヘハ、却テ奉一同志ノ

徒ニテモ、如此ノ機密尊館迄モ御承知ニ相成候事环、
 自然不心存候輩有之間數ニモ無御座候故、然ル時ハ此
 上ノ御模様柄、尚御内探ノ御不都合等ニ可相成モ難計、
 前段官々云々ノ折柄ニ付、此上別人ヘハ御見セ不被遊
 方可然哉ニ奉愚考候、尤奉申上候迄モ無之、御明察御
 手心被遊候事トハ奉存候ヘトモ、任御懇命不顧思召申
 上候、
 眞崎(人名平、知ルニ由ナシ)之事、是迄御覚モ被為在候
 由、貴訓ノ通り此節柄実ニ歎息仕候、右ノ次第故此度
 ニ不限、惣テ御不為ノ事而已不少ニ至リ可申、尊館御
 配慮被遊候御儀、実ニ御尤至極ト乍恐奉存候、兩館御
 親睦ノ儀ヘ何トソト、旧冬已來種々ニ心懸、私限一館
 同僚トモ内談仕居候ヘトモ、双方共内外楚人而已、如
 何トモセン方無御座、只々互ニ短ヲ數ヘ能ヲ嫉ミ、倅
 媚ヲノミ極々候事ニテ、此一条ハ就中一難事奉存候、
 何卒一公ノ寛大ヲ以、官々俗吏ノ常情ヲ洞察有之、聊
 御顧慮無之御友愛ヲ御加被下候テ、從來田尊館ノ御美
 質ニヨリ、乍御感動モ可被為在哉ト奉存候、此儀ハ何
 卒御含置被成下、可然御周旋奉願上候、出仕已前差急
 キ別布元ノマ(下略、昨夢紀事参照)

三六四 西郷隆盛僧月照ト投海ノ始末

西郷隆盛カ清水寺ノ僧忍向ト、鹿兒島灣内花倉村大崎ケ岬ヨリ海ニ没水シタルハ、安政五年己未九月十六日〔戊午十月〕ノ夜ナリキ、西郷ハ舟人ノ助ヲ以復命シ、後藩庁ノ内命ニ依リテ、菊池源吾ト変名シ、大島潜匿セシメ、大島三右衛門ト改メタリ（西郷投海ノ事實及ヒ其前後ノ始末ハ後編投海始末ノ部ニ詳記ス）

三六五 疑獄弁難記者姓名不明

戊午六月頃、尾州公・水戸公・越前家幽閉被仰出、貴賤之説紛々トシテ、イツレヲ善トシカタケレハ、或人予ニ問テ、此三家當時英明ノ者ナレトモ、斯幽閉被仰出候儀、何レニ、三十年モ不経シテハ善悪分リ兼候半トイヘリ、予曰、不然當時ノ事ヲ不弁シテ、二、三十年ヲ可待ニアラス、予カ見聞スル処ヲ以テ、是ヲ明弁セン、故ニ論難ト是ヲ題セリ、

論難

尾州侯・水戸侯・越前家退ケラレシハイカン、予曰、其委細ヲ不知、何ヲ以テカ是ヲ明弁セン、然レトモ世人

大ニ是ヲ疑フ、故ニ予竊ニ其言行ヲ以テ懸識スルニ、此節ノ所置突賊ノ事ニテハ無之、徳川家養君ノ故ナラン、爰ニ市井ノ説アリ、養君ハ尾州或ハ紀州、或ハ市橋（一橋ノ誤）ナラントイヘリ、然トモ尾州ハ本小身ヨリ〔松平摂津守ヨリ〕經上リシ人ナリ、紀州ハ幼君ナリ、市橋ハ年輩トイヒ人才トイヒ、當時ノ機会ヲ以テセハ、多クハ此人ナラントオモヘリ、併此人立時ハ、水府ノ老公權ヲ取り、朝家（幕吏ヲ云）ノ奸佞天下ニ誇リ我カマ、ニスル事不能ニヨリ、紀州ノ幼君ヲ取立シナラン、爰ニ又説アリ、水戸侯尾・越ト計リテ、密ニ

京師ニ乞フテ、市橋ヲ以若君（西丸或ハ儲嗣ト唱）ニ立シ事ヲ計ル、左モアラハ水戸侯ノ方寸失策アルニ似タリ、水府ハ累世儒学ノ家ナリ、何ノ為ニ学ヲ修スルヤ、和漢ノ歴史是今日ノ事ニ臨ンテ、後世間然スル事ナカラシカタメ、研究スルニアラスヤ、水戸侯実ニ儒者ノ權アラハ、時世ヲ推考シ、

日本神國ノ為、夷狄ヲ討伐スルノ精忠至誠歎息シ、將軍ト深ク計ルヘキヲ、一己ノ權ヲ取ランカ為、跋扈シテ京師ニ奔走セシヲ、徳川家モ其意ヲ探リ得タルヘシ、徳川家実ニ夷伐ヲ不肯、和議ヲ主トセハ静ニ外様ノ諾

侯ニ親ミ、遠ク謀リテ節義ヲ立、天下自然ト水戸侯ニ
 随順スル様ニ方略セハ、オソラクハケ様ニ今日ノ辱メ
 ハ蒙ラサルヘキヲ、水府儒者ノ權ヲ不知ニ近シ、往昔
 神君ノ心術ヲ視ルヘシ、太閤ノ下ニ屈シ天下ノ諸侯ニ
 親ミ、自然ト天下随順スル、誠ニ後世ノ龜鑑タルヘキ
 ヲ、ケ様權變ヲ不知ハ、水府ハ実ニ腐儒ノ徒ナリ、爰
 ニ於テ、予公道ヲ以テ是ヲ論センシ、奸人朝家ニ充ル
 ノ時世、水戸侯一人夷狄ヲ伐ノ至誠ヲ尽ストモ、一己
 ノ權ヲ取ランカ為諸侯ト不親、輕忽ニシテ信義ヲ不重
 ニヨリ、却テ奸智ノ方便ニ陥リ、己カ志ヲ伸ル事不能、
 是モ所謂賢人聖ニ捨テラル、ノ時世、唐、宋末世ノ代
 トイヘトモ、是程ノ衰世ハ和漢ニ無之、苦言耳ニ逆フ
 ノ一理、実ニ亡國ノ端ナリ、予爰愛ニ弁アリ、井伊侯
 ハ如何ナル人ソヤ、市井是ヲ称誉ス(俗人之ヲ賞スルハ
 當時ノ実況、有志人之ヲ惡ムコト蛇蝎モ當ナラス)、善惡ノ
 間是ヲ弁スル事不能、シカシ其言行ヲ以テ是ヲ論スル
 時ハ、奸智ノ所置國家ノ大賊トイフヘシ、如何トナレ
 ハ、井伊侯ハ徳川家累世國家柱石ノ家ナリ、況ヤ大老
 職ノ任ヲ受ケシカハ、後世万古不易ノ正路ヲ一洗スル
 ノ任ニ當リ、只泥中ニ入テ糞欠ト同シク群ヲ同フシ、

勅命ノ重キ國家ノ大事ヲ顧ミス、輕忽ノ夷情ヲ重スル
 ハ違

勅ノ罪、國家ヲ売ル其罪科至テ重ク、此時ニ臨ンテ此
 任ヲ蒙ル時ハ、生ヲ捨テ義ヲ採リ、

神國ノ威風ヲ輝シ、邪ヲ退ケ正義ヲ建ハ、争テカ外寇
 内邪ノ憂アラン、爰ニ至テ奸臣朝ニ充ルノ一理、國家
 ノ敗興伊侯ノ一身ニアリ、汝慎ンテコレヲ察セヨ(庚申
 ノ春井伊殺害ニ遭ヒシモ亦不宜哉)

安政五年戊午七月

右江戸高輪ニ於テコレヲ書ス、

右ニ付其八月、宰相様(齊興公)御下國ニ付、御先荷才
 領被仰付、大坂滞在ノ折小間物充共ノ嘶ニ、井伊家ハ
 誠ニ能キ人ナリトイヘリ、何ヲ以テ左様ニ申カトイヘ
 ハ、水戸侯杯ハ市橋ヲ以テ將軍ト可被成ヲ、井伊其事
 ヲ能ク相糺シ候処、於

京師彼是私ノ計有之、故ニ尾州侯・水戸侯・越前家ヲ
 抑込、紀州ヨリ取出セシハ、誠ニ器量ナリトイヘリ、
 左候ヘトモ井伊ハ夷賊ト相親ミ、水戸侯杯ハ攘夷ノ道
 ヲ被相守候間、當時ハ戦争ニ相成候哉、復ハ治世ニ可
 相成哉、井伊カ所置ハ當時ハ靜謐ノ様ナレトモ、終ニ

ハ夷賊ノ為ニ蚕食セラレ、彼カ奴ト可相成儀ト疑ナシ、
御兩様ノ間如何ト申候ヘハ、我々共ハマツ軍カナキカ
仕合ナリトイヘリ、予腹ヲ抱テ大笑セリ、

三六六 無名建言

○この文書の見出しは無名建言とあるも、実は安政五年五月二十
八日付の幕府宛島津斉彬建言書である。

墨夷之儀

神州之大患不容易御時節ニ付、猶又諸大名所存被聞
召度、并永世安全奉安

勅慮、皇国一同後患無之方略可及言上旨

勅答之趣并御添書慎テ奉拜見候、先達テヨリ再度申

上候外、更所存モ無御座候得共左ニ申上候、

勅答之趣ニテハ下田条約之外ハ難被遊

御許容御事ト奉存候、全体万国ニ致卓絶赫々タル

神州、若夷狄之輕蔑毫髮モ有之候ハ、任弘安之御嘉例

彼カ非望之邪曲ヲ御糾、尊王攘夷義理之大本ニ被為基

鎖国ノ御良法弥堅固ニ被遊御用、万一襲来仕候共神武

拡充

御誅伐当然ト奉存候、乍併方今之時勢能々相考候ニ、

二百年來

御治世打続自然奢侈之風相競、万民怠惰之志ヲ生シ、上
下一同今日之事務ニ逐レ、武備忽ニ相成候段誠ニ恐入
奉存候、當時外寇攻守之具ハ第一大砲礮台或堅牢之軍
艦等十分ニ無之候テハ、夷狄トハ申ナカラ當時戰鬪ニ
取馴戎器ヲ巧制イタシ、航海等ニモ熟練之者共御座候
得ハ、御必勝之算如何可有之哉、右ニ付テハ

勅諭之趣ヲ以御取扱相成候ハ、孰兵端相開可申哉、
勿論

勅諭 台命御座候得ハ、人心激励為報国尽忠戰候ハ必
定之事御座候得共、前文通武備相弛大砲礮台軍艦等御
手薄ニテハ、人々如何程奮發仕候共忠魂難相遂場合モ
可有之ト奉存候、殊ニ彼等ハ数ヶ国合体ニテ若四方辺
海ニ致出沒候ハ、終ニ御国力及疲弊内乱モ難計甚懸
念候、国之大事在祀与戎ト古伝ニモ相見得候通、実ニ
億兆民命之所寄ニテ、皇国御浮沈相拘候大機會ト奉
存候間、能々御思慮被為在度、天時不如地利地利不如
人和、マタ王公設險以守其国險之時用大矣哉等之古言
御省察尤之御時節ニテ、第一人和、繼テ諸御手当精実
ニ無残処御行届無之候テハ、
皇国ノ 御守護御奉職難被為整世態ニ御座候、尤旧典

ニモ別段外夷ヲ不近付トノ事モ無之、慕皇猷歸化スル者江ハ姓氏田宅迄モ賜、

東照宮ヨリ英夷江交易免許之御朱印頂戴被仰付候処、寛永以來彼之邪宗ヲ御一洗アラセラレ、御打払之御建法此節御変革之儀彼ニ被庄候様相見得、実ニ千載之御遺恨共可申候得共、得ト天下之形勢相考候ニ、一旦忍小成大之御主意ヲ御基本ニ被相居、仮約条通

御許容被為在候外有間敷奉存候、尤条約之内天主堂取建之儀ハ今一度御談判有之度、尤和好之儀ハ古ヨリ多ク偷安之策ニ出、遂ニ從是敗郵ヲ取候事々々其例モ不少候得共、時ト位ニ応候儀肝要ト奉存候、併前文仮約条通

御許容ニモ相成、自然苟安之風押移、彼之夷賊之邪誘ニ陥候様罷成候テハ、御興復迎モ六ヶ敷天下之御一大事、災害無此上御儀ト奉存候間、何卒仮約条御取結之上ハ、

御興業之御主意寸陰モ無御油断非常之御英断被相立、御武威四海ニ光被イタシ候様、御盛徳ヲ被為修、万事旧染之汚習奢侈怠惰之風俗御一変、諸藩之窮迫ヲ御取延富国强兵之基ヲ被為植、上下

一同嘗胆之憶ヲ成シ、外寇制御之設十分ニ被整度、左候テ彼等弥邪謀相施候ハ、不被為差置声罪

御征伐有御座度、左候得ハ御必勝無疑、自然亦彼ヨリ皇化ニ服候様可相成奉存候、猶又衆儀御参考之上御決定被為在度奉存候、勿論

勅諭 台命之上ハ和戦兩条如何様共可奉畏候、以上、

(開明文庫所蔵にて校訂)

三六七 堀田備中守帰府京師事情概要

四月二十日堀田・川路以下帰府ス、堀田ノ未タ上京セサル、京師ノ事モ如此ノ紛々ニ至ラサリシニ、上京ノ時ニ当リテハ、縉紳家ノ論益激昂、諸藩士ノ横議モ亦甚熾ンニシテ、始テ旧套ノ以テ今日ヲ制スヘカラサルヲ悟リ、益西丸ニ賢明ヲ立ルノ必要ヲ感シ、岩瀬亦帰京以來、此議ヲ主張スルコト尤力ム、將軍モ亦之ヲ納レ、刑部卿ヲ立ルニ決シ、備中ノ帰ルヲ待テ大策ヲ決セントス、松平越前守書ヲ堀田ノ帰路蔵駅ニ致シテ、帰日直ニ之ヲ決センコトヲ勸ム、然ルニ奥向婦女等、水野土佐守ノ貨賂ニ迷ヒ、一橋ヲ忌ム者マス、甚シク、本壽院ヲシテモシ刑部卿養君トナラハ、只今自害シテ果スベシト云ハシム、將軍大ニ惑フ、コレヨリサ

キ松平對馬守上書、紀州ヲ立テ、西丸トセンコトヲ請フ、自是紀州ヲ立ルノ論、稍々勢力ヲ得、

三六八 継嗣事件當中ノ概況

四月二十四日ハルリスニ応接スルヲ以テ、備中守早ク退ク、〔松平伊賀守、松平和泉守〕加州・和州二人將軍ノ前ニ於テ議スル所アリ、密ニ紀州ヲ立ルニ決ス、是ヲ以テ加州以下、皆大老ニ阿附シテ備中ヲ擯ケントス、井伊ノ大老トナル、海防掛諸有司皆服セス、〔尚志〕永井玄蕃頭・鵜殿民部少輔・岩瀬〔忠興〕肥後守等、共ニ老中ニ對シテ激論ス、曰ク時事ノ最難ナル、賢才ヲ擧テ老中ノ上ニ置クハ可ナリ、掃部頭ノ如キハ迂陋ノ頑人、其器ニアラス、斯人何ソ時艱ヲ救フニ足ランヤト、諸有司ノ意、賢明ノ親藩一人ヲ奉ンテ政府ニ升ラシメ、以テ大將軍ヲ佐ケシメントス、然ルニ井伊ヲ引クハ加州ノ謀ニシテ、加州ノ意タゞ之ヲシテ、己ニ代テ上京セシメントスルニ在リ、諸有司、始メハ井伊ノ不学・無識ヲ侮リ、敢テ意トセサリシカ、狼戾ノ性往々暴威ヲ逞クシ、慘毒ヲナス、終ニ天下ノ動亂ヲ引出セシハ、伊賀ノ私ニ出ル也、

三六九 井伊家公用方秘録抄

四月廿六日

一例刻御附人ニテ御登城、八ツ半時過御帰館、

今日御前御一人被為 召、御政務之義品々御談シ、何分頼ミ 思召候旨、難有 上意ヲ被為蒙候ニ付、私御役中ハ何事ニ不寄、聊無御斟酌被仰出候様仕度旨被仰上候由、御直ニ奉伺、世上之風説ト違ヒ、中々御聡明ニ被為涉候由、殊之外御歎被為在候、

三七〇 水野筑後守建言

四月

〔忠興、田安家老〕水野筑後守、書ヲ某侯ニ上リテ之ヲ論ス、曰ク、

皇朝ヨリ被命置候將軍家ノ御威光相輝キ候ハ、則皇室ノ御威光ヲ増候事故、イツレモ被安

叡慮候方ニ、御英断可然事ニ候ヘトモ、

勅答ノ趣モ有之上ハ、其趣ヲ以テ御取計被為在候上、
巫人ニモ力ヲ尽シテ弁論ノ上、弥其一段ニ由テ戦ニモ
可至事情ニ至リ候ヘハ格別、サモナク關東ニ於テ予メ
見切ヲ付、只巫人ノ意ニ随フ如ク相成候テハ、得失如何可有之哉、私ヨリ發言ヲ憚リ候ヘトモ、応接ノ面々

兎角彼ニ泥ミ候意味無之トモ難申、畢竟覚悟ノ薄キヨリ、彼モ付込テ随意ヲ唱候哉ニ愚考仕候ヘハ、

皇朝当今ノ事勢ニ依テ、必死ヲ尽シ論弁候ハ、只此

約書決定ノ期日ヲ延候迄之義、行届サルコトハ有之間

敷、時日サヘ延候ハ、【輪田備中守】櫻閣婦東後諸侯ノ存意御尋有

之、異論立候者ハ夷情ニ暗キヨリ起リ候事故、再三説

得ヲ加候ハ、終ニ了解スヘク、其上ニモ私見ヲ押張候

ハ其俚ニ奏達然ルベク、左候ハ、仮条約ハ元ヨリ掛リ

ノ輩力ヲ尽シ候上ニテ、談判届兼候ト見極メ候ヘハ、

其条々ハ動キナキ様ニ

勅旨モ下リ可申哉、諸侯ノ存意ヲ

京師ニ於テ、深く御懸念有之ハ、全ク御疑惑強キ故ニ

候ヘハ、【至力】經論モ權論モ俱ニ奏達事情サヘ分明ニ候ヘハ、

京地ニ別段御主意不被在ハ、

勅答ノ上ニモ顯然ニ御座候、誠ニ内外御太切之機會、

名分ヲハ最正敷

皇朝ヲイツク迄モ御尊察之儀、真実ニ相分リ、ムリオ

シツケノ如キ意味ニサシ響キ不申様御取計專要ナルヘ

クカ、サ候ヘハ条約モ大要ハ既ニ定居候ヘトモ、三百

年ノ鎖国容易ニ变革難成段ハ、異人モ洞察罷在候間、

只其期日ノ延候由、其為ニ親交ヲ捨テ戰爭ニ及候テハ、却テ異人ノ失策ニ相成可申候、殊ニ今日決定候トテ、互市明日ヨリ被行候義ニモ無之、近クモ一兩年ノ後ヨリ相始候儀、旁以テ諸侯ヘ再応御尋之上猶奏聞、

叙慮ヲ待テ、決定迄ヲ相待候程ノ応接行届サル筋ハ有之間敷ト愚考仕候、永井玄蕃書ヲ水野ニ与ヘテ曰ク、勅答ヲ侯伯ニ披露シ、赤心御尋可有事、道義ニ於テ当然、肥後ノ意中承リ候処同断、此事是非此ノ如クナラサルヲ得ス、只閣老猶因循、併乍不及同心勦力、為國

家ニ青天白日ノ御処置建言更ニ不厭候、実ニ此節ノ景況毎ニ天下モ是切ト存シ、御承知ノ酒量モ減シ、只可挽回ノ策ハ有之候ヘトモ、容易ニ不可行、可頼越候門

地如此ニテ、公明主誠是天下【統力】一綿ノ脈不絶所ニ候云々、二人ハ當時幕中ノ傑出スル者、其慷慨ノアリサマ想像

セラレテ見ルカ如シ、而シテ其論ノ正大磊落、真ニ可

欽仰者也、

三七一 天璋院殿繼嗣

三七一の二
四月

此頃薩州ノ老女弁島（小野島ノ誤）ノ文ニ一樣ノ事、此

月ノ初メニ、御臺様(天璋院殿)ヨリ御直ニ仰上ラレシニ、上ノ御聞入モヨカリシニ、又モト思召セト、本壽院杯キヒシク支ヘ玉ヒ、一樣云々ナレハ自殺シ玉ハントノ玉ヘルモ、実事ノ由ナレトモ、ソレハ狐ノツキテ申上ルコトニテ、其狐ハ歌橋ナルヘク、歌橋ハ上ヲ御育立申上タルホトノ人故、ヒタスラニ上ノ御威勢ノ衰ヘ玉ハンコトヲナケキテ、刑部卿様ノ定リナハ、上ノ御光ノ消ナンコトヲ、一ト筋ニ憂ル由イヘリ、故ニ本様ラス、メテ之ヲサ、ヘ、薩州并近衛殿下ノ仰ラル、コトモ、用ラレサルヨシニ見ヘタリ、

三七の二
四月

阿部勢州ノ老中タル内外艱難、門閥家ノ能ク匡済スル所ニ非ルヲ以テ、俊才ノ士ヲ拳テ諸有司トナス、小人不平ヲ懷ク者甚多シ、是ニ至テ群起シテ之ニ応ジ、紀州ヲ立テ、以テ其勢ヲ張ントス、水野筑後ノ書ニ、忌一ノ党類ハ皆持祿固箠ノ一念ヨリ起リ候ニテ、治乱ノ大体ニハ茫平タル小人共、如何トモ歎息切迫ニ至リ候云々、トハコレヲ云フナリ、

三七二 福井侯當中ニ於テ井伊直弼ト談話
五月二日

御登城前松平越前守様為御逢御出、於御書院御密談、右ハ御養君之儀、一橋様ニ相成候ハ、可然、外国御取扱ノ義ニ付テモ御異存被仰、御老中様方ニモ御困リ被成候ニ付、今日御呼御説得被成候処、御屈伏之御様子ト相伺申候(慶永公對話参照スヘシ)

三七三 井伊直弼大老ニ任ス

五月五日

一御快方ニ付、五ツ時ヘ御附人ニテ御登城、御用書中務太輔様ヘ左ノ通り御達シ、

掃部頭儀今般大老職被仰付候ニ付、都テ御役ニ付テ之着座ハ、溜詰之上ヘ着座致候様被仰出候事、右ニ付恐悦申上ル、

一今日御持帰り書付左之通

嘉永六丑年

大目付ヘ

御儉約御年限中ハ、月番之老中・若年寄、(并逢腕之)対客刻限暑寒初テ之対客ハ六時、其外平日六半時、(脱カ)逢日ハ五

時ヨリ井、非番之対客ハ相止、逢日ニ相成刻限ハ都テ
五時ヨリ相始候、此段向々ハ可被達候、

十月

同文言、尤西丸御目付ヘモ可有通達候、
右書付、伊勢守・遠藤但馬守渡之、

十月六日

申合書

対客等之節、都テ是迄十月ヨリ三月迄、火鉢差出来
候処、御儉約御年限中ハ、十一月ヨリ正月迄差出可
申事、

十月

五月七日

一今日御老人立被為召、

但御養君紀州様ニ被遊度旨、并堀田備中守様ニハ京
都ニテ不行届ニ付、御役御免相成候方ト 思召候
旨上意ニ付、紀州様之義ハ御尤ニ奉存候、備中守義
ハ猶相考可申上旨被仰付候趣、御沙汰之由奉伺候、
〔国史大系(統徳川実紀)にて校訂〕

三七四 堀田正睦福井侯ニ水戸公ノ建白ヲ改メシ

メント請フ

五月八日

堀田備州松平越前守ヲ招キ、水戸前中納言ノ建白ヲ改
メシメントトヲ托ス、越前守受ケス、備中曰ク、西丸
一事、井伊ハ専ラ南紀ヲ引キ、伊賀亦之ニ同シ、僕カ
説行ハレス、且井伊・伊賀ト、共ニ旧套ヲ執リテ交通
ヲシラス、井伊尤固陋迂濶、時勢ヲ弁ヒズ外事ニ通セ
ス、我意ヲ肆ニシ直言ヲ忌ム、馭夷ノ策略ニ至リテハ、
空茫トシテ一物ナシト、

三七五 薬師寺筑前守水戸・越前等ノ諸侯ヲ井伊

直弼ニ讒構ス

五月九日

薬師寺筑前守又井伊邸ニユキ、水戸・越前等海防掛諸
(元真)
有司ト心ヲ合セ外事ニ托シ、將軍ヲ廃シ一橋ヲ立テン
トス陰謀既ニ熟セリ、防カサルヘカラスト、井伊之ヲ
信ス、

一七ツ半時薬師寺筑前守様御出御逢有之、六半時過相濟
御湯漬被差出、

水府老公・松平越前守様并海防掛ノ方々、外夷渡来

ニ事寄セ当將軍様ヲ押込一橋様ヲ立、御威權御振ヒ被成度、不容易隱謀有之由、御心得ニ相成候義、色々被仰上、

五月十二日

一 御老人立御目見、

但外夷御取扱振品々御配慮、御養君御取極之事共御

同意御座候由、

五月十二日

將軍又紀州ノ事ヲ促ス、井伊ヲシテ之ヲ決セシム、蓋皆奥向ヨリ出ルナリ、

三七六 福井侯將軍ニ直諫セント堀田正睦ニ謀ル

五月十五日

越前守堀田備州ニ説テ、將軍ニ白シ死ヲ以テ大策ヲ決センコトヲ勸ム、備中曰ク、死固ニ惜ムニタラス、然レトモ大事ヲ將軍ニ白ス、將軍唯涕泣スルノミ、毎ニ可否ノ決ナシ、是ヲ以テ事皆為スヘカラス、

三七七 井伊家人へ送ル無名書

内用御直展 書付四通添

以手紙得御意候、然ハ昨日御來狀之節、御約申置候御呈書一并御封物一、為持差出候間、御持帰ノ上可然御披露可被下候、右要用申上候迄、如此御座候、以上、

五月十七日

再伸、昨日ハ御懇訪奉謝候、其節御頼ノ書付類取集差上申候、此外小松手ニテ取調候者モ御座候ヘトモ、其分ハ此節他借相成居候間、還候ハ、御同志君ノ内へ可差出候、右書付ノ中ニハ忌諱ノ条モ有之、且大闇ノ事甚惡敷認有之候ヘトモ、此ハ大ニ失事実居候、内実ハ大闇御聡明ニ相違無之ヨシニ御座候、且又此頃ニテハ、京師ノ蜂起九十四(連カ)□中モ大ニ崩レ立、纔ニ八、九人ニ相成候ヨシ申來候、此等為御心得御内々申上候、今日ハ降雨中御上途、嚙々御迷惑奉拝察候、此表御用何ナリトモ承度奉存候、此魚紙并雲丹輕品ニ御座候ヘトモ、去年來御用モ御頼ミノ御事故、寡君ヨリ為御餞別、貴兄へ御遣シ被成度トノ御事ニ御座候、此段御承知可被下候、已上、

三七八 井伊直弼所司代ノ交迭ヲ謀ル

五月二十三日

所司代本多美濃守ヲ召ス、酒井修理大夫ヲ以テ之ニ代
ランメントス、酒井ハ嘉永中所司代ニ任ス、
後罷ラル、再任セントス、伊賀井伊トハカリ
修理大夫ヲシテ京師ヲ庄制セシメントスル也、

三七九 所司代本多美濃守婦御暇参内

五月二十八日

当番議奏坊城中納言殿其外惣参、伝奏兩卿参侍、

一 関白殿御参、

一 所司代本多美濃守参府(婦九)ニ付賜御暇参 内、已刻従車寄

参着、于鶴間両役出会後有 御対面、於小御所賜

天盃、終テ於鶴杉戸西有拝領物末広二箱、
絹十疋、伝奏衆誘引台

所口ヨリ候所へ通賜酒饌云々、

但拝領物役送六位侍中同列勤之、拝領物諸大夫間ニ

テ伝奏雜掌へ相渡事、同列商量也、

一 小御所見繕殿奉行衆沙汰也、円座内々衆員数相尋、西
廂出之、

三八〇 齊彬公伊達宗城公へ与ル書(伊達家所蔵)

〇この文書は、本文第一三号文書と同文重複により略す。

三八一 齊彬公島津豊後ニ与フ書

書面相達申候、愈無事珍重存候、扱御暇モ無御滞相濟
候由致安心候、御発駕(齊興公)二十六日ト御内定之段
致承知候、此方発足二十八日、朔日之内ト存申候、武
兵衛(豎出)着之上可致治定ト存候、昨日ハ急便ニテ所
存書差登セ候、此便ヨリ延着ト存候、何分不容易時節
ト存候、扱琉人モ正使・副使致上着候、樂正(一名樂童
子)之分未致到着候、此間中雨続ニテ串良少々水出申
候、都之城是又水損之届有之候、昨今漸々晴上リ候様
子ニ相成申候、先ハ先日之返事迄早々申入候、以上、
五月二十九日

尚々、式日未タ着無之候間、定式ハ延テ申候、以上、

三八二 安田助左衛門日記抄

安政五年五月

御備組(弘化四年旧制折衷ノ組織)御備ノ次第、是迄ノ通
ニテハ不宜候間、現実戦ニ向ヒ其尽調練等モ相調候様、
取シラへ入御覽候様、去年三月田中仁右衛門へ御沙汰
被為在、御備凶二通陣小屋割迄相添差上置候処、此通
ニテ宜敷候間、致治定置候様 御沙汰被為在候処、此

節猶又現人数立込ニテ、何篇御手当向精微ニ極密取シ
ラヘ被仰付候テ、駿河殿ヨリ御直ニ彼是御伺相成候処、
御備組ノ儀此節取シラヘノ通り被仰付候間、画図面等
屹ト取り仕立治定イタシ置候様、細々 御沙汰被為在
候、

五月十三日

公義運用ノ蒸氣船山川ヘ入着ノ届有之、御家老衆初下
町津畑ヘ出役、暮六ツ時入着、翌十四日 上様萬年丸
(小形軍艦)ヘ被為入、御目附木村圖書殿并勝鱗太郎(義邦)
・蘭人召列(和蘭人上陸、壯士取締ノ条参考) 御目
通イタシ、夫ヨリ磯御茶屋ヘ被為召夜四ツ時過御暇、
翌十五日

上様蒸氣船ヘ被為 入、暮前 御帰殿、十六日四ツ後、
蘭人士官ノ内三人下町遊歩、十七日四ツ後致出帆候、
右滞船中下町会所ヘ昼夜相詰候、

三八三 水戸国老歎願書

五月

コレヨリサキ、水戸家老等歎願書ヲ太田ニ呈ス、太田
カ罷ラル、ニ及ンテ、幕府之ヲ却クト云、当時外人請

求スル所甚多ク、強テ之ヲ絶ツコトアタハス、而シテ
内地人心ノ憤恚ヲ畏レ、有司頗窘蹙ス、

三八四 参考 伊地知貞馨自記抄

前略

一昌平黷ニ入ルノ明年、即チ嘉永六年六月、米国ノ軍艦
四隻始テ江戸湾ニ入ル、是時ニ当リ世上久ク太平ニ慣
レ、衆情洵々議論大ニ起ル、是ヨリ天下ノ形勢一変シ、
有志ノ士各竭ス所アルヲ思ヒ、館中ノ書生モ多クハ慄
慨悲憤、時事ヲ論シ勉テ交リヲ四方ノ有志ニ求ム、時
ニ西郷隆盛君密ニ照國公ノ内旨ヲ蒙リ、芝上邸ニ在リ
テ水藩戸田・藤田両君、櫻任藏君等ト引合ヲ立テ、国
事ニ尽力アリ(桃山三圓日記ニ依レハ、桃山藤田ニ引合セタ
リ、其年月日モ明ナリ)、邸中之ヲ知ル者ナク、貞馨モ亦
之ヲ知ラス、適タマ類家ニ变故(原註四本八郎左衛門亡命
一条)アリテ、西郷君ト其処分ヲ為シ、話当世ノ事ニ及
ヘリ、其後西郷君貞馨ヲ昌平館ニ訪ハル、是ヨリ上邸
ニ至ルヤ西郷君ヲ訪フ、皆世上ノ通論ニシテ機秘ニ涉
ルコトナシ、凡ソ半年ヲ過テ始テ懷ヲ開キ、照國公ノ
深思此ノ如ク、時事此ノ如シト明示アリ、因テ深く心

肝ニ銘シ、晨夕國家ニ竭ス所アラシク思フ、是ヨリ以後ハ西郷君ニ面スルヤ、我藩ノ内政ヨリ幕府水戸越前等引合ノ事ニ至リ、細大残ス所ナク談話アリ、西郷君曾テ曰ク、大久保正助(贈右大臣公)余カ畏友ナリト、言次謂テ曰ク、大久保君モ時ヲ以テ出府アリタシト、答テ曰ク、之ヲ將碁ニ譬フ、正助ハ余カ手駒ナリ、一時俱ニ倒レハ継クヘキ者ナシ、殘シテ以テ後凶ニ備ント思フト、

一 留学中照國公ノ命ヲ以テ、邸中在勤官吏ノ為ニ、重野安釋君・兒玉源之丞(自費遊學)・貞馨三人輪番ニ芝上邸ニ至リ、番頭ノ宅ニ於テ論語ヲ講シ、又月ニ二回照國公詩文ノ題ヲ賜ヒ、上邸御物見ニ會シ、宿題席上座ヲ製シテ上レリ、

一 昌平館ニ居ル嘉永五年ノ冬ヨリ、安政三年迄ニシテ歳ヲ亘ル五年、是歳十月江戸大地震、是ニ至リテ館ヲ辞シ、徒ヲ集メテ日晡里(晝)ノ教應寺ニ寓シ、明ル四年正月林圖書頭君ノ塾ニ入ル、居ルコト一年、塾中少年生徒多ク、読書ノ質問・詩文ノ点刪ヲ受ケ、勉學ノ妨トナルヲ以テ、五年二月幕府旗下小出修理君(後御目付箱館奉行)ノ一室ヲ借リテ寓ス、岡部綱紀君(岩手)林家ヨ

リ貞馨ニ從ヒ寓セラレ、

一 照國公学校ヲ芝上邸ニ創建シ、在勤官吏ニ読書・學問ヲ勸奨シ玉ヒ、憚ル所アリテ糾合方ト稱シ、三月二十九日貞馨ヲ訓導師ニ進メ、糾合方ヲ主管セシメ玉フ、尋テ照國公糾合方ニ莅セラレ、幾程モナクシテ照國公國ニ就キ玉ヒ、又二月ヲ過キテ西郷君急ニ歸國アリ、帰ヘラル、ニ臨ミ、水戸・越前其他ノ引合ヲ大山格之助君(綱良)ト貞馨トニ托セラレ、是ヨリ月々國元ニ引合、大久保君等ト往復通牒セリ、是時江戸ニ在ル有志ノ人々ニハ岩下方平君・海江田武次君(是時有村俊齊)・伊地知正治君・高崎五六君・奈良原喜左衛門君・有村勇助君・有村次左衛門君・田中謙助君等ニシテ、或ハ邸中ニ在リ或ハ學ニ遊ヒ外ニ在リ、時ニ鎌田出雲君(正純)若御年寄勤ニテ、御留守ノ御家老ヲ兼テ在勤セラレ、其志アリテ誘導スヘキヲ知り、大山君ト議シ、數シハ往テ徐々ト説解シ、遂ニ照國公ノ御心意西郷君ノ事ヲ示シ、之ヲ西郷君ニ報ス、日ナラスシテ照國公手書ヲ出雲君ニ賜テ勉督シ玉フ、大山君モ亦任滿テ歸國アリ、是ヨリ外方ノ引合ハ貞馨一人トナレリ、是ヨリ先出雲君ヲ引テ水戸邸ニ至リ、武田伊賀君ト面談シ、

尾藩ノ田宮矢太郎君ニ引合、又越前ノ橋本左内君ニ謀

リ、橋本君四タヒ出雲君ノ邸ニ来ラレ、時事ヲ論セラ

ル(加註 桃山三園日記参照)

一 六月二十四日幕府

朝廷ニ伺ハスシテ、仮条約ヲ

外国ニ結ハレタルコトニ付、水戸・尾張・一橋・越前

四侯不時ニ登城アリテ、大老・閣老ヲ詰責シ玉ヒ、竟

ニ議合ハスシテ下城アリ、程ナク幕府四侯ヲ幽シ、土

佐・宇和島ニ侯ヲ致仕セシム、此報ノ鹿兒島ニ達スル

ヤ未タシキヤノ中ニ、照國公館ヲ捐テ玉ヒ(七月廿七日

夜)加註凶問江戸ニ達ス、有志輩驚駭為ス所ヲ知ラス(七月

十六日曉逝ス、同月廿七日夜凶報江戸邸ニ達スト、十二昼夜

ニ達シタリ)

一 初メ西郷君ノ國ニ帰ラル、ヤ、照國公ニ磯別邸ニ謁セ

ラル、關東ノ形勢ヲ細陳シ、大老并伊侯暴威ヲ振ヒ為

ス能ハサル旨ヲ言上アリ、公從容トシテ曰、猶一策ノ

在ルアリ、躬自ラ上京シ、我國家ヲ抛チ竭力セントス、

汝速ニ往テ其地ヲ定メヨト、手親ヲ金及物ヲ賜フ、西

郷君即チ発程大坂ニ過リ、吉井幸輔君(宮内太輔時ニ大

坂蔵役勤)照ト共ニ出京、尽力中ニ照國公ノ訃音達ス、西

郷君ノ月照和尚ト國ニ帰ラル、ハ、此時ノ事ナリ(投

海同年十月十六日夜)

一 是時ニ當リ、有志ノ徒四方ニ群起シ大ニ尊王攘夷ノ説

ヲ唱ヘ、貞馨モ亦土藩小南五郎右衛門君、宇和島藩吉

見長左衛門君等ト往来論談シ、且橋本左内君ト陰ニ計

画スル所アリ、身邸中ニ在ルヲ以テ遠行スルヲ得ス、

伊地知正治君ニ謀リ、正治君代リテ上京、内外相応シ

テ尽ス所アラントス、又日下部伊三次君(是ヨリ先我藩

ニ御拘ヘトナリテ訓導師ヲ命セラレ、貞馨ト同席タリ)水藩

有志ト議シ、奮テ出京セラル、時ニ幕府大ニ党獄ノ議

ヲ起シ、水藩安島帶刀君・鶴飼吉左衛門君及ヒ橋本左

内等ヲ収テ遂ニ之ヲ殺シ、日下部モ亦獄中ニ死シ、閣

老間部下總守君ヲ京師ニ遣ハシ、宮公卿ヲ幽シ、有志

ノ徒ヲ捕ヘ江戸ニ檻致セラル、

一 出雲君ノ江戸ヲ発シ伏見ニ至ラル、ヤ、近衛忠房公(

忠房公ハ忠親公ノ誤)ヨリ

朝廷ノ為ニ尺力スヘシトノ内書ヲ賜フ、伊地知正治君

其座ニ在リ、相議シテ請書(鎌田正夫家藏)ヲ呈セラル、

其婦ラル、ヤ病ニ嬰リ臥床ニ在リ、国老此事ヲ聞キ人

ヲ遣リテ謹責セラル、出雲君病篤クシテ遂ニ没セラル、

以下略ス(加註 安政五年十一月八日)

以下紀事ハ各年度ニ分挿ス、読者亮セヨ、

三八五 水軍創設費用布告(第一卷) 水軍兵士創命ノ

条参看)

高式千六百石

右ハ此節水軍兵士被召立候ニ付、給地没収高(犯罪者等ノ為メ没収)等ニテ、帖佐与御蔵入(御隠居方等ノ通唱、禄高ノ条ニ詳記ス)相成居候株ヨリ、右之通水軍方へ被差分置、左候テ兵士へ被成下候御切米ノ儀へ外々同様、物奉行方ヨリ相渡、右高所務米(納額ノ通唱)ヲ以御代官ヨリ返米引結被仰付候条、如例可被仰渡旨御差函ニテ候、以上、

午六月九日

川上右近印

此表書之通、如例可被申渡候也、

午六月十日

御勝手方印

取次

伊集院隼衛

三八六 齊彬公七月八日大砲操練ヲ天保山ニ覽玉

フ

戊午七月八日ハ砂揚場ニ於テ、横目・蔵方目附等ノ大砲遠撃調練御覽、酷熱ノ時分ニモ厭ハセラレス(御注)御出馬(ヲ押テ御出馬)、大砲ノ遠撃ニハ高低ノ度数、薬量ノ多少増減モ御指揮アラセラレ、暑熱ニ御傘モ 召レス、御勉強アラセラレタリ(本日ヨリ御不快少シク御瀉下アリシモ、押テ御出馬アリシト云フ)、畢リテ同所ヨリ小舟ニ被為召、御釣ノ御慰アラセラレタリト、此日ヨリ弥増御不快、晚景ニ御帰城、直チニ 御寝ニ就カセラレ、遂ニ 御大事ニ及ヒタリト云フ、御薬劑ハ侍医坪井芳洲ナリシト、

三八七 江夏干城自記鈔

十郎(江夏)長崎ニ出タル訳合、勝安房ト御打合せノ上天下ノ大事、此人ニ非ラサレハ外ニ人ナシト見込奉リシトナハ、長崎ニヲヒテ軍艦十五艘、一年二十艘ツ、其代価ハ三ヶ国ノ産ヲ以テ云々、追々軍艦揃ノ上東京ノ港ニ乗入り、然シテ幕府ニ建論シテ、後朝鮮・支那ヲ打ノ云々、論定済ノ期ニ御逝去トナリシ後、松本弘安早ク帰リ、十郎長崎ニヲヒテ大病ノヨシ、干城へ告ク、干城看病旁トシテ出崎四日目ニ御逝去後ナリ、然シテ此密事ヲ十郎、干城承ル、仙代薩摩山ニヲヒテ実

弟善之助ヨリ承ルニ、ポンペ菓ヲ奉ルトテ護送ス、御
逝去故引返シテ阿久根ノ港ニ出タルニ、小舟二拾円ヲ
以テ雇ヒ茂木ニ着、十郎ニ面会、十郎立腹シテ直ニ帰
ヘキヲ命シタリ、

右大事件ノ断ヲ申セトノ家老中ヨリ申聞クルニ因テ、
ハントウエン嘆息シテ曰、此君ナケレハ事ヲ為ス能ハ
サルニヨリテ、何事ナシニ聞濟變論濟タリトツ、
此時ノ事情ハ一大事件故、筆舌ニ尽ス事能ハスト云、

三八八 中山王使参府猶予達書

当秋琉球人被召連被遊 御参府候様被仰渡置候処、難
被差置 御国事多端(將軍病氣及ヒ外舶渡來等)ノ折柄ニ
付、琉球人参府ノ儀ハ先被成御差延候旨被仰出候、御
老中内藤紀伊守様被仰渡候段申來候、此旨可承向々々
可申渡候、

八月

駿河新納久仰

三八九 徳川慶福公家茂公ト改称布告

宰相様(徳川慶福)御名 家茂公ト奉称候旨、從 公義
被仰渡候段申來候、依之茂ノ文字名并名乗ニモ用候儀、

尤同唱迄モ遠慮可仕候、

右ノ通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、
但琉球諸島々へモ可申渡旨、琉球掛并御勝手方へ相
達、諸郷私領ノ儀ハ地頭領主へ大番頭へ可申渡候、

八月

左衛門島津久敬

三九〇 江戸在勤鎌田正純ニ帰国ヲ命ス

鎌田出雲正純若年寄

右ハ守衛方ニテ相話候ヘトモ、此節交代被仰付候、左
候テ代役ノ儀ハ追テ出府可被仰付候間、中途代(跡役ヲ
命セサル通語)ニテ仕舞次第出立罷下候様、先月(七月)
十三日於江戸被仰付候段申來候、此旨表方へ致通達、
奥掛・御勝手方へモ可相達候、

八月

駿河

鎌田帰国奉命ハ御在世中七月初ニシテ江戸出発、帰路ニ就
キタルハ七月二十一日、途次伏見駅滞在中公ノ訃音ニ接シ
タリト、然ルニ此布達ハ八月トアルヲ以テ考フルニ、御逝
去一般悲愁且ツ御葬儀等多端ナリシ故、布達遅延シタルナ
ラン、

三九一 御知政中獄中空虚犯罪人寡カリシ事実

公御家督爾来種々 御仁恵ヲ施サレタルハ、威ナ人知ルカ如シ、殊ニ風俗矯正ニ御心ヲ用ヒラレ、毎々御書取ヲ以テ御達ニモナリシヨリ、少壮ノ輩ハ敦厚ノ風ニ帰シ、文武ノ芸ニ遊ヒ礼儀廉節ヲ守リ、農工商モ各稼業ヲ励ミ衣食足り、随テ犯罪者寡ク獄中稍々空虚トナリ、安政三・四年ノ頃ハ僅ニ三・四名ノ囚人アリシト、或ハ非人・乞食・徒食ノモノモ減シ、癩疾・不具ニシテ抛ル所ナキ者、僅々数十名アリシノミ、此等ヲ以テ善政ヲ布カレタルヲ証スルニ足レリ、

三九二 西郷隆盛齊彬公ニ天下ノ形勢救フニ道ナ

キヲ上申ス

〔頭註〕天竺上京ノ雜編
安政四年丁巳ノ夏五月御下国、同五年戊午ノ秋八月御参府ノ予定（琉球王使ヲ率ヒ）ナリシカ、天下ノ形勢ニ就テ御猶予ノ御内定ナリシト、其時分（同年五月）西郷隆盛ハ江戸ニ在リテ、各藩ノ有志（中ニ就福井藩中根・橋本等ト交リシ事実ハ、昨夢紀事及ヒ鎌田出雲日記、伊地知貞馨紀事参看）ト共ニ尽力セシカ、井伊直弼カ大老職ニ在テ暴威ヲ振ヒ、恣ニ外国ト条約ヲ結ヒ、剩ヘ有志

ノ宮堂上或ハ各藩侯及ヒ有志ノ人士ヲ憎ミ、或ハ恐多クモ廃立（虚実判明ナラスト雖、当時専ラ唱ヘタルコトナリキ、宸翰甲第〔マ〕号参看）ノ企ニモ及ヒタル始末ヲ奉告セシカ為メ帰国シ、形勢人情ヲ具上シ救フニ道ナキニ立到リシ趣言上セリト、夫ヨリシテ御参府御猶予御内決、一向ラ軍備ニ御勉強アラセラレシトナム（西郷隆盛・吉井友實・税所篤等へ親話）

三九三 国政ノ成就ハ衣食ニ窮民ナキニアリ（迭話）

安政五年ノ夏ニ至リテ、天下騒擾ノ形勢逐日顕レ、京都・江戸ノ形況被聞召、御憂慮ノ御話毎々被為在、或ル時ノ御言、天下ノ政態大革新ヲナサ、レハ、叶ハサル場ニ立到レリ、此世勢ハ内外多忙、一朝一夕ニ成就スヘシトモ思ハレス、尋テ國中ノ政事改革モ明暮心配セリ、特ニ士民共ニ衣食ニ窮スル者ナキ様速ク取計遣シ度、否ラサレハ事アルニ方リテ氣ノ毒ナル訳ナリ、先ツ差向キ国政ノ最モ急務ハ此一事ナリ、己ノ國中ニ窮民アリテハ、天下ノ事ニ口ヲ容ル、コト能ハサルノミナラス外聞ニモ拘ハリ、言行ハレ難キ基ナレハ、救

恤・勸農・武備此三事ヲ急務トスルニアリトノ御言ナリシト、是レ安政五年戊午ノ夏御逝去十余日前、山田壯右衛門へ御親話ナリシト、

三九四 参考 薩摩順聖公齋彬ノ遺事鈔

學海居士

徳川幕府ノ時安政二年六月八日、和蘭国ヨリ始メテ汽船一艘及ヒ小銃ヲ幕府ニ贈レリ、同シキ七月廿九日幕命ヲモテ勝麟太郎義邦(今ノ勝安芳伯)、矢田堀景藏鴻・永持亭次郎某等、トモニ汽船伝習ノ為ニ長崎ニ趣ク、コノ時和蘭ノ領事「ハトシクル」(ハントウエーンノ誤)トイフモノナリ、永井玄蕃頭尚志コノ頃目付役ヲモツテ、伝習取締ヲ兼テ伝習生ヲ督撰ス、長崎出島ノ和蘭館ニテ海軍伝習ノ業ヲ始ラル、船將「次官ヘルセーキ」ト云フ、教師トシテコ、ニ四年ノ星霜ヲ送リシカ、費用夥シク、初メハ長崎ノ奉行所ニ積マレタル金拾三万兩ホトアリシヲ用ヒタレトモ、件ノ船ニ用ユヘキ帆繩、ソノ余器械尽クコレヲ和蘭ヨリ購ハサレハ用ヲ弁セサルニ十三万兩ハ、ヤクモ尽テ、更ニ数万兩ニ及ヒシカハ終ニコノ事ヲ罷ラレタリ、コハ費用ノ故ノミナラス、

堀田備中守正睦カ老中タリシ時ニ始ラレシヲモテ、井伊掃部頭直弼国務ニ当リ、当時事ヲ用ヒシ奉行等多ク廃セラレス、直弼カ人トナリ、西洋説ヲ忌嫌ヒシカハ自ラ軍制ナドニ心ヲ用ヒス、奉行等モソノ風ヲウケテ、費用ツ、カストイヒテ中止セントソ聞ヘシ、コノ船ヲ乗試ヲシケルトキ、勝トカノ蘭人「ヘリセレキ」同行シテ薩州ニ至リ、或ル港(山川港)ニ入ルトアリ、コノ港ハヨキ地形ナレトモ人家ハ三千余軒ニ過キス、何ノ神社トヤランノ神主ノ宅(神主ノ宅ハ佐々木某カ宅ナリ)ノミ大キヤカナリ、勝ハ海上ヨリ遙ニミルニ、何モノニヤ有ケン、金箔ニテ漆シセシ陣笠ヲ戴キ(事實)タル武士港ノ山際ヨリ馳セ出来ル、コレニツ、キテ三騎ハカリ疾風ノ如ク乘リ走ラシテ、湾ヲメリテ(分説)カノ神主ノ家ニ入ルヲミタリ、シハシアリケル程ニ端舟三・四艘ニ件ノ武士ナルヘシ、ウチ乗リコナタニ進ミ来リ、アハヒ近クナリシ一人舟ハタニ立テ、コレハ松平修理太夫(当時薩摩守)ナリ、イツコノ船ニ候ソ、船將ニモノ申サント云フ、即チ勝ハ出テ対面シ、長崎伝習所ニアリテ、軍艦乗試ノ為ニコ、ニ参リテ候(前頃勝等ト照会シ、来港ヲ待チタリ)トイフ、修理太夫齋彬

コレヲキ、苦シカラスハ船中ニ参リテ一覽セハヤト存ス、トアリケレハ「ヘルセーキ」、薩摩ハ大国ノ諸侯ナリトカネテキ、シニソ大ニ喜ヒ、勝ニ命シ船中ニ請シ、饌ヲ出シテコレヲモテナスコト甚慇懃ナリ、島津ハ船將ノシルヘニツキテ船中ヲ見回リ、又運用法ナト詳ラカニ問ヒキ、喜フ事斜ラス、船將ニイウテ、鹿兒島ニ来リ玉ヘ、カノ地ニテ饗応セマホシケレ、コニ浴スル為ニ、コノ港ノ近キ所ニヤトレリ、サレハ諸共ニハ思ヘトモ、家従等多ケレハ意ニマカセストイフ、シカラハ鹿兒島ニ赴キ候ナント諾シテ纜ヲトキ、齊彬ハ陸路ヨリ鹿兒島ニカヘリシナルヘシ、ステコノ船約ノ如ク鹿兒島灣(鹿兒島灣ニ公ト諷シタル、第二回ノ時ナリ)ニ入リシニ、薩摩人等外国形ノ船トミテ外人トヤ思ヒケン、或ハ濼ヲ打チ、或ハ声ウチ揚テ罵リ呼ハヒ、港ノ中ニ入ルコトヲユルサス(入濼ヲ許サ、ルニ非ラス、上陸ノ際海岸ニ於テナリ)、勝モ船將モアキレハテ腹立シケレトモ、セム方ナカリケレハ、ソノ日ハ退キテ海中ニ夜ヲ明ス、ステ又明日日、齊彬使者ヲ舟ニノセテ昨日ノ無礼ヲ謝シ(此辺大ニ誤レリ)、コノ舟ヲ案内トシ

テ再ヒ港ニ入ル程ニ、齊彬騎馬シテ港ニ出迎テ(出迎ニ非ス、事實第^{〔マ〕}卷ニ記ス、参照スヘシ)式代シ、近侍ノ武士ヲ從ヘテ己ソノ真先ニ馬ヲス、メ、トアル別荘(磯ノ別邸)ニ赴クニゾ、流石剛性ナル薩摩人モ、主君ノ斯ク礼遇セラル、ヲミテ、無礼ヲ加フ可キアラネハ、皆々路上ニ蹲踞シテ敬礼ヲ施シ、恙ナク別荘ニ入リス、ステ島津ハ侍臣等ニ命シ、イツノ間ニ用意シケン、山海ノ珍味ヲツラネテ、厚ク船將及ヒ勝ヲモテナシ、軍艦ノ事ナド又詳ニ尋ネ聞クコト甚切ナリ、酒酣ナリシ頃勝ヲ人無キ所ニ招キ、和殿コノタヒノ航海ハイツコヲ指シテユキ給フヤ、日本ノ近海ノミニヤ、或ハ又遠ク島々ヲ経回スルニヤト問シカハ、勝ハ答テ、サン候、海軍伝習ノ為ナレハ、ソノ遠近ハタゞ教師ノマ、ナレハ、某ハヨク知リ候ハヂモ、マツ琉球ヨリシテ臺灣ノ辺マテナラントノ物語候ヒキトイフ、齊彬ウチウナツキ声ヲ低シ、稽古ノ為トアランニハ、サモアルヘシ、サレド琉球ニ赴カレンコト、コタヒハ思ヒ止リテタヒテンヤ(事實ナリ)、実ハカノ地ニ英人二人ト、マリ居テ国ニカヘラス、ヨテ近比全ク家従等ニ命シテ、カノ人ニ就キテ外国語ヲ学ハシム(事實、則チ第^{〔マ〕}卷参照スヘシ)又

窃ニ互市ノ事ヲモ謀ルナルニ（琉球ニ於テ互市ノコト既ニ和蘭人ト内談ニ及ヒタリ）、本船カシコニ至リコレ等ノヨシヲ見聞シ、江戸ニ洩レ聞ヘタランニハ事六ツカシ、コ、ヲ心得テ今度ノ航海ハ止リ給ハスヤ、ト余儀モナクイワレタリ、勝ハモトヨリ、此人ノ幕府ノ為ニ志厚ク、トモニ開國ノ業ヲトモニス可キ人ト知り、且サル秘事マテ告ケラル、懇切ノ意ニ感シ、ヤカテ船將ニハ他ノ故障アルヨシニコシラヘ、琉球ニハ赴カスシテ直ニ長崎ヘカヘリシトソ、勝氏ノ物語ニ、此時薩摩ハヤクヨリ外交ノ道ヲ開カントシテ、斯クマテ心ヲ用ヒタリ、開國ノ首唱トイフトキハ、堀田氏ヲハシメトシテ、コノ齊彬ヌシコソ第一トスヘケレトイハレキ（勝氏ノ言ノ如キハ弘化元年ノ記事參看）、又コノ人非常ノ豪傑ニシテ、尋常ノ人ノカケテモ及ハス、氣質ヲハシキ父ニテヲハセシ參議齊興ヌシノ妾岡田氏ハ、寵セラレテ三郎久光ヲ生メリ（前左大臣）、岡田氏裔ニコレヲ立ントセシカ、事アラハレタリト、齊彬此人モトヨリ父ノ為ニ愛セラレテ、三郎ハ正シク吾弟ナリ、決シテ疎略ニスヘカラストテ、己カ子無キニヨリ三郎ヌシノ子ヲ養ヒ嗣トセラル、又此人始終幕府ノ為ニ力ヲ竭シ、万事ニ

就キテ幕府ノ為ニ周旋セサル事ナカリキ、サレハ此人ウセテノチ朝幕ノ釁隙ニ及ヒ、終ニ大事ニ至リシトナリ、又勝氏密話セラレン時勝ニ向ヒ、余カ事ヲ管中ニ噂セラルヘシ、イカナル事ヲイフヤラン、聞マホシトアリケレハ勝氏答テ、サレハ候、薩摩ハ人氣強ク、又近比兵艦ヲ造リ武備ヲ修ムルカラハ、徳川氏ニ對シテ不軌ノ謀ヲ懷クモ凶ルヘカラス、ト申テ候ナルト憚ル所モナク申ケレハ、齊彬大ニ打喜ヒ、サモアラン、サモアラン、コノ事ハ我伊勢（阿部伊勢守）ニモイ、ツル事ナリ、ヨロシク我マタ伊勢ニヨクイヒ置クヘシ、心ニナカケゾ、ト事モナゲニイヒケルトゾ、勝コノ時伊勢トハ誰ナラント思ヒシカ、後ニ島津氏ハ幕府ノ為ニ力ヲ尽シテ、殊ニ時ノ老中ナラントニハ親シクセラレシヨリ聞得テ、始メテ伊勢トハ安部（阿部ノ諛）伊勢守正弘ノ事ナリト知りニケル、島津ト阿部トハ親密ノ交アリシトナリ（親交ナリシハ書ノ如シ）

余先年コノ齊彬ヌシカ、堀田備中守正睦朝臣ニ贈ラレタル自筆ノ書牘ヲミシ事アリキ、ソノ書ニ論スル所ハ外交ト徳川家ノ繼嗣ノ事ナリ、外交ノ論ハ極テ愉快ニシテ遠見アリ、諸藩陳腐ノ攘夷說ナント、ハ霄壤ノ別

アリテ、殆ト近世有識ノ説ト異ナラス、又継嗣ノ論モ賢明ノ主ニアラサレハ、カ、ル困難ノ時ハ当リカタシ、ハヤク一橋刑部卿ヲス、メテ、西城ニスヘシトアリキ、勝氏ノ物語ト一々ニ符合ス、齊彬ヌシノ心術ヲ知ルヘシ、明治二十年十二月六日、コノ人ノ弟ナリケル前左大臣久光公薨セラレシニ、報知新聞ニソノ行状ヲノセテ、山内容堂嘗テ高崎五六氏ニイヘラク、前ノ薩摩守ハ人ヲシテ、近ク可ラサル想アラシムルホトノ品高カリシモ、自ラ和氣アリテ人ヲ感服セシムト、又鍋島閑叟・松平春嶽諸老カ言ニ、若シ維新ノ際薩摩藩主ヲシテ齊彬ナラシメナハ、アノ如ク幕府ヲ傷ツケ毀ツコトナクシテ、ヨク之ヲ了シタラント言ヒシトナリ、齊彬ノチニカノ国人諡シテ順聖公トイヘリ、勝氏ハコノ人ノ事ヲ話スルニ、ソノ名ヲ称セス順聖公トノミイハレシハ、コレヲ敬愛セラル、ユヘナルヘシ、

此書ハ事実錯誤スト雖モ、大体其実ヲ尽シタルカ故、誤謬ノ点註記校正ス、

三九五 折ニ触レ御微行民情祝察セラレシ事実

(逸事)

月ノ朗カナル夜ナト、御近習壯年ノ輩ヘ、馬ナラシニ乗廻シセヨト 仰セラレシコト毎々アリタリト、其時御自身ニモ 御乗出シアリシトナム、而シテ御城下近在諸所田地ノ作毛ナト 御巡覽、或ハ市街ノ形況巡視セラレシコトモアリタリト、素ヨリ密ニ 御出ノコトナレトモ、何トナク世説ニ、夜ナノ御微行アラセラルト唱ヘ、僉人謹慎ヲ加ヘタリ、如此民情ノ如何ンニ注意セラレシ故、御徳威信々顯レタリ(御乗廻シノ折リハ、行キ合ヒ奉リタル者モアリシト云フ、或人新上橋川筋樞木馬場ニ於テ、四・五騎ニ行キ合ヒタルコトアリシトナン、森川孫太夫譚)

三九六 大ニ水田ヲ開墾シ玉フ

谷山郷和田村ノ海濱齋崎ヨリ、鹿兒島荒田村砂揚場ノ海浜ニ至ル迄、直線数十町ノ海中ニ杭ヲ打チ、干寄ヲ付テ埋築シ、水陸田開墾ノ御見込ニテ、陸ヨリ沖手ノ方ヘ大凡ソ四・五町乃至二・三町ノ所ニ、杭ヲ打ツヘキ旨命セラレタリ 沖手ノ方ハ直線ニ杭ヲ打チ、陸手ハ自然ニ出入ノ地ナルカ故、必開墾ノ多少アリ、脇田村ノ如キハ突出セル地形ナレハ、沖ノ方ヘノ間ニ三町ニモ足ラサルナリ、安政四年ノ冬ヨリ同五年ノ夏ニ至リテ、数多ノ杭ヲ打チ終レリ、其時分ノ仰ニ、

斯ク枕ヲ打チ置クトキハ、年ナラスシテ干寄リニ埋リ、
勞費少クシテ田畑トナルヘシ、干寄付キタル後石垣ヲ
築キ、波濤ノ防キヲナシ、而シテ水利ヲ通シ水田トナ
スノ見込ナリ、霖雨又大雨ヲ俟チ、各所ノ川々・溝筋
其外雨水ノ流レ来ルケ所ヲ、予テ見計ヒ置キ、人夫ヲ掛
ケ川底ヲ堀リ、或ハ山岳等ヲ崩シ、雨水ノ力ヲ以テ流
シ、干寄ノ所ニ流レ止ル様ニ仕掛ケ置クトキハ、殊更
人力ヲ減シ入費ヲ省クヤ疑ナシ、昔熊澤カ岡山ニテ此
法ヲ以テ埋築シタルコトモ聞キ及ヘリ、佐藤信淵カ説
モ同様ナリ、良法ト思ヘリ、此ノ仕方ヲ四・五年モ行
ヒナハ、其功ヲ見ルヤ疑ナシ、此ノ新田ハ何ソ急成ノ
趣意ニ非ス、徐々トシテ成功ノ見込ナリトノ御言ニテ、
杭ハ即チヨリ打久ヘシト命セラレタリ、因テ戊午ノ夏
御逝去ノ頃迄ニハ打チ終リタリ、御逝去後ハ其促ニテ
別ニ手入レノ道モ廢シタルニ依リ、適々打タル杭モ拔
ケ失セ、干寄付キタルモ流レ去レリ、其後明治五年ノ
春頃ヨリ、前県令大山綱良御遺志ヲ継キ、和田村ノ海
浜ヨリ柏原川尻迄埋築シ（公御目論見ノ凡ソ四分一位ナ
リキ）、水田ヲ開墾セント浪留ノ石垣ヲ築キ、水利ハ和
田川等ヨリ通シ、明治九年ノ冬頃ニハ石垣モ築成シ、

数十町歩ノ水田稍成レリ、今四・五年ノ星霜ヲ経ルト
キハ、悉ク栽培スルニ至ルヘキヲ五・六分一程ハ栽培セシ
ノミナラス、和田村ノ人家等ヨリ穢泥、
流レテ初年ヨリ実成宜シカリシトソ、明治十年八月暴風ノ為
メニ石垣破壊シタリ、惜ムヘキコトナリキ、公尊慮
ノ如ク、数百町歩ノ水陸田ヲ御城下近地ニ築成スルト
キハ、幾干ノ国益ヲ起スヤ知ルヘカラス、加之漸次ニ
功ヲナストキハ、費用少クシテ成功ノ著然タルハ、多
言ヲ要セス、

三九七 諸郷士ノ格式ヲ復旧セラレムトス

薩隅日三州ハ、殆ント七百年來ノ美風習慣今ニ存シ、
全国稀有ノ制度ニテ、今世ニ至リテモ時勢適當ノ事少
ナカラス、中ニモ諸郷士土着ノ制ハ則屯田ノ法、非常
ノ時ハ実ニ弁利ニシテ、治世ニハ耕作ニ従事生活シ、
乱世ニハ兵ニ編シ制御ノ用ニ供ス、元龜・天正ノ頃ハ
諸所ニ御居城ヲ遷サレシモ、土分ノ者移サレタルニア
ラス、御近習ノ者ノミ引移サレタリ、御先代ニハ重役
ヲモ勤メタル者ノ子孫、今ハ郷士トナリ城下ノ士ト一
段格式下リタルハ、他藩新家ノ制ニナラヒタルモノナ
ラン、今ヤ乱兆顯ハレタル世ナレハ、士氣ノ興起ヲ肝

要トス、士氣引キ立ニハ、内外遠近上下ノ親疎ナク、人材登用ヲ專要トス、因テ城下諸郷ノ別ナク古制ニ復シ、親疎ナク人材ヲ撰ヒ政務ニ預カラシメムト、且ツ城下土モ貧窮ノ者ハ諸郷ニ土地ヲ与へ、屯田ノ制ヲ擴張シ生計ニ差支サル様ニシ、今ノ如ク城下ニ屯集シ、書役勤等ノ扶持米ノミヲ以テ生計スル法ニテハ、自然柔弱ニ流レ身体モ強カラス、臨時ノ用ニ立チ難シトノ御言ニテ、其利害得失篤ト及勸考上申スヘシト、關勇助、江夏十郎ヘ命セラレ、兩人ハ素ヨリ冀望スル処ナリシ故・速ニ復旧、屯田法尚ホ御擴張アラセラレタラハ一統敬服、人氣感発ニ無疑旨言上セリト、之レ安政五年戊午ノ夏御逝去前ノ事ナリシトソ、

三九八 櫻島洗出又ハ神瀬其他砂揚場等へ砦堡建

築目論見

和蘭人ハントウエーント申者、前ノ濱へ参港ノ節航海伝習ノ為ニ、幕吏木村振津守及ヒ勝安房、松（頭色）火砲製造元良順、赤松大三郎等兼組タリトソ、守備ノ要所見込ヲ付ケ、或ハ築造法等製図言上可致旨御依頼アリシニ、神瀬ヲ埋築シ八稜形ノ砲臺ヲ設ケ、櫻島洗ヒ出ニハ三稜形ニ築キ、沖ノ小島ハ平坦ニ削除シ、砂揚場ニハ六稜形ニ

築キ、三ヶ所ヨリ挾撃ノ彈線トシ、神瀬ヨリ内海ニ侵入セシメサル様ニシ、而シテ水雷數十個ヲ伏セ、又天保山ト神瀬トノ間ハ埋築スルカ、否ラサレハ砂石ヲ埋メ大船ノ通過シ得サル様ニ設ケナハ、自ラ神瀬ト櫻島ノ間ノミ航線トナルカ故、両方ヨリ砲撃シテ内湾ニ入ルヲ得サラシム、櫻島洗ヒ出ニハ砦堡ヲ築造シ（蘭名ニホト云）、敵上陸之レニ抛ルトキハ頗ル大事ニシテ、神瀬モ保チ難キニ至ルヘシト、詳ニ図記（此図ハ明治十年九月兵火ニ焼失ス、惜ムヘシ、御直書御書入モアリ）シテ呈上セシニ、御意ニ適シ漸次建築セラレムト、先ツ差向キ神瀬ニ試築着手セラレシニ御逝去、遂ニ廃棄シタリ、然ルニ文久三年癸亥七月英船ト戦争ノ後、要衝ノ地ナルヲ以テ御遺志御継述、大建築ヲ開カレ一般感佩セリ、建築ニハ洋学者石川確太郎、ハントウエーント論定ノ図形ニ則リタリ、石川ハ御在世中親シク御計画ノ次第拝承セシ故、建築ノ場ニ至リテ別ニ困事モナカリシト、実ニ御卓見感スルニ余アリ、戦争ノ際此砦堡アラハ、英艦沈滅疑ヲ容レサルナリ、否ラサルモ艦中數十名ノ死亡者アリ、味方ハ僅々二・三名ノ死傷ニ過キス、又敵艦ヲ打撃セシコト少々ナラス、英艦ハ機関ヲ

モ破ラレ遁逃スルコト能ハス、一艘ハ漸ク知輪島沖迄退キ、滯泊數日ノ後挽船来リ、辛フシテ挽キ退キタリ、如此英艦這々遁レタルモ、神瀬ニ砦堡アラハ、一艦モ遁ル、コトヲ得サリシナラムト、当時一般握腕セリ、実戦上要衝ヲ弁セラレタルカ故、戦争後直ニ御建築ニ着手セラレタリ、稍落成ニ垂ンタルニ、廃藩置県ノ大沿革トナリテ全ク廃棄セリ、建築ニ着手セラレシハ文久三年ノ八月ナリ、石材ハ磯櫻谷ヨリ田ノ浦潮音院岬辺迄沿海ノ山ヲ崩シ、或ハ花倉龍ヶ水辺ヨリ運送セリ、櫻谷ヨリ潮音院岬迄ハ満山桜ヲ植、其風致譬フルニモノナク、花ノ時分ハ貴賤ノ遊覧モ允サレ、殊ニ愛スヘキ勝景ナリシカトモ、国家守備ノ要ナルヲ以テ、断然毀テ建築ノ用ニ充ラレタリ、其費用ハ琉球通寶ヲ充ラレタリ上卷鑄錢ノ条ニ記ス、費額凡ノ七万円ニ余レリト云フ

三九九 参考 安政紀事鈔 齊彬公兵ヲ率ヒテ上京セ

ントス

七月十七日

松平薩摩守ニ命シテ当秋参府セシム、薩摩守齊彬当時賢明ノ称アリ、常ニ国事ノ日ニ非ナルヲ憂ヒ、松平越

前守・松平土佐守・伊達遠江守等ト書簡往復シ、讓ヲ東西ニ献シテ国体ヲ振揚センコトヲ謀ル者久シ、時ニ井伊以下政事ヲ紊ルヲ聞キ、親藩ノ幽セラ、ルニ及テ、言語文辭ノ能救フ所ニアラサルヲ知り、将ニ大兵ヲ率ヒテ京師ニ入り、王室ヲ擁護シテ以テ幕府ノ政ヲ匡正セント欲ス、故ニ参府ノ期ニ先ツテ国ヲ発セントス、(須注)吉井友実紀事、宮島誠一郎筆記参照父大隅守ヲシテ、二十日間湯治ト称シテ国ニ還ラシム、薩摩守途中俄ニ病テ卒ス(途中ニ死ス、市街ノ説、実ニ七月十六日ナリ、訃京師ニ達ス、在京ノ志士痛惜セサルハナシ、

四〇〇 久光公国老新納駿河へ与フル書

不勝之天氣御座候へトモ、弥御壮栄被成御勤仕致欣悦候、然ハ昨日税所七郎右衛門ヨリ差出候御用書付致返却候、当御時節実以不容易次第ニテ、此末

京都ノ御都合何様(京都御召云々ハ第(マ)卷ニ記ス、参照スヘシ)可被為在哉ト至極致懸念候、就テハ申迄モ無之事候へトモ、御同席中(国老中)篤ト御評議有之度儀ニ御座候、且上杉侯ヨリノ御封書(御書意知ルニ由ナシ、此書ノ所在分明ナラス)、如何御取計可被成哉承度御座候、

拙者ニモ致出勤(久光公、当時御家老座御出席ヲ云)御内
談申度御座候へトモ、先日御口合申置候通ニ付、此段
以書面得貴意候、以上、

七月二十二日 周防(久光公旧名)

駿河様

安政五年午七月二十二日

四〇一 將軍家定公薨去謹慎布告

公方様去ル八日(七月六日) 薨御ニ付、慎左ノ通、

一 普請ハ日数二十日可相止候、

一家職ニ付音高キ儀并店出シ候儀、日数七日可相止候、

尤モ町家ノ店鎖置候儀モ同断、

一家職ニ付テ致漁獵候儀、日数十日差留候、

一 市ヲ立候儀又ハ商売ニ付大勢相集候儀、日数五十日差

留候、

一 罷月代、日数七日スリ申間敷候、

一 火用心可念入候、

右之通 薨去当日ヨリ可相心得候、日数相過候分ハ不

及其儀候、此旨支配中へ可申渡者也、

八月廿五日 御家老座印

公方様(家定公)去ル八日 薨御ノ段申来候、此旨承知
被仕、宰相様(齊興)、若殿様(哲丸)へ可被奉伺 御
機嫌候、

八月

左衛門(島津久徴)

四〇二 番頭喜入主水ニ江戸在勤ヲ命ス

喜入主水(久高大目付)

右ハ鎌田出雲代守衛方ニテ出府被 仰付候条、仕舞次

第致出立候様被 仰付候、此旨表方へ致通達、奥掛、

御勝手方へモ可相達候、

八月

左衛門(全上)

四〇三 琉球人へ可相尋条々

一 開国ノ始并代々沿革之事、

一 中山ノ祖并代々ノ次第ノ事、

琉球中山王世系王姓尚

永樂二卒

察度

正統三卒

忠

武寧

思紹

景泰元嗣併
山南北

思達

德

正統八卒

巴志

宣威嗣位未幾卒
不及册封

宣威嗣位未幾卒
不及册封

成化十五卒 嘉靖四卒 嘉靖卅四卒 隆慶元卒

圓 眞 清 元

万曆卅一嗣

永 寧 ○ 賢 ○

貞

如此ニノミ相見候、察度ヨリ已前ソノ出自詳ナラス、

其外ノ王ノ嗣位卒年モコトクニ詳ナラス候故、

琉球 留求 龍宮

右ノ内文字ノ異同有之候、必定ノ儀承度候、

一 山南山北ノ次第并中山ヨリ一統ニ并セ候様子ノ事、

首里ノ地形高下平地ニテ候事、阻何程計ノ所、尤城郭

ノ様子可承候事、

一 中華へ使ノ次第ノ事、

附

中華ニテ使人ヲ応接ノ次第、又ハ道駅ニテノ様子

等委細ニ可承候事、

中山王へ賜物并使人へ賜物ノ事、

北京ニテ朝儀次第ノ事、

上表欵移咨欵ノ様子ノ事、

上表移咨ニ不限ソノ文章写之事、

福建ヨリ北京へ道中日数ノ事、

附日本道ニテ里数何程可有之哉ノ事、

惣テ此条ノ次第心ノ及所委細可承事、

一 国ニ史編又ハ記載等ノ物有之欵否ノ事、

一 國中職名并次第ノ事、

一 冠服ノ図并名ノ事、

一 國中名山山水ノ事、

一 物産ノ草木鳥獸ノ事、

附

薬種モ所ニ有之候哉ノ事、

砂糖キビノ事、

砂糖ハ黒ハカリ製法仕候哉、白モ製法可成候哉、

大抵製法ノ様子可承候事、

一 中華ヨリ近年渡リ候人参ノ事、

北京ニテ相調候京撰人参又ハ土木人参等ノ事、段々

委細承ルヘシ、

一 北京ヨリ毎年曆領候次第ノ事、

一 国俗ノ尚フ等ノ事、

一 財貨通用ノ様子ノ事、

一 國民産業ノ事、

一 冠^(船)喪祭等并繼嗣ノ事、

一 海外隣国ノ事、

一 国中学文ノ様子ノ事、

一 文章、詩歌等ノ事、

一 物カキ候モノトモヘ、物カ、セラクヘキ事、

一 四時俗節等ノ次第ノ事、

一 此度ノ行列次第圖ニカ、七置候事、

一 楽歌ノ詞ノ事、

一 惣テ楽ノ名イクツホト有之候欵ノ事、

太平 楽 萬 歳 楽

難 七 楽 三 線 歌

唐 歌

右ノ内難七楽ハ何トヨミ候哉、

惣テコレラノ類トクト承届、如何様ニモ書附申サル

ヘク事、

一 藥物ノタネ何ニヨラス、尤北京・福建ニ不限、道中ス

カラ可相調候欵ノ事、

一 福建へ着岸候テ、何ト申衙門へ案内被申候哉、北京へ

参着候テ、何ノ衙門へ案内被申候哉、福州北京ニテ、

使者屋如何様風情ノ所ニテ候哉ノ事、

一 惣テ琉球ヨリ渡海、北京へ進貢相仕廻候テ、帰国迄日

数、北京へ逗留ノ日数、使人如何様ナル官ノ者遣候哉、

惣テ使正使・副使有之候哉、上下人数何程ニテ候哉ノ

事、

一 琉球船福建へ渡海候船々様子、并薩州へ渡海候船モ同

然ニテ候哉、惣テ図ニカ、七置ヘク事、

附船神ノ事

一 靈ナルヘビ有之由、名ヲ何ト申候哉、文字ニハ如何様

ニ書候哉、形ハ如何様ニ有之候哉、惣テ大サ何程計有

之モノニ候哉、大抵ヲ図ニカ、七置ヘク事、

一 琉球ハ鎮西八郎爲朝ノ子孫ノ由、由緒如何様ナル事候

哉ノ事、

一 福建・北京ニテ聖廟拜仕候哉ノ事、

一 琉球ニモ聖廟有之候哉ノ事、

一 仏法ハ何宗ヲ崇候哉ノ事、

一 婦人・女子ノ様子ノ事、図ニカ、七置ヘク事、

一 父母ノ喪ハ三年ノ喪ヲ相勤候哉、又ハ仏法ノ如ク七々

ノ数ニテ候哉ノ事、

一 福建ハ大形致見物候哉、福州ノ大サ何程計ノ様子ニテ

候哉、城カマヒ如何様ナル事候哉、城郭所々ノ門ノ様
子如何様ニ有之候哉ノ事、

一琉球人ノ寿命スクレテ長寿ナルモノ多有之候哉ノ事、

一琉球神道別ニ一通有之由、何ヲ祖ト致候哉ノ事、

附茶ノ湯イタシ候由、イツレ流儀ヲ学候哉ノ事、

一医者本道外科ハ唐ニテ学候哉、琉球ニ本ヨリソノ術有
之候哉ノ事、

附針医ノ事

一琉球官家之礼式、四拜ノ礼ニテ興拜ヲ仕候哉之事、

一沖繩島那覇湊ハ唐通融ノ湊ニテ候由、運天湊ハ薩州通
融ノ湊ニテ候哉、國頭ト申所モ同然ニ候哉ノ事、

一大琉球・小琉球ハイツレノ島ヲサシテ名ツケ候哉ノ事、

以上

首里ノ地形概略

一首里地形四方ヨリ漸々ト登候テ城ニ入申候、城ノ入口

三方ニ有之候、本筋ハ表坊ヒヤウハンニツ門五ツ通候、城ノ構外

ハ川行廻、其内ニ石垣式重ニ廻又ハ塀楼等有之候、城

ノ差渡一里程有之候、

一唐ノ使人ノ儀、先頃別紙書記申候、

一上表移咨ノ事別紙書記申候、

一国々史編又ハ記載ノ物有之候テモ、当分御当地ニハ何
ソ右体ノ物持来不申候、

國中職名次第之事

唐名特晋封禄大夫挂國

王子正一品

人数不定當時一人

諸司代并王子依勲功此官位賜

唐名封禄大夫元候〔候〕

王子正一品

人数不定當時四人有之

唐名禄大夫進爵元候

王子從一品

人数不定當時四人

按司依勲功王子号賜

唐名永禄大夫邑郡候

按司從一品

人数不定當時式拾七人

唐名隆徳大夫法正卿或加御法司正卿

親方正二品

人数不定當時四人

三司官并三司官位ノ人数、勲功或赤地金入五彩巾

紫地緑地五彩巾或紫地浮織冠ヲ賜

唐名兼憲大夫法司正卿

三司官親方正二品 定数三人

天曹法司典礼正卿

内地曹法司司農正卿

人曹法司司元正卿

唐名隆勲大夫加御法司正卿

親方從二品 人数不定當時三人

親方依勲三司官位賜

唐名親奉大夫郡邑伯紫巾巫卿

親方從二位 人数不定當時四拾七人

唐名宣謁者耳自官並度支官

親雲上正三品 定数六人

唐名正議大夫

親雲上正三品 人数不定當時十二人

久米村人

唐名進頭大夫加御謁者

親雲上正三品 人数不定當時百人余

唐名精粹大夫贊議官

親雲上正四品 人数八人定数

唐名中議大夫

親雲上正四品 人数不定當時三人

久米村人

唐名官候大夫察侍紀官

親雲上從四品 人数五百人定数不定

唐名奉宣大夫過關理官

親雲上正五品 人数五人定数

唐名供直大夫加御過關理官

親雲上從五品 人数貳百人

唐名承直郎儀衛使

親雲上正六品 拾貳人

唐名從務郎

親雲上正六品 百人余

唐名承事郎

親雲上正七品 五百人余

唐名從職郎

里之子
筑登之親雲上從七品 貳・三人モ可有之候

唐名内使郎贊度内使

里之子正八品 貳拾四人

唐名内使佐郎

里之子從八品 七・八拾人

唐名登仕郎点班使

筑登之正九品

九拾人

唐名登仕郎

筑登之從九品

千人余

物產草木鳥獸

一 國中名山水ノ事、風景ヨキ所多有之候、唐人共褒美候

境地モ御座候、

一 物產ノ草木鳥獸ノ事、

三段花 佛桑花

龍眼木

赤木 黒木

榕カマール

で大木ニ成
紅花有 阿檀

福木

ヤラヒ 澤藤

月桔

風蘭 名護蘭

アヲ蘭

藥梨花 蘇鉄

マネ

荔枝 棗

佛手柑

木蘭 交竹桃

右ノ外ハ日本ニ有之候草木ニテ候、花実目ニ立不申、

草木ニハ為替品多可有之候、

海馬 綾鳩

三フカツラ

黒鷄當時ハ不
相見得

コカル

八重山蝙蝠

藥種ノ類輕物ハ有之候、

砂糖キヒ有之、白黒トモ製法仕候、

一 中華ヨリ渡候人參ノ事、

於中華人參国々ニテ作調候様ニ相見ヘ候、製法致シ様不存候、北京・福州ニテ用分ハ唐人ニ頼ミ候ハ、買調申候、

一 北京ヨリ毎年曆頒候次第ノ事、

北京ヨリ出候曆、中華一統ニ用候由承候、琉球ヘモ皇帝ヨリ憲書百一冊毎年賜之候、尤琉球ニテモ曆編集仕候、

一 財貨通用ノ事、

日本ニ差テ不相替候、

一 国民産業日本ニ不相替候、

一 冠婚喪祭等并継嗣ノ事、

初テ冠着候時ハ城ヘ登リ、建上ニテ国王ヘ致拜礼候、

王子、按司ノ子供ヘハ国王ヨリ冠ヲ拜領候、

婚礼大抵日本ニ不相替候、座席ノ作法ハ少々為相替事

モ有之、喪祭ノ事、国司ノ祭ハ於崇廟、規式唐ノ儒法

ニ致候、其外ハ儒仏ノ作法心次第ニ致候、直子無之者

共同姓ヲ以継嗣致候事、

一 海外隣国ハ無御座候、高砂ハ唐ヘノ海路ヨリハ近候ヘトモ、互ニ通融不致候、

一 学文ノ致様ノ事、

往古ヨリ学校所ヲ建置、学頭兩人日々ニ出席シテ、衆ノ学者ヲ致指南候、童子ハ八・九歳ノ時ヨリ学校入、小学ヲ初学ニ致候、其外国中ノ者ハ所々ニ師匠ヲ求致学問候、且又学問ニ器量有者ヲ、国王ヨリ被申付致渡唐、福州又ハ北京ニモ致在唐、学校所ニ入テ致学文候、当时モ福州ノ学校所ニ入置候者共有之候、

一 茶湯ノ事、

喜安ト中人、境ヨリ以前ニ琉球ヘ罷渡教申候テ、于今不絶彼流ノ茶道ヲ用申候、喜安ハ利休直弟子ノ由申伝候、

一 文章・詩歌等ノ事、

文章ハ和漢共ニ用候、詩作ヲモ仕候、稀ニハ大和歌ヲ読候者有之候ヘトモ、聞ヘ兼申候、

一 四時俗節等ノ次第ノ事、

日本諸節句ノ礼式ノ通用申候、冬至並元日・十五日ハ、唐ノ規式ノ通重ク用申候、毎月初日・十五日此兩日ハ、衣冠ヲ改礼儀有之候、

一 此度ノ行列急々ハ難調候、

一 楽ノ歌別紙ニ記申候、

一 惣テ楽ノ数十二有之候、

一 薬物ノタネ等於唐相調可申哉事、

右体ノ物種子等自由ニ求候事難致候、唐ノ地ヨリ外国ヘ出候物ニハ、禁制ノ品多有之由候、惣テ琉球人ノ買物ハ、唐人ニ買渡候人ヲ定置買調申候故、琉球人心假ニ買物等不罷成事、

一 福建ヘ致渡海候琉球船、

唐船ニ少モ相違無之、脱体ノ琉球船ハ唐ニモ日本ニモ様子替リ、一通有之共、薩州ヘハ稀ニ琉球船ヲ差渡、大形薩州ヨリ相渡候日本船ニテ致通融候、附船神菩薩ヲ教申候、

一 靈ナルヘヒ有之候、名ヲハブト申候、文字ニハ毒蛇ト書申候、長サ五・六尺程、尤小キモ有之候、



形大抵如此御座候、

一 琉球使ハ福建・北京ニテ聖廟拜礼仕候、

一 琉球ニモ聖廟有之、春秋ノ祭祀有之候、

一琉球國中ノ仏法ハ禪宗・真言兩宗計有之候、

一父母ノ喪ハ如仏法七々ノ教ヲ用申、五十日過候テ勤ニハ罷出候、内々ハ三年ノ間自分祝儀、年中節句日互ノ礼儀無之候、遊興等ノ儀一切相止候テ、三年ノ間相慎候事、

一福建見物ノ事、

於彼地見物禁制ニハ無之候ヘトモ、中山王ヨリ無益ノ徘徊法度ニ被申付、日歸リノ外用所ヘモ不參候、

一福建省ノ大サ、人家ノ続タル差渡日本道ニシテ四・五里モ可有之ト見及候、城ノ構外廻石垣ニテ候、石垣ノ高サ四・五丈、依所十丈計ニ相見候モ有之、東西南方ノ三面ハ堀有之、城内へ水通シ河船出入仕候、諸衛門モ城内ニ一構々々有之、其衛門ノ内ニ參候ニ付、二重三重ノ門ヲ罷リ通候、城ノ差渡一里計可有之ト相見得候、門毎ニ櫓有之候、東西南北四門又水部門・湯門・井樓門合七門有之候、

一琉人ノ寿命七・八拾歳ニ及ハ稀ニ有之、日本ノ人ニ相替事無之候、

一八幡宮　熊野権現社頭モ有之、辨財天ヲ尊敬シテ如日本諸願ヲ祈申候、外ニ神道ト申候テハ、当分ハ無

御座候、

一外科本道医術ノ儀、古ヨリ琉球ニモ有之候、尤薩州ニ罷渡致稽古者モ有之候、致渡唐稽古仕者當時ハ無之候付、針醫師當時ハ無之候、

一琉球官家ノ礼式四拜ノ礼奥拜仕來候事、

一琉球那覇ノ湊ヨリ、唐ニモ日本ニモ通融致事候、運天

并國頭ト申所ハ、薩州ヘノ通融ノ湊ニテ候、

一大琉球・小琉球ノ事、

大琉球ト申候ハ今ノ琉球國ニテ御座候、小琉球トハ高砂ノ事ニテ候申伝有之候、

右問条ノ趣、耆人ニテ全覚候者無之候付テ、上下余多ノ者ニ問集書記申候故、相違ノ儀モ問々可有之候、以上、

十二月

宴会神歌ノ類

大清道光十八年戊戌（天保九年）八月十二日

仲秋ノ宴ニ付

西勅使様御登城

之時躍ノ次第、

一番

神歌コネリ

同地

トクタントクタントクタンカウ△トクタンカウ△トク
 トクタン、カウ△○○△△△△△△△△△△△△△△
 タンカウ△トクタン、カウ△トクトクタンカウ△○○

入子踊ノ時歌

- 一ケフノホコラシヤ、ナヲニマヤカナタチル(キカ)
- ツホテヲルハナノ、露キヤタコト
- 一九重ノウチニツホテ露マチユス
- ウレシコトキタノハナトヤヨル
- 一ケフノイカラシヤ、タカスイカラシユル(ガカ)
- 首里天カナシ、オヨハスヤコト

中イリコ 但道入子同断

トクトクトクトクトクトクトクタンカウ△△△△△△△△△
 △トクトクトク△トク△トク△トク△トク△トク△△△△△
 △トク△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△
 △△△△△

長イリコ 但道入子同断

トクトクトクトクトクトクトクタンカウトクトクトクトク

トクトクタンカウ△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△
サアサア
タンカウ

ク△△トク△△トク△△トク△△トク△△トク△△トク△△
イイ
タン

ウ△△トクタンカウタン○○○○△△

三ツ入子 但道子同断

トクタントク△△トクタントク△△、トクタントク△△トク
 △△トク○○○○△△、トクタントクタントクタンカウ△△
 トクタンカウタン○○○○△△

- 一東ウチ向テ、飛ルアヤハヘル
- マツニマテハヘル、イヤヒモタサ
- 一庭ニ照ル御月、エンニテリウツリ
- サトシホラシラキモ、ワ身ニウツサ
- 一石ニヤコノイシノ、大瀬ナルキヤテモ(レカ)
- ヲカケホサヘメシヤウキ国世ト、メ

一常盤ナルマツノカワルコトナイサメ

イツモ春クレハイロトマサル

一沈ヤキヤラトメテ花ノモノカタリ

イツマテモアカヌ匂ヒサラメ

一菊ノ匂コ、口朝夕ヲメトメテ

イツマテモ人ノアカヌコトニ

一 按司ソヘカ御船ノ海中ヲシ出レハ

波ハ押ソヘテカセヤマトモ

一 ヲモテハナサカリトモニスシヒカチ

按司ソヘカ御船ノハルカキヨラサ

一 ワカレヨル袖ニ匂ヒウツチタハラレ

面影ノタ、ハ伽ニシヤヘラ

一 ケフヤ御行合ヲカテイロノアソヒ

アチャ、面影ノタツヨトメハ

一 春ニアヤマレル紅葉ハノニシキ

雁ノコエキチト秋ヤシヨル

一 御行合ヲカモトキヤホコラシヤトアスカ

ワカレヨル事ヨカネテヲメハ

一 庭ノマツカセニ袖ヤサソハレテ

スタクトヲカモ、十五夜御月

一 カニアル御座敷ニ御側〔ヨテ丸〕コソヲカテ

ワトヤレハワトヒ、ツテトミヤヘル

一 常盤ナルマツノカワルコトナイサメ

イツモ春クレハイロヲマサル

一 アワヌ夜ノツラサ、ヨソニヲメナチヤメ

ウラメテモシノフ恋ノナラヒヤ

一 思納マツ下ニキシノハイノタチユス

コエシノフマテノキシヤナイサメ

一 七重八重タテル、マセウチノハナモ

匂ウツスマテノキシヤナイサメ

一 アワヌイタツラニ、戻ル道スカラ恩納

タケミレハシラ雲ノカ、ル、恋シサヤ

ツメテ、ミホシヤハカリ

一 ラマン人ヤソロテ、カメ願ヨシヤヘラ

メクミアル御代ヤ、モタヒサカヒ

一 カニアル御座敷ニ、御側寄テ拜テ

ワトヤレハワトヒ、ツテトミヤヘル

八番此時組躍札懸ル

忠士身替ノ巻

八重瀬ノ按司

渡橋名ノヒヤ

小祿里之子

宇地原里之子

國吉ノ子

キヤラチヤコ持

宮里筑登之

護得久シ

門番

外間ノ子

本部シ

高宮城シ

玉村ノ若按司

里川ノヒヤ嫡子龜千代

大村里之子

栗國眞三郎

弟金松

母

池城樽金

本部シ

波平大主

平安名大主

濱元親雲上

東風平里之子

吉田ノ子

森川之子

奥武カ親雲上

盛島里主

崎枝ノヒヤ

屋部下コヲリ

上地カ親雲上

幸地里之子

金ノ磨持

キヤラチヤコ持

幸地眞午

喜 舍 場

着付、八重瀬ノ按司、髮錦ノ入道頭巾・緞子衣裳・羅陣羽織・刀差・大団持・足袋、渡橋名ノヒヤ・國吉之子、髮黒縮緬入道・頭巾・黒サヤ袷衣裳・刀差・脚胖足袋、キヤウチヤコ持、髮カモロ・黒サヤ袷衣裳・脚

胖足袋、若按司、髮半向頭巾、金花并金銀水引差、紕

縞子衣裳裏紕サヤ・紕紗綾足袋、但中入ヨリ黒縞子入

道頭巾、甲・胸当・羅陣羽織錦三・脚胖・長刀持、龜

千代・金松、髮半向頭巾・作花并金銀水引差・紕縮メ

ン裏ヒサヤ衣裳、脚ヘン・紕サヤ足袋、龜千代、笠刀

持出ル、但龜千代中入ヨリアミ笠カツキ、刀差杖持出

ル、敵討相濟、若按司対面ノ時ハカツラ髮ヤ、母垂髮、

紫長巾・琉縫薄衣裳・紕サヤ足袋、波平大主髮黒縞子

入道頭巾、アミ笠カツキ、黒サヤ袷衣裳、縞子広袖羽

織・刀差・脚ヘン足袋、杖ツク、平安名、黒サヤ袷衣

裳、縞子広袖羽織・脚胖足袋、崎枝ノヒヤ・森川ノ子・

吉田ノ子支度、八重瀬ノ按司供同断、

一今日ノ誇ラシヤク、猶ニキヤナタテル

ツホテヲルハナノ露キヤタコト

歌松本アシ

一獅子ヤマリ列テ、ヲトリハネアソヒ

ワ身ヤアソソヘヨ、ヲカテアソハ

一御万人ヤ揃テ、ヲトリハネアソヒ

獅子ヤマリツレテ、ヲトリアソヒ

獅子舞カネ鼓柏子ニテ出ル

歌、カキヤテウフシ、老人夫婦扇子踊

一 今日ノホコラシヤ、ナヲニキヤナタテル

苔テアルハナノ露キヤタコト

一 ラシ列テ互ニハナノ本シノテ袖ニ

匂ウツチ、ナカメヤヒアソハ、イツモハナヤサカリ

歌、湊原フシ、笠ハツシ笠持踊

一 霞立山ノ梅ノハナサカリ、風ニサソワレル

匂ノシホラシヤ

一 初春ニナレハ深山鶯ノ、サクムメニ〔ウカ〕

来ナクコエノシホラシヤ

高〔歌カ〕、ハナレフシ、右同

一 笠ニ音ナイラヌ降ル春雨ヤ

野山タチカクス霞トモテ

歌、立雲フシ、橋掛へ入ル

一 夢ヤチャウン見タヌ百カホノツチヤス

アノマツト川ノユヘトヤヨル

一 百カホノアレハ、アノハツコト川ヤ

ムカシクリ戻チ、見ホシヤハカリ

四番 此時組躍札取ル

団躍 柏子木打候へハ琴三味線歌踊出ル
中躍ノ時一並ニ立

豊平シ 小祿里之子

豊見城里之子

着付、垂髪・紫長巾・作花并金銀水引、ノシ紙差、

琉縫薄衣裳、紕紗綾足袋、

歌瓦ヤフシ

一 夏ヤ山河ノナカレ水タヨテ

ラシツレテ互ニスタテアソハ

歌ツクタインフシ

一手ニ馴シアフキノ、風ノナイヌアレハ

イキヤシワスレヨカ夏ノアツサ

一日モクレテイキユヒ、テカヨ立戻々々

アチャモラシ列テ出テアソハ

歌ウキトマリフシ、北表ノ幕ヨリ出ル

一朝夕カニクレシヤ、ヲメナヒトワ身ヤ

夢ノ間ノウチ世、クラシカネテ

一 アハレシキメシヤウレ、ヲメナヒトワ身ヤ侍ノナシ子

侍ノステ子、父親ニステラレテ、ヒチュヒヲル母ノ口

カスキナラス、大原ニイキヤイ、稲落穂拾テ粟落穂ヒ

ロテ、シニユル命スクテシニユル命ツキヤハ、今日キ

ヤテヤ暮チケフキヤテヤラスカ、アチャモ又シラス此

世界ノ習ヤノカストクカニヤル、ワタヒクレシヤ、ヤ

ア思ナヒヨ、ケフモ押列テ大原ニイキヤイ、稲落穂拾

ヒ粟落ホトウニ、

女子コトハ

一 テヨノ、列テ大原ニイキヤイ、稲落穂拾ヒ

粟落ホトウニ、

男子コトハ

一 神ノ引合ニケフ列テキチャン、カホコトノ

目ノ前ニアルカ嬉シヤ、

女子コトハ

一 イキヤル事アトテ肝ボコヒシユヨカ

目ノ前ニアル嬉シヤ、ワヌニカタリ、

歌、辺野喜フシ

一波ノコエモトマリ風ノ声モトマリ

タヲト按司カナシ、ヲカテステウ

一 アソヒホシヤアテモマトニアソハレメ

シユヨヒ天カナシ御祝ヤコト

三人道行仲間フシ

一 アタラ人間ニ生レヤイラスカ、安々ト

クラス隙モナイラス

乙樽コトハ

一 ノ、罪ノアタカ、難面ヤ三人、

母コトハ

一 アケヤウシノハラスコ、ロクラ聞、

三人道行ナカンカリフシ

一行迷ヒノ、

乙樽コトハ

一 イク先ヤシラス野山サクヒラン、

ナカンカリフシ

一 タクアシニマカラ、

乙樽コトハ

一 カ、ル方ナイラス行衛シラ玉ノ、

母コトハ

一 露ナタヤアラレ雪モ降マサテ、

一 冬ノ山嵐ヤ、アシ本モツマテ肝モキモナラス、

アケヤウイキヤナヨカ

一 高札ノ表心付ミレハ頃日ノコトニ、ムロケテル大蛇(池ニ脱カ)テ

ルモノ、風ノネヨ起チ、御万人ノマキリカツ死ニ及ヒ、

心ヨルモノヤ、肝ノアルモノヤ、御主カナシ御為、御

万人ノ為ニイノリヲシヤケウハ、命チ捨ヨウハ、蛇ノ

イキクナシヤイ、ナシ親ヤタニヨ、引ハラヂキヤテモ、

御助ノアンテ、高札ノアモノ、ヤア君ナヒヨ、生ラヌ

生レ、シチヲクスヨリヤ、トテモワカイノチ蛇ノイシ

キナヤヒ、モト思ナヒヤタスケホシヤノ、

女子コトハ

一 アニヤル事アレハ、誇ラシヤトアヨル、ワカ望叶テワ

カ望遂テ、ヤア君ケイヨ、ヲモテヤクタ、ヌ女ワナイ

ヤレハ、首里御為ナシニ、母ノ為ナシニ、ヲメケイヤ

残テ、朝夕肝尽チ、ヒチユイヲル母ニ孝ノ道ツクス、

男子コトハ

一 君ナヒヤイヘモ年兄ヨヤレハ、残テ母親ノタスケナヨ

ン、

女子言葉

一 先咲ルハナヤ、サキトマタチリル、ヲトク先ナシユル

道ノアルヒ

男コトハ

一 無常ノ此世界ニ跡先ノアルヒ、花ニ吹風トキヤシラネ、

女コトハ

一 姉ノイフル言葉ヨソニナスヤラハ、迎モワカイノチス

テクミヲラ、

男ノコトハ

一 モノ迷ヒシチャメ、肝フレテヲヨメ、

母トワヌステ、マカイ、キユル

女コトハ

一 イタツラニ命捨ホシヤ、ナイラス、ワカ

コトハヨソニナシユンチャコト

男コトハ

一 イキヤシ暮シユヨカ跡ニワナイ残テ

君ナヒカ事ヨ朝夕ヲモテ

女コトハ

一 ヤア思ケイヨ、アマリトクナクナ、互ニ

母親ノ為ニ思立ル事トヤヨル、カヨ〔三カ〕

アルウキクレンシヤタカシチヤルコトカ、

ステ、先ナタル父ノ浦メシヤ

男

一 思ナヒヨ別レ、アチヤカラヤ母ノ恨コト

アラハ、ワヌヤキヤシユカ

女

一 互ニナキ暮チ、ヨソアラハキヤシユカ

イヘモ片時モ急チホシヤノ、ヤアラメ

ケイヨ、後生ノ旅タイモノ、母ヒト目拝テ

心ヤスくトワカレホシヤノ

男

一 若カ母親ノシラハ此カラニ、ヲモテイタツラニ

ナラハキヤシユル

女

一 ヤア思ケイヨ、オメツチヤルコトノワ身ニマダ

アヨソ、大海ニヲレテヲシホ汲カテヤリ母ヤ

色々ニ口メクリカタラ

男

一 物思ハ色ニアラハレルウキ世、油断スナ

互ニ物ヨラメツメテ

女

一 ヤア母親ヨく、ケフヤ雨ハレテ、波モマダ

ナイラス大海ニイキヤイ潮ハナ汲ニ

歌仲間フシ

一 浪アラサアラハ、風アラサアラハ、イキヤシ

ヲメ暮チ、ワヌヤ待ヨカ

女

一 ヤア母親ヨ、ケフヤ雨晴テ波モマダナイラス

大海ニイキヤイシホハナ汲ニ

母ノコトハ立ナカラ唱フ

一 イキヤシカナコナイタ夢シケサアソノ、モノメ〔モカ〕

ツメシチユテ潮花汲ニノカス思ワラヘモノメ

ツラシチユル、ケフヤラメ留マテ側ニヲレヨ

女子

一 ヤア母親ヨ、イキヤシカナケフヤ過シ父親ノ倅

ノマサテワスレクレシヤ

母コトハ

一 ワヌモマタ今日ヤウラキラシヤアスノ〔モカ〕

物メツメシチユテシホ花汲ヨ

女子

一ヤア思ケイヨ、母モワナイヲカテ、残ルコトナイラス、
アチヤカラヤ肝ニ物メツメシチユテ、遊ヒホレスルナ、
トシムツレスルニ、^{〔ナカ〕}

男

一思ナヒカヲテトアソヒホレシユタル、アチヤカラヤ
母ノ側ニヲラニ、ヤア思ナヒ、母ノ為テヤリ

女

一イソラ立戻レ、思ケイカナミタ袖ニ貫留シ別レ

クレシヤ、ヤア思ケイヨ、急チ立戻レ

歌本伊平屋フシ

一ステルワカイノチ女^男一イキヨメ思ナヒヨ、露程モロマヌ
アチヤ、母親ノ鳴チトメハ

女

一ヤアノ高札ノ表細々ニヲカテ、蛇ノイシキ

ナヒカワスヤキチヤン

頭取言葉

一呼啼御万人トタカラ、御万人トコカネ、御主カナ御^{〔脱カ〕}為
御万人ノ為ニ、アタラシカイノチ露程モロマヌ、蛇ノ
イキシキ^{〔キカ〕}ナイカキチメワラヘ、

女子

一捨ル我カイノチ露ホトモロマヌ、ハ、ト思ケイヤ
スクテタホラレ

頭取コトハ

一母ト思ケイヤ、氣遣ハシスルナ、ヤカテ御素立
ノアランシユモノ、タウノ先イヤウレノ

全 一上地時々大屋ヨテヤウレノ

同人

一花ニマキレヨル童年スカタ、イキヤシ列イキ

イユル袖ノナミタ

時ノ大屋子コトハ

一イキヤシ列イキユルワヌモナミタ

歌ヒヤシヤウフシ

一後生ノ長旅ヤイキホシヤ、ナイラス、母ノ為

ヤテトホコテイキユル

時ノ大屋子コトハ

一タウノワウヘ祭トキナタン、カホ時ノ

ナタン、イソチ立ノホリ御祭ヨスラニ

頭取

一 思キリヨワラへ、肝イキヤサアテモ、サタマタル

コトノ、ニヤヨシマレメ、

女子言葉

一 親ノ為トモテステルワカイノチ、ノタイツユ

ホトモヲシサオモフカ、

〔脱カ〕
〔時之大屋子詞〕

一 ケフノヨカル日ニケフノマサル日ニ、ワヌノトキ、ワ

スノシレノ、

御祭ヨシユモノ、御タカヘヨシユモノ、

此童エテホコレ、コノワラヘトホコテ、ヲモチヤラ

ヤマタカラヤ、風ノワサスルナ雨ノワサスルナ、ア、
タウト、

附此時蛇狂ヒ出仕舞有時ニ天ヨリ星下リ、四ツニワ

カ童ノスカタアラハレ、手ニ孝感滅蛇トイフ四字ノ

旗ヲ揮リアラハレ給へハ、忽チ蛇体皮肉分散シテ滅

ス、

但南表ノ幕式校目裂キ出ル

頭取コトハ

一 呼啼天道モ近キ神モアルモノヨシ、

時ノ大屋子

一 ア、天道モ近キ時モアルモノタヤヘル、

〔脱カ〕
〔女子詞〕

一 誠アルコ、ロワカモチヤヒラレハ、神ノ御助ケノアル

カ嬉シヤ、

〔脱カ〕
〔頭取詞〕

一 ヲレヨ、親鹿相ニラマヌコ、ロアテカラヤ、カリ

ヤル百カホノ目ノ前ニアオン、タウ、ワラへ、共ニ

ヲシ列テ、此事ヤ戻テ御主加那志天ニミヲヨシムケ

テカラヤ、肝ホコヒメシヤウチ、ヤカテ御助ケノアラ

ンシユモノ、

母コトハ

一 ヤア龜千代、ヨソノイフル言葉、ケフトワナイキチヤ

ル、サリシヨモワラへ、サカシ事タクテ、ヒチユヒヲ

ル母ニワ肝ツマチ、

男

一 思ナヒカ事ヤトメテ留ナラス、母ノ為テヤカ命ヨステ

シ、

女

一 ナン子先ナシヤイ、親タモノヲマチ、親ノ為テスヤ無

理ヤアラネ、カニヤルコトアスカ、ヒチユヒヲル母ニ

ノテヤカ百カクシカクチアタリ、思ハマタクレシヤ、

サカシモ、ワラへ、カニヤル事^{〔タクデカ〕}アテ、ワ列^{〔肝カ〕}ツマチ、畜
生ウマレタメ、ヒチユヒラルアネノ露ノ身ノイノイノチト
タルワラへ、イチモイタツラニシチヤル事タイモノ、
ムロケテル池ニトマイツキヤ、共ニ蛇ノイシキナイカ
イカンシユモノ、

頭取

一 コレキチヤメ、人ノキヤ、是見チヤメワラへ、神仏テ
スモ、外ニ又アルヒ、是ト神ヤヨルソロテ拝メ、御肝
アル御主ノ、ヲヘスコトヲリテ、^{〔ウガカ〕}思ワラへ列テ、誇テ
イキユル、ヤアアレヨ、親子列モノ、道障リシユ
ヨシ、道障リナヨシ、

女子

一 ヤア母親ヨ、

母言葉

一 玉金^{〔チンカ〕}チユヒ子イキチヲタメ、

歌東江フシ

一 アケ、イキチヲタメ、

〔脱カ〕
〔母詞〕

一 ヤアナ子、物迷ヒシチヤメ、カニヤル事シチヤチ、
ヒチユヒラルハ、ニモノヨロマチ、

女子

一 母ノウキクレシヤ、忍デシノハラヌ、ワ身ニ引受テ助
ケホシヤノ、

母コトハ

一 ヒチユヒラル母ニ朝夕物思マチ、親ノ為テスヤ無理ヤ
アラネ、

男子

一 ヤア思ナヒヨ、イサヤル事アタラテ、イキチキチヤカ、

女子

一 ヤア母親ヨ、ヤア思ケイヨ、大蛇テルモノ、水ノハナ
サカチ、火ハナ吹キチラチ飛付ル内ニ、天ノ雲サリテ
空ニモノ音ノアントメハ、頓テ御神アラワレテヲコト
ハノアレハ、ミス、リノアレハ、火花吹キ大蛇、モ、
カ、ミカ、テ、雲ニナテウセテ雨ニナテウセテ、露ノ
我カ命ヤスクテキチヤル、

頭取

一 五ノ謂言葉ヤ、イヤハイツキヤテモ、トウ、百カホ
ノ目ノ前ニアモノ、

母コトハ

一 百カホノアスヤ、イキヤル事ヤヨリ、

一 母モ思ケイモ思ナヒモ揃テ、肝留テ拜メ肝ソロテ拜メ、

御主加那志御言葉ニ、此ワラヘ肝ヤ天ニサシシキテタ(レカ)

、ナラヌ事ヨ、マ、ナラスコトヨ、天ノサシ、ルメ神

ノ引合ソヨ、御主加那志御子思ケイト思ナヒ、又思ワ

ラヘテスモ思ケイトラメナヒト、トシヤイトニヤイト

ヤレハ、思ケイヤチユツ、ムコトラニ、思ナヒヤチユ

ツク嫁トラニ、ケフ明日三十日ヨカル日撰ヤレハ、御

祝事メシヤイル御言葉ノアモノ、波ノコエモトマレ風(義脱カ)

ノ声モトマレ、母モ思ケイモ思ナヒモソロテ、肝留テ

ヲカメ、キモソロテ拜メ、

母コトハ

一 カワヤイル百カホヤ、夢ヤチャモ見タス、ワトヤレハ(三カ)

ワトヒツテト見ヤヘル、ヤアナシ子百カホノアレハヨ

クラメヂヤシユル、捨テ先ナタル父ノ浦メシヤ、

頭取

一 ワスタキヤテケフヤ誇シヤトアヨル、トテモ押列テ御

祝コトハシメ、躍テ立戻ラホコテ立戻リ、

歌屋慶名フシ

一 親ノ為シチャル肝ノアタナラス、神ノ御助ノアルカ嬉

シヤ、

一 今日ノ誇ラシヤ猶ニカ子タテル、苔テラルハナノ露キ(ナカ)
ヤタコト、

七番

魔ヲトリ

幸地

安里里之子

勝レ真市

着付、髪半向頭巾、金花并金銀水引差、板ノ縮緬裏紙

サヤ衣裳・錦ノ引羽織・紙サヤ尼袋・赤白青紺四宮

ノ魔ニ充腰ニ差出ル、

歌辺野喜フシ

一 波ノコエモトマリ風ノ声モトマリ

タヲト按司カナシヲカテステウ、

同浮島フシ

一 アソヒホシヤアテモ、マトニアソハレメ

シユヨヒ天カナシ御祝ヤコト、

三人出羽サン山ブシ

一 誠カヤ実カ、ワ肝ホレノト寝覚驚ノ

ユメノコ、チ、

三人道行仲間フシ

一アタラ人間ニ生レヤイラスカ、安々ト
クラス隙モナイラス、

乙樽コトハ

一ノ、罪ノアタカ難面ヤ三人、

母コトハ

一アケヤウシノハシヌコ、ロクラ闇ニ
〔ラカ〕

三人道行、ナカンカリフシ、

一行迷ヒ〜、

乙樽コトハ

一イク先ヤシラス野山サクヒラン、

ナカンカリフシ

一タ、アシニマカラ、

母コトハ

一露ナタヤアラレ雪モ降マサテ、

子持フシ

一冬ノ山嵐ヤ、アシ本モツマテ肝モキモ

ナラス、アケヤウイキヤナヨカ、

乙樽

一御気張ヨメシヤウレ頓テ夜モ明ル、

母

一肝ラステイキユン、シハシヤスマ、

乙樽コトハ

一ヤア、アヤ前ヨ〜、

母

一肝モキモフラス、シハン休マ、

村原コトハ

一ヤア〜、カニヤル霜降ニコカト山道ニ、イキ

ヤシチャル事カ二人ノモノヤ、

乙樽

一首里カラトヤスカ、旅ノ上ノ習ヤ、

村原

一ヤア母親、ヤア乙樽、

〔脱カ〕
〔母詞〕

一ヤア村原、按司ソヘト、モニナル筈ノモノ、主ノ恩

忘ヒ孝ノ道シラス、ノ、ツラノアトテ、トマヒテキチ

ヤカ、浅マシヤ村原、命ノアタラシヤヒ、トチ子ノ情

ケ、シノハシヌアタメ、
〔ラカ〕

母コトハ

一ナマノコトヤレハ、誇ラシヤトアヨル、肝ニ

キモ添テ念ノイカヨ〔レカ〕

村原

一 思子為テヤリ女身ハ独ヒ、敵ノ手ニヤラス事ヤナラス、

乙樽

一女マタヤテモ、男又ヤテモ、思子ノ為ニキモヤヒトツ、

村原

一 肝ノ上ノ事ヤヲノ筈トヤスカ、氣ニマカチ濟メ義理ノ

ナラヒ、

乙樽

一 義理ノ道テスモ、君親ノ為ニ肝尽外ノ事ヤナヒサメ、

乙樽

一人ノ願事ノアタニマタナヨメ、コ、ロ安ス〔ト〕御待

チメシヤウレ、

乙樽

一 我胸ニ留テ我肝ニ染テ、仰ス事尽ニ念ノイラニ、

〔脱カ〕
〔村原詞〕

一 若カ事洩テナラヌヲノ涯ヤ、別ニ計ラトル手段又アモ

ノ、後ウヌコトニ巧テラル次第、親子此三人カクレト

ル段一々細々白状ヨスレ、ア、操返ス〔ト〕、又事ヲヤ

スカ互ニ面目ヤラシナワヌヨニ、君子引取要メ所、エ

ヒ能々分別頭目トヤヨル、ヤア乙樽、ヤコタ、ヌ我身
ノトジナタル因果、ア、口惜ヤ、

乙樽

一 タトヒ事洩テ生殺シサレテタイ、君子〔ヤカ〕

イヤレハ残ル事ナイラス、心安ス〔タメ脱カ〕〔ト〕極楽トヤヨル

村原

一 ア、言ル事ヨ聞ハ肝ニヒシクト、ムカシ物語聞ユルコ

トニ世ノ中ノ手本沙汰ト残ル、

乙樽

一 此子乙松ヤ御素立ヨメシヤウチ、人ナヨルコトニ計ヤ

ヒタホウレ、

村原

一 念遣スルハ〔チカ〕ヲノ素立シユモノ、スト子ノ子ヤ氣遣スル

ナ、

乙

一 ヤア、ヤ前ニ〔ヨカ〕、頓テ我カ思子ヲカテコンシユモノ、肝

願ヨシチヲテ御待メヤウレ、

母コトハ

一 義理ノ道ヤレハ留テトメラシ、

乙

一 ヨソシレテカラヤ、大事アラヌシユモノ、急チ立戻テ
待ヒイマウレ、
(ヤ脱カ)

伊野波フシ

一 ノカストコカニヤル夢ノ世界ヤ、

乙樽

一 胸ニ物ヲメハ、アユモ道程モ覚ラスニツキヤサ本ノ城、

乙

一 覚ラスニ谷茶城(元カ)ヘニツチヤン、モノメツメシチヲテ、

案内ヨスラニ、ヤメ(アカ)ヘ御取次願マ、物シラレシヤヘ

ラ、

門番コトハ

一 ハア無作法(ナカ)ヘ、内原ニイキヤハ御取次シヤウレ、

全

一 ハア言ル事ヲ聞ハ無蔵(ナカ)ニモノ、タウヘムマニ待ヒラ

レヨヘ、

全

一 拝レヨメシヤン、アリニ居ヤウレ、

谷茶コトハ

一 ヤアヘ大川ノナシ子、乳母テル女キヤアレハ濟カ考

テミヤウレ、

石川

一 拝留ヤヘテ、ヤアヨシレトル女出スヘ、

下部言葉

一 サアヘ、御前寄テ拜メ御側ニテ拜メ、

同人

一 タウヘ、ムマニ居ヤラレシ、

満納コトハ

一 ハア、好テコノマラヌ天運ノ廻ヒ、勘違スルナヘ、

全

一 イヤヘ村原ノヒヤニ、ナシフモノヲラス、巧テヲル

コトヤイカ程カヤヨラ、ヲカトシカスマヌ女ハラヘ、
(チカ)

石川

一 我々ノ一事ハカラヤヒラレハ按司屋百事ノ御計アヨシ、
(モカ) (チカ)

乙樽

一 按司モワナイスカヌ楽モ又スカヌ、ワスタツキヤテモ
(チカ)

女身ノ習ノ義理曲テナレル道ノアヨメ、

谷茶

一 イヤク、ナルノコト愚痴ニカタマトルムサヤ
(マカ)

素立ヒモナラヌイソロ戻ヤラレ、
(チカ)

乙樽

一 コマカラテ命〔カカ〕ヤ継ナレハ死メ、物乞ニナテモ

命ヤ継ン、タウ〔許カ〕メチ給フレ、

谷茶

一 イヤ〔カカ〕〜

乙樽

一 義理ト按司ヤユル、無理ナ事メシヤウナ、

谷茶

一 イヤ此按司ノ言葉キカナラハ、ソナタ一刀ニ

命チツフチトシサ、〔ラカ〕

〔乙樽〕〔脱カ〕

一 殺シユラハ殺ス、ヲトロシヤ、ナイラス、生々ト命ノ

死モ死レラス、恥走フリ捨テ此ナヒニナトル、露程ノ

命惜ム事ナヒラス、仕合トヤユル、殺ス〜、

谷茶

一 ハアヲレ是モヨタシヤ、イツマテモ待ン、イヤレル

コト済ム、ヨタシヤ〜、

乙

一 ア、タウト、御情ノ光リ照リマサヒ〜、百年イツマ

テモヲカテヤヘラ、

村原

一 ヤア〜乙樽カ兼テ内通ノコトニカタ討トルハ、御運

廻リ来テケフノヨカル日ニ立ヨ出シ、〔ラカ〕

原國兄弟コトハ

一 クツキヤウナ時節、ヲクレテヤ済ヌ、片時モ急チ御供

シヤヘラ、

乙樽

一 フソカセモスタシヤ、風マヤト、モニ〔スカ〕

ヲシ列テ互ニ遊フ嬉シヤ

乙

一 君子取戻チ透間ハカウヤヒ、出入ノ人ニマチリ出ル、

〔喜瀬の大屋子〕〔脱カ〕

一 鬼瀬タヤヘル御供シヘラ、〔ヤ脱カ〕

谷茶

一 ア、サテモ〜、ヤア石川ノヒヤ〜、

石川

一 フウ、

〔谷茶〕〔脱カ〕

一 大川ノナシ子盗取テ逃ル、急チ追付テウハヒチラニ、〔下カ〕

サア〜急ケ〜、

石川

一 ヤアノ大川ノナシ子盜取テニケル

急チ立出テ御供シヤウレ、

谷茶

一 イヤ供列レモイラスイソケノ、

同人コトハ

一 アレヨノ恩儀忘却シ情切屋カラ、

乙

一 ヤアノ村原ヨ始、原國カナン子ヲメ子御迎ニ忍テキ

チヲヨシ、此間ノ恩ニ告ル事タイモノ、急チ立戻テイ

ノチトルナ、

乙

一 イヤ仕合トヤヨル、村原モトモニ、

ヨセヨラハヨスレ、〔セカ〕切果チトラサ、

村原

一 ヤア谷茶、欲悪ノ報ヒ武運尽チ果テ、村原カ前ニ廻テ

キチヤメ、

全

一 イヤノカスマヒ、

原國兄弟コトハ

一 ヤア谷茶、原國兄弟カ待受テヲタス、シツチヲタメ、

谷茶

一 イヤ一ツカノシタラヌスイサンナワラヘ、

原國兄弟

一 ヒヤアヤヒ、

村原コトハ

一 谷茶アマヤ、原國兄弟カ打トヤヘタン、

瀬底下コヲリコトハ

一 兄弟ノ手柄ナラフモノヲラス、

村原

一 神妙ナコトノ、

若按司コトハ

一 ヤア村原ヨ、

村原

一 ヤア思子、

東江フシ

一 ア、ケ、夢カヤヨラ、

村原

一 ア、拜テナク事ヤ夢カヤヘイラ、過シ

按司ソヘモ嬉シヤメシヤイラ、

全

一ア、思子モ拜テ敵モ討スマチ、カニアルホコラシヤ、

物ニ立ラ、ヌ、タウ／＼本ノ御城ニ美御遣拜ミヤヘラ、

若按司

一嬉シサヤ互ニ躍テ戻ラ、

〔脱カ〕
〔村原詞〕

一嬉シサヤ躍羽御供シヤヘラ、

歌シユラヒフシ

一御代継ヨメシヤウチ、本ノ御城ニ御懸オサイメシヤラ

レ玉ノ思子、

九番 此時組躍札取ル

天川ヲトリ 柏子木打子候得ハ歌
三味セン手毎ニテ出ル

末吉 國頭子

豊平子 小祿里之子

着付髪垂髪・紫長巾・作花并金銀水引

熨斗紙差・琉縫薄衣裳・紕サヤ足袋

アマ川フシ

一天川ノ池ニ遊フウシトリノヲモヒ羽ノ

チキリヨソヤシラス、

仲順フシ

一ワカレテモ互ニ御縁アテカラヤ、

糸ニ貫ク花ノチリテノチユメ、

供コトハ

一疑ヤナイラス、萩ハ大城ニケ村ノウチカラヤ

サカシ出シヤヘン、

歌イキンタウフシ

一風車ヤトレハ風列テメクル、ワスヤドシ

トマツテ遊ヒホシヤノ、

〔脱カ〕
〔金松詞〕

一ヨツ／＼／＼、

乳母コトハ

一ヤア思子、急チ入メシヤウレ、大道ニ出チテナマノコ

トメシヤウチ、ヨソノメニカ、ラトキヤイキヤカ又メ

シイラ、

外間ノ子言葉

一ヤア供ノキア、アノ童二人ヤ肝フシキテヤイモノ、行

スリノコト出テ、道ノ人ニ宿主ノ名字尋ヤイキヤウキ、

侍ノコトハ

一拝留ヤヘラ、

歌伊計ハナレフシ

一勝レノ島ヤ通ヒホシヤアスカ、ワニヤマシヤウノ潮ノ

ケヤヒアクテ、

一ヤア草切ヨ、アノ宿ノ主ヤイキヤシチヤル人カ、

草切コトハ

一コノ村ノ頭取、トマリノヒヤ宿タヤヘル、

一又頃日首里方ノ人ノ宿カヤイランテイフスカ、聞ホシ

ヤヨアソノ語テクレヨ、
(モカ)

草切コトハ

一宿人ヤ女ワラヘ三、四人タヤヘル、

供コトハ

一ヨカ人カ百姓カ、

草切コトハ

一百姓ヤアヤヘラス、ヨカ人ノコトクアヤヘイル、先通

ヤヘラ、

供コトハ

一問尋ヤイキヤアヘタン、此村ノ頭取泊ノヒヤ宿タヤヘ

ル、又宿人ヤ女ワラヘ、三・四人、ヨカ人トヤルテヤ

リ草キリノイヤヘン、

(腕カ)
〔外間ノ子〕

一ア、思タコトカナテエコトヤキチヤン、大里ノカンタ

シノテカクレトス疑ヤナイラス、トウ／＼屋敷取囲テ

フミ入ヤイ、タ、クムセメテキヤウレ、
(カ)

供コトハ

一ラフ、イヤ、ヌカサヌ、

虎千代コトハ

一アイツ／＼、

供

一イヤヌカサヌ、

金松コトハ

一アイツ／＼、

乳母コトハ

一ヤア／＼イチャルコトヤトテ、今ノコトメシヤイカ、

供コトハ

一イヤ推参ナトイフナ、急チ立ヌケヨ、

ヲナチャラコトハ

一アケウ玉金、

金松コトハ

一ヤア母親ヨ、アチャカラヤ、ヤキ前ト二人、風車モエ

ヤヘラス、イヌモエヤヘラス、殿内カラ外ヤ庭モ出テ

ミヤヘラス、カスシマラシユカユルチタホウレ、
(ルカ)

乳母

一 アケヤウ、アテナシノオノ科ヤアラス、ヤアオメ子、
敵ニトレラレテイキヤカタイメシヤイラ、
ヲナチヤラコトハ

一 ヤアノ、ヨシノアトテ、ナマノコトメシヤイカ、
罪科ヤナイラス、ユルチタホウレ、

供言葉

一 ラウ、イヤイソチ立く、

ヲナチヤラコトハ

一 ヤアノナシ子フヤカレテヲラレヨメ、ワヌモ諸共ニ
シマテ列テタホラレ、

供言葉

一 イヤイシヌコトイフナ、

虎千代言葉

一 ヤア母親ヨ、イツマテ名残、頼テ思キヤイ、ナミタ押
ヌコテ内ニ入メシヤウレ、ヤア、ソマアヨ、敵ノ手ニ
カ、テ出立ル涯ニタ、ナキモスマヌ、頼テ母親ヤ内ニ
ランツリイスレヨ、

外間ノ子コトハ

一 ヤア供ノキヤ、イソチ引立レ、

供コトハ

一 ラウイソチ立、

歌伊野波フシ

一 アケヤウ神仏、アルモノヨヤラハ、哀コノウキ目スク
テタホウレ、

外間ノ子コトハ

一 ヤアノ思子大里ノカンタカラメ出チキヤアヘタン、

若按司コトハ

一 ヤアヤカア、カラメ出チチヤメ、

外間ノ子

一 ラフ先萩堂村ナカイ、エノヒカクレヤイヲタスカラメ
出チキヤアヘタン、

若按司コトハ

一 ア、出来タノ、ヤアヤカア、ケフヤ夜暮テヲスノ、
ヨラ格構シメテヲケ、アチャ、馬天濱出チ、切ステ、

クウニ、

外間ノ子

一 拝留ヤ人テ、

一 アケヤウ玉金、情ケナイヌ武士ノ、百ヲトシ威チイキ
ユラテヤリトメハキモ、キモノナラス、ワヌヤコマヲト
テ一人徒ニコカレ死ナヨリカ、無常ノ世ノ中ヤ稲妻ノ

光水ノ泡コ、口残ル人ナイサメ、頓テ消果ル露ノ身ヨ
ヤレハ、玉コカネトマテ一道ナヨシ、

〔脱カ〕
ヲナヂヤラ

一大里ノ按司ノヲナチヤラトヤヨル、玉金二人敵ニトレ

ラレテ、ツレテムチヤラトメハ、肝モキモナラス、コ

マヲトテ一人コカレ死ナヨリカ、玉金追ツキヤハ^{〔引カ〕}一道

ナヨシ、ヤアノ原人ヨ、玉金子ヤ、此道カムチヤラ

此道ヤイカネ、ノカス玉金行先モシラス、

子持フシ

一我謝ト與那原ノ浜ニナク千鳥キケハヨクマサテ、二人

カ面カケノワカ袖ニスカテハナチハナサラヌ、任馴シ

城見タンテヤリスレト、夏雨カナミタカキクモテメラ^{〔引カ〕}

ヌ、アユマラス浜路アトニ立戻ル、足モヒカレラス、

キモクレテイキユン、

乳母コトハ

一ヤアヲナチヤラノ前ヨ、コマヤ場天濱、コマヲテヤス

マス、タウノイソチ御立メシヤウレ、

ヲナチヤコトハ

一肝クレテイキユン、シハシヤスマ、

若按司言葉

一出様来ル者ヤ大城若按司、ソヘカ敵大里ノナシ子、場

天出チ殺サセカイキユン、

外間ノ子

一ハテンハマチヤアヘタン、

若按司言葉

一ヤアヤカア、急チ切ステラスヨ、

外間ノ子

一拝留ヤヘ、

ヲナチヤラコトハ

一ヤアノヲノワラヘ二人ヤ、ノ、ヨシノアトテイキヤ

カメシヤイラ、

外間ノ子

一コノ二人ヤ大里ノナシ子、大城若按司ノ敵カタキヤト

テ、ユルチ置ナラス、殺チテラシユン、

ヲナチヤラコトハ

一ヤアノ大里ノ按司ヤ、イキヤシチヤル科ニ殺サレテ

イマイカ、

外間ノ子

一大城世ノ按司、殺チアル科ニ殺サレテイマイン、

ヲナチヤラコトハ

ヒトコロチアルムクヒマタ殺サレテヲレワ、ノヨテ罪
ツクチナシ子迄殺ス、

外間ノ子

一イヤ／＼推參ナコトイフナ、急チ立ヌケ、
ヲナチヤラコトハ

一ヤア／＼ワヌヤ大里ノ按司ノヲナチヤラトヤヨル、ワ
カ按司ヤコロチヤレハ、敵討ヤスタン、ノ、罪モナイ
ラヌワラヘアテスタン、ノ、罪モナイラヌワラヘアテ
ナシニイラヌツミカケテコロサセヨメシヤイカ、慈悲
ヨ御情ニ助ケヤヒタホウレ、

外間ノ子

一イヤ／＼キハマトルコトノシノキシノカレメ、タウ
／＼急チ戻テイマウレ、

ヲナチヤラ

一ヤア／＼願テ自由ナラヌコトヨマタヤラハ、コノ母ノ
クレシヤアハレシレメシヤウチ、シメテ兄子ヤユルチ
タホウレ、

外間ノ子

一ヤア思子、ヲナチヤラノ御願ナマノコトヤレハ、二人
共ニコロシユスヤシノハラヌアヤヘモノ、弟思子ヤナ

マ童ヤレハ、母添テ津堅島ニ御流シヨメシヤウチ、片
時モ急チ兄思子コロシヤヘラ、

ヲナチヤラコトハ

一ヤア／＼願ノコトヒチユヒ御助ノアラハ、是非共ニ兄
子ヤユルチタホウキ、

外間ノ子

一イヤ／＼殺シユラハ、トテモ兄思子殺チ弟思子ヤ残チ
ヲキヤヘラ、

若按司コトハ

一タウ／＼イフルコトニ急チ兄子ヨ殺ス、

〔(脱カ)ヲナチヤラ〕

一ヤア／＼此涯ヨヤレハノ、御ハツシヤカ、カクチヲテ
スマヌ、イヤナ又ナヨメ、アノ兄(子脱)ヨ虎千代ヤマ、子ト
ヤヨル、アレカ母親ヤ、草葉ノ露ト消果テコノ世ニヤ
ヲラス、トナシ子トヤヨル、弟子金松ヤ直子トヤヨル、
片親ヤ残テヲレハ弟子殺チ、慈悲ヨ兄子ヤ生テタホウ
レ、

若按司

一謂言葉ノ色ニ義理情含テ、聞ル袖マテモ匂ヒノシホラ
シヤ、

外間ノ子

一メシヤイルコト、聞ル袖マテモ露ノシケサ、

若按司

一ヤア供ノチヤ、イソチ虎千代金純ヨ解ユルス、ヤアヤ
カア、ヲナチヤラノ御シナマノコトヤレハ、虎千代ユ
ルチ金松金ヤコロス、

虎千代コトハ

一ヤア母親ヨ、ワヌヤ年月ノカシラクタメテト、サキヤ
生レタル、弟サキナシユメ、金松ヤ生テワヌコロチタ
ホウレ、

ヲナチヤラコトハ

一ヤア虎千代ヨ跡先トナヨル、ワヌモ後生イカハ按司ソ
ヘト母親ニ面ウチ向テ、イコト葉ノナイラス今ノコト
テヤイモノ、頼テ玉金義理ヨ聞留リ、ヤア金松ヨ、マ
、子ヨテヤインスワヌヤニクマネハ、ノヨテ直子ヨニ
クサテヤイ思ヌ、義理ノ重サアテナマノコトテヤレハ
肝ニ思染テ母ヨウラメルナ、マコト後生アラハ過シ按
司ソヘト、虎千代カ母ヲリテ、^{〔分カ〕}ミスクランミユケレヨ、

金松言葉

一ヤア母親ヨ、此事ヤ肝ニ思染テヲモノ、後生イカハナ

マノヤウランミユケヤヘラニ、

若按司

一ヤアヤカア、ノ二人トワヌヤ、互ニ敵カタキヤテモ、
^{〔ラカ〕}トナラヤラノ御シナマノコトヤレハ、ユルシ置アテモ
氣遣ヤナイラス、タウノ二人共ニユルチヤラス、

外間ノ子

一拝留ヤヘテ、ヤアヲナチヤラノ前ニ、御志若按司ヤ感
シヤイ、二人共ニ御助ヨメシヤイン、タウノヲシ列
テ御戻ヨメシヤウレ、
^{〔脱カ〕}
^{〔ヲナチヤラ〕}

一ヤア若按司ヨ、ケフノ御恩トウトサヤ、長浜ノ真砂ヨ

ミヤツクストモ、イコトハニ出チイチヤツクサラス、
若按司ノ十百歳願ヤ、朝夕胸内ニ願テヲラニ、ヤアナ
シ子ケフカラノ先ヤ、テキカタチトモナ、行スエヨシ
^{レキリヒ}
ヤヲトシスレヨ、

虎千代

一此御恩トフトサヤイツシ忘レヨカ、互ニ行スエヤ御ト
シスラニ、

若按司

一ヤア虎千代金、ヤア金松金ヨ、互ニ敵カタキトヤオモ

ナ、トシニスラニ、タウ／＼今日ヤ誇ラシヤノ、ヲシ
列テ互ニ躍テワカラ、

虎千代

一タウ／＼ヲシ列テ踊テワカヤヘラ、

歌アケジンニヤコフシ

一ケフノホコラシヤ、木草イロカワテ

旱シユルコロノ雨チヤタコト

十一番

唐棒 柏子木打候へハ、太鼓トラ柏子ニテ出ル、

宮平カ親雲上 西平カ親雲上

宮城筑登之 本村カ親雲上

國頭カ親雲上 喜友名里之子

着付仲秋ノ宴同断

右仲秋宴并重陽宴之時、躍番組人数書・着付如斯御

座候、以上、

大清道光十九年己亥(天保十年)七月

躍奉行

名護里之子親雲上

武村親雲上

宇地原親方

羽地按司

以上在番奉行琉球政庁ニ命シ、取調上申セシメタルモノ也(安
政五年戊午二月鹿兒島ニ送ル)

(伊波普猷全集にて校訂)

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に、「元国事鞅掌史料（紙数八九枚）」の記載あり〕

目録

都日誌上有馬新七

都日誌下全上

有馬新七建言

有馬新七山縣半藏三條前内府公ニ上ル封事

安政四年巳十二月江戸邸ニ於テ建言

四〇四

都日誌上有馬新七武満或ハ正義〇変名ニハ毛利

平右衛門・中根仲之助・岡本文次郎ナト、時ニ依

リテ唱ヘタリト云、

往ニシ年（安政三年）ヨリ武満鳥カ啼ク東国ニ居タリシカ（遊学生タリ）、此度玉シキノ平ノ都ニ参上ラムトス、抑如此都ニ思立ツ事ハ、今年安政五年戊午ノ年ノ春ノ頃ヨリ、征夷府ノ政令コヨナク（橋カ）橋乱テ、睨メキ国ノ夷狄等参来テ大將軍ニ謁見エ、シカノミナラズ 勅命ヲ背奉リ、通商ヲ免許シ条約ヲ定メ、彼ノ邪教寺迄造建ル事サヘ夷狄等ガ心ノ俣ニ成行ヌ、然在ルニ今掛マクモ宸極（ニカ）コ照臨坐ス我ガ 天皇命ハ（御諱ヲ統仁ト申シ奉ル）英明シク神武ク坐、 皇祖神命ノ御事依シノ随ニ天地ヲ所知食シ、細戈千足国ノ威武ヲ振ヒ、夷狄ヲ払ヒ平ケ、浦安ノ安国ト安ラケク御代シロシメサムヲ、綾ニ畏キ大御心坐シケレバ、イタク夷狄等ノ猖獗ヲ憤リ、征夷府ノ暴政ヲ歎息カセ給ヒ、再ヒ勅命ヲ下シテ征夷府ノ政ノ正シカラヌヲ正シ給ヒ（堀田備中守ニ関ス）、殊更ニ水戸中納言（慶篤）ニモ 勅命ヲ下シ給ヒテ、速ニ国々ノ国主城主ニモ 勅書ヲ達シ、暴政ヲ正シ侍ル可キト蔽ニ懇ニ御言依シ給ヒシカド、中納言果断ナクシテ、却テ奸党太田（備中守）・間部（下總守兩人共ニ老中職タリ）ノ為ニ欺罔カレ、 勅命ヲ畏ミ奉リ執行ヒ奉

ル事能ハズ、征夷府ニハ近江ノ国彦根ノ城主井伊掃部頭(直弼)大老職ニ居テ、威權ヲ肆ニシ異心アリテ暴逆ヲ逞フシ弥荒ヒニ荒ヒナン(シ)、恐ミモ朝廷辺ヲ輕蔑奉リ勅命ニ背キ、種々ノ曲事ヲノミ巧ミナシテ、万国ノ秀国祖国ナル我が大御国ヲ汚穢シ天皇命ノ御宸襟ヲ惱メ奉レルゾ、イトイト無道逆賊ナリカシ、己レ武満男道ナキ身ニシ有レト、イカデ此ヲ余所ニナ見ツ、堪ユ可キカハ、甚ク憂ヒ切ニ慷慨ミ、己カ志シ同シキ友等ト語ラヒ、武満都ニ参上リ、征夷府ノ事ノ情ヲ詳ニシ、朝廷辺ニ奏シ奉リ、彼ノ奸賊ヲ誅戮ヒ、夷狄等ヲ払ヒ平ケ、我カ故中将君齊彬公ノ御遺志ヲ継キ奉リ(公平生ニ深ク)朝廷ヲ崇敬ヒ給ヒ、夷狄ヲ攘除テ皇威ヲ海外ニ振ヒ給ムノ御志坐シケルガ、今年七月十六日ニ身退リ給ヒキ、実ニ天下万世皇國ノ不幸ト申シ奉ル可キ、甚タ遺憾シ、朝廷辺ヲ鎮メ奉ラム物ゾト胆太ク思ヒ起セルナリ、頃ハ秋ノ半過八月廿九日ノ夜ニナム、窈ニ日下部氏ガ(名ヲ伊三次ト称ヘリ、此モ今年七月京ニ参上リテ、水戸ノ殿守鶴飼小吉郎(鶴飼小吉郎ハカ勅書ヲ奉護テ關東ニ下レルト、同行テ伊三次モ三條殿ノ御許ニモ参テ且別ニ奉護テ下レル物モアリ)家ニ至テ宿リ、水戸ノ殿人鮎澤伊太夫、征夷府ノ

家人勝野豊作等ノ人々モ集来テ、夜モスカラ酒飲ミカハシ、天下ノ形勢ヲ深切ニ物語リシツ、寅ノ刻頃宿ヲ立出デヌ、都ニ疾ク行カマラシク、

鳥の啼く東の空ゆ飛ぶ鷹(鷹カ)の翼をかもよかけりても行かむ

袖ガ浦ニテ吹風イト寒カリケレバ

独り行く旅の夜嵐烈しくて露置きまさる袖の浦波

いつしかと身にしむ秋の風寒みちち心にくたく比かな

如此テ品川ノ駅ニ至リテ、先触チフ物(テ)人馬ノ用意等ノ通語ヲ遣シ、忍ビテ上ル路ナレハ姓名ヲ中根仲之助ト革メケル、川崎ノ駅ニ至リテ夜ハ明タリ、

○九月朔日天氣甚トヨク晴レタリ、川崎ノ駅ヨリ馬(加籠ニ乗リてかかせたり(風本))加奈川台ナル茶店ニ常陸ノ殿人鈴木安太郎(名ハ豊太)マチムカヘタルニ逢ヌ、シバシ休ミテ酒ナド

酌カハシ種々ノ物語ヲモナシツ、今ノ世ノ形勢ヲ打歎息キ古昔ヲ慕ヒ、思ハス時ヲ移シヌ、斯ク鈴木氏ガ此ニ待迎ヘケルハ、武満日下部氏ガ許ニテ、彼藩ノ人鮎澤氏等ガ謀議ニテ、己レト共ニ鈴木氏ヲバ都ニノボセマホシキトノ事ナリシカト、武満思フヨシアリテ、都

ニ同行ム事ハ得セマシキ由ヲアナガチニ辭(シカ)ミケレハ、殊更ニ此所マテ来リテ待迎ヘ、彼藩ノ都ノ留主居鵜飼吉左衛門ヘノ書翰ヲ己レニ託ケ、其他種々頼マレシ事共モ有レバナリ、斯クテ此ニテ別レ、保土ヶ谷ノ駅ヨリ歩行キ戸塚ノ駅ニ至リテ飯ナト食ヒタリ、藤澤ノ駅ニ至リテシハシ休ム、永祿ノ頃ニヤ藤澤寺合戦ノ時ニ、太田道灌ガ旗下ノ将中村某ガヨキ首討取テ、道灌ガ前ニ来リテ歌手向テヨト乞ヒケレハ、道灌即テ

かゝる時さこそ命は惜しからめかねてなき身と思ひ知すは

トナム読ミケルトゾ、其ガ歌集ニ見ヘタリ(中村ガ歌モアリ、此時ノサマヲ記シタル詞書イト面白カリケレド此ニ略キヌ、此ヲ道灌ガ辞世ノ歌ナリト世ニ云ヘルハ、イタクアワレナリカ)、実ニ物部ハ、深ク皇祖神命ノ事依シ給ヒシ随ニ天津日嗣 皇子ノ現御神ト坐テ、天地ト共ニ無窮ニ弥連続ニ、唯神随ニ天下所治食ス根元ノ理リヲ弁メ、雄々シク武キ大和情ヲ振起シ、朝廷辺ヲ崇敬ヒ畏ミ奉リテ、大君ノ辺ニコソ死ナメ和ニアラント、確ク動ガム雄心ヲ底津磐根ニ突立テ、治レル世ニモ乱レタル世ニモ露ホトモ命惜ム心有リテハ、コヨナク不覚ヲ取り、

末ノ代マデモ汚ク鄙シキ名ヲ流シタル類タメシ多ケレハ、能(タカ)己ノ本ツ心ニ立復リテ、物部ノ本意ヲ失ヒソ、此駅ヨリ加籠ニ乗リテカツカセタリ、大磯小磯トイフワタリハ、古ノ歌ニコヨロギガ磯ト読メル所ナルベシ、夜酉ノ刻過ニ小田原ノ駅ニ至リテ某ガ家ニ休ミス、(梅屋脱カ)○同二日天氣ヨク晴レタリ、寅ノ刻ハカリニ宿リヲ立出テ歩行セリ、衣類ヲ背負テ名ニシ負フ箱根路ノ峻岨ヲ越行クモ甚(トカ)タ苦シ、瀧ノ音、鹿ノ声、打コメタル深山ノ秋風身ニシミテ甚ト物悽愴シ、

白雲を分けつゝのはる箱根路のふたこの山の秋のさびしき

辛シテ嶮路ヲ越ヘタリ、

箱根山さかしき路も大君の御心思は安くそ有りける

此年ノ夏大將軍家慶卿(家定ノ誤)薨セ給ヒシカハ、都ヨリ其ガ喪ヲ訪ヒ給フトテ、勅使トシテ(伝奏廣橋中礼・從三友世通懸)納言卿(外二一人)關東ニ下向ラセ給ヘリ、関所ノ此方ニテ役人等行人ヲ制シテ立騒キヌ、其ヲ避奉ラムトテ、茶店ニ立寄リシバシ休ミ、飯ナド食ヒタリ、時ヲ移シテ勅使ハ通ラセ給ヒシカハ、即テ関所ニ至リテ、本伊勢

國ノ産ニテ浪人セシ岡本治三郎ト申ス者ナルガ、皇國
 学ニ志シ有テ、此度修行ノ為ニ上方ニノボル者ノヨシ、
 種々ニ申シスカシテ漸ク関所ヲ過ヌ(所謂切手チヲ物ナ
 ケレバ関所ヲ通サヌハ定レル制度ナリ、然レド此度止ム事ヲ得
 スシテ、カク欺キテ通りケルナリ)、斯テ此ヨリ加籠ニ乘
 リカ、セタリ、三島ノ駅ニ至リテ日ハ暮レタリ、此ヨ
 リ歩行シテ沼津ノ駅ヲ過行キケルニ、富士川ハ夜ハ渡
 リナシトゾ、因テ吉原ノ駅ナル鍵屋某カ家ニ至リテ宿
 リヌ(富士川ヲ夜渡リナラザルト云ハ、国々ノ飛脚ナトハ荷
 物ナト多ク有ル時ノ事ニテ、人ハカリハイツニテモ渡ルトゾ、
 其ガ後ニ聞タリ、因テ此ニ其所以ヲ記シヌ)

○同三日天氣能ク晴レタリ、曉方ニ宿ヲ立チ出テ富士
(ヲ脱カ)川渡リヌ、此川殊ニ急流ニテ、サナガラ矢ヲ射ルカ如
 クナリ、天正ノ頃ニヤ豊臣秀吉卿小田原ナル北條氏(氏政)康
(頼)ヲ攻ラレシ時ニ、我先君又一郎久保公(第十七世義弘長
 男、朝鮮役中病死ス)、シカモ此川水増リテ、諸々ノ軍人
 等モ渡リ兼タルヲ、公物トモシ給ハス一番ニ渡リ給ヒ
 シトゾ、彼佐々木・梶原等カ宇治川ノ先陣セシモ、イ
 カデカ此ニハ増ル(急)可キ、然レド彼等ガ先陣セシ名ハ世
 ニシルク誰モ称ヘ云フメレド、公ノ此ノ先陣シ給ヒシ

ハ世ニ知ル人サヘマレナルハ、甚タ遺憾シ、蒲原ノ駅
 ヨリ馬ニ乗レリ、薩陀山ヨリ遙カニ富士ヲ仰見タル景
 色イハムカタナシ、此茶店ニテ飯ナト食ヒタリ、馬夫
 云、大井川ハ夜渡リナリ難シ、急ギ給ヘト教ヘケル故
 必ス日ノ暮レヌ程ニ渡リナム物ト思ヒ、馬ニ鞭ウチ急
 キシニ、興津坂ニテ、去月廿九日江戸ヲ立チシ我藩ノ
 飛脚ニ追付キ、弥マシニ急ギ江尻府中ノ駅ヲ過テ、舞
 子ノ駅ニテ飯ヲ食ヒ、又馬ニ乗リ急ギシガ、岡部ヨリ
 藤枝ノ駅ヲ過キテ既ク日ハ暮レタリ、鞍ニ蒲団チウ物
(モ脱カ)ヲ敷カテ馬ヲハヤメタリケレハ、股ノアタリヲスリ、
 頗ルナヤメリ、島田ノ駅ニ夜酉刻頃着ヌ、駅ノ役人等
 ニ宿ヲ乞ヒケレハ、此ハ本陣ヨリ宿ノ事ハ執計ル所ナ
 リト云ヘルニ依テ、即テ本陣ニ至リテ宿ヲ借リス(一
 人旅ナルカ故ニ、サマ／＼故障ヲ云立テ、イトウルサキ事共多
 カリキ)

○四日曇リテ雨降ラムトス、夜丑ノ刻過起出テ即テ宿
 ヲ立出テ、川役所ニ至リテ役人ノ熟ク寝入リタルヲ驚
 カシテ、強テ川ヲ渡シ給ヒヌト乞ケレハ、役人即テ人
 夫ヲ催シ四人シテ台チフ物ニ乗セテ渡シタリ、川モ殊
 ニ深カリキ(此川モ荷物タニ無クハ、夜ト雖モ役人等ニ能ク

謀レハ快ク渡ス事ナリトゾ、イトヲカシ)、加奈屋ノ駅ニ至レハ、此度我カ前宰相公(齊興)、我カ藩ニ下給ヒシニ依テ女中等此駅ニ宿リ、輜夫・馬夫等集リ役人等立騒ケリ、己レハ步行シテ行過ギ、佐耶ノ中山ニ至リテ夜ハ明タリ(此ハ今ノ俗言ニサヨノ中山ト云フハ誤リナリ、續日本紀ニ、養老六年ニ遠江国佐益郡八郷ヲ割テ始テ山名郡ヲ置トアリ、延喜式ニモ佐夜ノ郡云々ト書キ、其他古今集ナル歌トモニモサヤノ中山ト見ヘタリ、此等ニテサヨノ中山ト云フ事ノヒガゴトナルヲ知ル可キナリ)、此所ノ茶店ニ休ミ、彼ノ名物チフアメノ餅ヲ食ヒタリ、此辺ノ茶店ハ毎ニ賑ヒテ華麗ナル処ナリシカ、先年天保ノ末頃ニ、水野越前守老中タリシ頃ニ奢侈ヲ禁メラレシヨリ、今ニ至リテ斯ハ質素ニハナリタリトゾ、夫ヨリ菊川ヲ渡ル、此里名ニ負ヒテ菊イト多シ、

たち渡る霧吹払ふ朝風にかほる籬の菊川の里

元弘ノ乱ニ藤原ノ俊基朝臣ノ、賊臣北條ガ為ニ捕ハレ給ヒ、東ニ下リ給ヒシ時ニ、承久ノ比院宣書ケル罪ナリトテ、光親卿ヲ鎌倉ニ下シケルニ、此ノ所ニテ失ヒケルニ、昔南陽泉菊水汲ニ下流^(ヲ)而延シ齡云々ト書キ給ヒシ古昔ヲ思ヒテ、古モカ、ル例シヲ菊川ノ同シ流レニ

身ヲヤ沈メムト詠^(ム)メ給ヒシ跡マデ思出ラレ、甚トアハレニ慷慨ク覚ユメリ、抑俊基朝臣ノ忠誠ニシテ朝廷ニ忠勤ミ給ヒシ功業ハ云フマクモ有ラス、其カ人望才略アツテ後醍醐天皇ヲ輔佐ケ奉リ諫メ導キ奉リ給ヘル功業モ、藤房朝臣ニ勝レルトモ劣ルマシキ人傑ナリ、然ルヲ藤房・親房ノ朝臣ノミヲ世ニ称ヘテ、俊基朝臣ノサハカリ勝レ給ヒシ所以ヲ知ル人マレナルハ甚ト遺憾シ(此ハ己レ別ニ其カ所以ヨシヲ所考アレド此ニハ略キヌ)、新坂ノ駅ニ至リテ(今ハ俗言ニ西坂ト云ハ新坂ノヨコナマレルナリ)、彼ノ蕨餅ヲ食ヒタリ、葛以テ行人ヲ欺ク者ト云フメレトサニハアラサリキ、此宿ノハテナル任事社ニ詣テタリ(延喜式ニ麻知ノ神社トアル此レナリ)、今ハ世ニ八幡社ト云ヘルハ誤レリ、此ヨリ加籠ニ乗リカ、セタリ、見附ノ駅ニテ己レカ同里ナル三原彦之丞ガ關東ニ下レルニ行逢ヒタレド、己レハ加籠ノ内ニテ知ラヌフリシテ行過キヌ(俗吏ナレハナリ)、天龍川昔シハ天ノ中川ト云ヘリ、古歌ニ天ノ中川トヨメルモ是ナリ、此ノ川ヲ渡リテ濱松駅^(ノ脱カ)ニ至リ、此ヲ過テ大雨降リ出テヌ、宿加籠ニ乗リタリシ故、雨通リテ衣類ハヒタヌレニヌレタリ^(異本)、潮^(ノ)タヌレタリ、潮^(ノ)ク夜ノ酉刻過舞澤ノ駅ニ着テ本陣ニ宿

リ、火ニアタリテ衣類ヲカハカシヌ(舞澤ヲ舞坂ト云フハ、ヨコナマレルナリ)

○五日天氣ヨク晴タリ、夜ノ明方ニ宿リヲ立出テ、船ニ乗り今切リノ渡ヲ渡リテ荒井ニ渡レリ、大引佐・小引佐ナト云フ山見ニ、萬葉集ニ引佐細江ノ水ヲツクシトヨメル所ハ、彼ノ山ノアタリナル入江ナルベシ、

名にたてる引佐細江の水をつくしまかはぬ道の標に
はせよ

卯刻過荒井ニ着キタリ、高師山ニ雪カ、リテ時雨ノフリケレハ、

浮雲のかゝる高師の高ねより橋本かけてしくれふる
なり

此ヨリ步行セリ、白須賀ノ駅ヲ過ギフタ川ノ駅ニ暫ク休ミ、吉田ノ駅ニテ飯ヲ食ヒタリ、御油・赤坂・藤川ノ駅ヲ経テ岡崎ノ駅ニテ日暮レタリ、此ニテ飯ヲ食ヒタリ、此ヨリ加籠ニ乗リカ、セタリ、鳴海ノ駅ヲ経テ雁ノ啼ヲ

鳴海かた秋風寒し在明の清きみ空にかりかね聞ゆ
夜明ケテ宮ノ駅ニ着キ、山本屋某カ所ニ至リテ暫シ休
ミ飯ヲ食ヒタリ、

○六日天氣能ク晴タリ、卯刻比船ニ乗レリ、風悪シク漸ク午刻過頃桑名ノ駅ニ着キヌ、空ウチ曇リテ雨フリ

出テケレハ、此ヨリ加籠ニ乗リカ、セタリ、杖ツキ坂ナト路悪シ、日本武尊ノ古事ナト思ヒ出ラレキ、四日市ノ駅ノ此方ヨリ日ハ暮レタリ、加籠ヲカキタル轎夫一人ハ筑紫人ノ音声ナリケレハ、委シク其ガ生国ヲハ尋ネシニ、薩摩国谷山ノ里ノ者ニテ、一トセ相良四郎兵衛ト云フ人ノ下僕トナリ、東ニ下リケルカ、品川ノ駅ナル娼女ニ通ヒナレ、遂ニ亡命セシトゾ、今ハ中々前非ヲ悔ヒ故国ヲ慕フノ情切ナリシカハ、哀レニ思ヒテ石薬師ノ駅ニ至リテ、錢若干ヲ取ラセケレバ、涕泣テ喜ヒヌ、莊野ノ駅ニ至リテ夜ハ明ケタリ、

○七日夜明ケテ空晴レタリ、龜山ノ駅ニ至リテ飯ヲ食ヒタリ、此ヨリ步行シテ急キタリ、坂下ノ駅ヲ経テ鈴鹿山ヲ越ヘケルニ、時雨降り出テヌ、

鈴鹿山時雨はまなくふりぬともあかすたに見む峰の
もみち葉

すすか山時雨に匂ふもみち葉を都のつとに手折りて
ぞ行く

田村川ヲ渡リテ田村ノ社ニ詣ツ、アタリヲ流ル、谷川

ノ音潔ク清々シキ心地セリ、水口ノ駅ヨリ雨ハ晴レタ

リ、我前宰相公今日ハ大津ノ駅ニ止宿リ給フヨシナレハ、急ヒテ矢ハセノ渡ヲ渡リ、大津ニ早ク着キナン者ト思ヒ此ヨリ加籠ニ乗リカ、セタリ、轎夫四人シテ急キニ急カセタリ、石部ノ駅ニテ飯ヲ食ヒ、又加籠ニ乘リ急ガセ草津ノ駅ニ至リテ尋ネケルニ、前宰相公今頃漸ク瀬田ヲ過給ヒナント駅ノ役人等カ云ヘルニ依テ、急テ矢ハセニ至リ船ニ乗リ漕出ヌ、四方ヲ見メクラスニ、日枝ノ山高ク見アケ、膳所ノ城海ツラニツキ出デ、所々ノ名所スベテ見渡ス、所々ノサマケシキヨシ、比良ノ高ネハヤ雪フリ積リタリ、

ゆ

さゝ波の志賀の浦ゆ漕出て比良の高根にみ雪ふる見
ステ未ノ刻過大津ノ駅ニ着キタリ、此ニテ聞クニ前宰相公ハ未タ着カセ給ハザリキ、依テシバシ此ニ休ミ酒ナト飲ミテ、此ヨリ步行シテ行シニ、逢坂山ノ辺ヨリ日暮レタリ、追分ヨリ粟田山ヲ越ヘ、四條ノ繩手ニ出テ、夜西下頃（劍峯カ）四條ノ錦小路馬場上ル所ノ鍵屋某ガ家（鍵屋直次郎、従来薩摩ノ旅店ナリ）ニ至リツキヌ、此ニ旅宿シケル己ノ友ナリケル西郷隆盛伊知地季靖（季靖ハ

正治旧名）・有村兼俊（海江田信義旧名）ノ三人、即テ立出テトモニ喜ヒヌ、此人々ハ固ヨリ忠誠ニシテ、深ク

朝廷ヲ崇敬ヒ畏ミ奉リ、雄々シキ真情堅確キ人々ニテ、皆隔ナキドチナレバ、何クレトカタラフニ、旅ノ勞モ打忘レ、方今ノ事情ヲ語り合ヒテ、共ニ嘆息キ慷慨ミ、イタク更行クマテニ酒飲ミカハシテ寝タリ、

○同八日天氣ヨク晴レタリ、朝疾ク起出テ隆盛ヨリ月照和尚ニ、余カ参上リシ由ヲ文以テ申シヲコセタリ、程ナク和尚参ラレキ、此ノ人ハ近衛殿下ノ御寵遇深キ人ニテ、人カラ溫柔ニシテ慎謹ミ深ク且ツ忠誠ノ雄心堅ク、皇威ヲ振起シナム大志ヲ起シ、清水寺ノ住職ヲ既ク退テ隠居ノ身トナリ、此春ヨリ此ナター一日モ安閑ニ居ル事ナク、種々ニ朝廷ノ御為メニ心力ヲ尽シタル人ナリ、如此テ關東ノ事情形勢ヲ詳ニ語り、且其ヲ巨細ニ書記シタル書ヲ（此筆記下稿後ニ記ス）マイラセケレハ、和尚即テ此ヲ懐ニシテ、近衛殿下ノ御許ニ参ラル、余ハ大管所ヲモ拜奉リ、且先考ノ御墓東福寺ノ内ナル即宗院ニ坐（坐ハカ）ハス彼所ニモ参ラントテ、兼俊ト共ニ大管所ニ参テ南門ノ前ニ至リ、畏ミ恐ミ拜奉リ、夫ヨリ仙洞御所ノ辺ヲ通り鴨川ヲ渡リ、聖護院ノ鳥居

ノ辺ヲ通リシニ、此レノ辺ナル櫻木町ニ、近衛殿下ノ北ノ方郁君(忠熙公簾中、齊宣ノ長女郁姫君)ノ御方ノ御別荘アリ、余カ先考(武滿カ父、四郎兵衛ト云フ)ノ郁君ノ御方ノ御附人トシテ、嘗テ此ニ居給ヒ、余モ先考ト共ニ三月ハカリモ居タリシカ、先考モ即テ身マカリ給ヒ、其ガ後ノ郁君ノ御方モ薨セサセ給ヒテ、今ハ其時ノ御別荘ノミ残リテ、在坐セシ當時ノ事ナト思ヒ出ルニモ阿那耶ト感テ涙セキアヘスナム有ケル、カクテ即宗院ニ詣テ、云々ノ所以アリテ参上リシ由ヲ申、花ナト手向奉リキ、

詣て来て花を手向の枝ことに露こほれつゝぬるゝ袖かな

婦リニ通天橋ノ紅葉ノ木ノ下ニ、シハン休ミヌ、紅葉モ薄紅ニ染ミ出テヌ、流ル、水清潔ニ阿那清々シキコ、地セリ、先考ノ嘗テ云ヒ給ヒシハ、吾ハ都ノ土トナリナハ本意ナル可キゾト、果シテ然ナリ、己レモ都地ヲ墳墓トコソ思ヘルハ平生ノ志ニナム有リケル(武滿モ果シテ文久二年四月伏水寺田屋ニ於テ死シタリ)、斯テ四條橋ヲ渡リテ南側ナル鱧店(鱧カ)ニ立寄り鱧飯ヲ食ヒキ、此ハ余ガ平生ニ鱧魚ヲ嗜ム故ニ兼俊ニ誘ハレシニ依テナ

リ、未刻頃旅宿ニ帰ヘリ、即テ和尚(月照)参ラレ種々ノ論談ニ及ビキ、彼ノ書記シタル書ハ近衛殿下留置カセ給ヒテ 觀覽ニ備奉リ給フ可キ由ノタマハセタルヨシ、甚トく畏クウレシクコソ侍ル、和尚ハ申ノ下刻頃帰ラレタリ、此月二日九條殿下御所旁ノ由ニテ、関

白内覽御辞退坐テ(九條殿下尚 關東ノ奸党ニ御内通有リシニ因テ御辞退アリシナリ、委シクハ別ニ記セル者アリ 樺山貫之記ニアリ)

同シ三日ニ 主上聞食シ給ヒ、即テ近衛殿下(忠熙)ヘ

内覽宣下坐テ内外ノ機務ヲ預リ聞カセ給フ、近衛殿下ハ忠誠ノ御志確然ク坐テ、關東ノ奸賊等サマサマニ謀

計ヲメクラシ、賄賂様ノ物以テ御心ヲ惑ハシ奉ラムトスレトモ、少シモ御動揺給ハス、殊更 主上未ダ東宮

ニ御坐セシ時ヨリ東宮ノ傳ニテ、忠誠ヲ勤ミ給ヒシ故ニ、主上ノ思食モ他ニ異ニシテ、カク内覽宣下モ坐

シケルトゾ、且三條(三條實萬)殿下・鷹司(鷹司輔歷)殿下(太閤ハ志シナキ方ニ坐シケル)共ニ忠誠ニ坐テ、左

右ノ大臣ニナン坐シケル、親王ニハ青蓮院粟田宮(尊融法親王)坐テ英邁ク絶倫ナル御天質ニ坐シテ、共ニ朝

廷ヲ輔佐ケ奉リ給ヘル故ニ(其他中山中納言卿能・大原三位卿重)九我大納言卿(通建)・二條大納言卿(齊高)・阿野宰相卿(公誠)ナト

ノ御方ヲ始メ忠義ノ志アル御方鮮カラザリキ)、關東ノ奸賊等忌諱奉ルコト甚ト深シ、然レト 朝廷正シク剛健英明ニ坐ハ、彼等如何ニ暴逆ヲ逞フシ、弥荒ヒニ荒ヒナストモ、必ス大直日ノ神見直シ聞直シ坐テ、即テ奸賊ノ荒ヒハ止ミナム物ゾ、サレハ皇道豈ニ豈興ラサラメヤモ、今夜大坂ヨリ島津豊後(久寶)カ書翰来レリ(齊興公出兵御受書ニ就テナラン)、此ハ我カ前宰相公ニモ近衛殿下ヨリ 勅命ノ御写シ送(此ハ御写ナレトモ実ハ御内勅ニゾ有リケル)並ニ御直書遣シ給ヒ(此ハ去ル八月二日下部氏カ奉護リテ關東ニ下向レルナリ)ケル故ニ、御請ツカマツラセ給ハヌ為メニ、豊後都ニ参上ル可キ由ニナム有リケレト、得参上リ難キ由シナレハ、御請ノコトハ公ヨリ御直書以テセサセ給フ可キナレバ、都ノ事ハ宜シク計ラヒテヨトノ趣キナリ(齊興公御請第マツ卷参看)、水戸ノ留主居鵜飼ヨリ書翰来タリ、余ニモ対面セマホシケレトモ、世態ヤカマシク且旁嫌疑モ鮮カラサル故ニ、コトサラニ得対面セス云々ト申シヲコセタリ、且ツ菓品種々贈ラレニキ甚ト辱シ、

○九日天氣ヨク晴レタリ、朝未ダホノクラキニ和尚参ラレタリ、我党謀テ謂ク、世態カク成リシ上ハ、速ニ

(頭注)宸翰甲第号参看)有志ノ国々ノ国主城主達ニ再ヒ 勅命ヲ下シ給ヒ、奸賊ヲ征伐セ給ハムコソ然ナラム、殊ニ越前・土佐等ノ国主等ハ水戸ニ 勅書下レルヲ聞テ、願クハ御写ニテ(頭注)青蓮院宮御書翰参看)モ拜見奉ラムト請望レタリ、然レバ今度断然ト国々ニ勅命ヲ下シ給ヒナハ、長門ノ萩・因幡ノ鳥取ノ城主等モ、直ニ馳参テ 勤王セラレナム、サモ有ラバ東西一時ニ振興リテ奸賊ヲ誅ハムニ何ノ難キ事アランヤ、和尚此ヲ聞テ、再ビ 勅命ヲ下シ給ハム御事ハ容易カラム御事ニテ、此ハトテモ成難カラム(朝廷ノ御時体成難キ所以モ坐ストソ、下ヨリ奉窺ルトハマタ格別ノ御事モ坐ス事ニナム)、去ル八月ニ水戸ニ 勅命ヲ下シ給ヒシ時ニ、近衛殿・三條殿ナド御談合坐テ、各其ガ所縁ニ依テ 勅命ノ御写ヲ遣ハシ給ヒタレバ、越前・土佐等ニハ三條殿下ヨリ遣ハシ給ヒシナルベキヲ、然ハ無リシニヤ甚ト不審シト申サル、余謂越前・土佐ニハ御遣シナキ事疑ヒナシ、此ハ余髓ニ聞ケル処ニ、(マツ)両侯達モ度々此事ヲ申サレタリトイヘバ(此他種々ノ議論モアレド此ニハ略キス)、和尚ハ即テ近衛殿下ノ御許ニ参ラレタリ、此時都ノ諸司代ハ若狭ノ国小濱ノ城主酒井若狭守(正義)ニツアリケル、此ノ月朔日、参河ノ国吉田ノ城主(吉

田ニアラス岡崎ナリ) 本多美濃守ノ代リトシテ、都ニ参上レリ (美濃守ハ脇坂中務大輔ノ代リトシテ、去年夏五月ニ諸司代トナリシカ聊故アリテ諸司代ヲ免サレテ、同六月ニ江戸ニカヘレルナリ)、若狹守ハ天保辰年ヨリ諸司代ヲ勤メ、九ヶ年程モ都ニアリシ者ニテ、略学才アリテ山崎垂加ノ学流ヲ崇信ヒシ者ニゾアリケル (此ハ余彼ガ侍讀タリシ山口貞一郎重昭、号ヲ管山ト云ケル人ノ許ニ、学問ノ為メニ居リタリシ事アル故ニ、委シク其ガ学風ヲ知レルナリ)、然ルニ今度井伊等ガ奸謀ニ与シテ、近衛殿下ニ内覧宣下在シケルヲ、關東ニ仰下サル事ハ暫ク御猶予在ラセラレ度ト、頻リニ奉拒リキ (此ハイカニモシテ九條殿下ヲ再ビ關白内覧ニ奉復ラスシテハ、彼等ガ奸謀ナリ難キ故ナリ、尤故事内覧宣下在シケル時ハ、關東ニ仰下サレ將軍ヨリ御請申シ給フコトナリトゾ、因テ若狹守カクハ奉拒リシ者ナリ)、然ルノミナラス都ニアリケル忠義勤王ノ志アリケル士ヲ探索テ捕フコト殿重ナリ (此時捕ハレタル人々ハ梅田源二郎・山本楨太郎・池内大學等ノ人々ナリ)、捕ハレタルモノアリ、或ハ窃ニ逃レタルモノアリケル、我党ヲ (西郷・岩下・大久保・吉井其他百余名) 彼探索ル事甚ト殿重ナリ、若シ我党ヲ捕ヘルトセバ、イカデヤミヤミト拱

手テ捕ハレニハ就クマシ、刃向フ奴原悉ク討取り切死ヲコソセメト、悠然トシテ酒ナト飲ミ、種々ノ議論ニ及ビケルモ勇マシカリキ、抑モ若狹守ガカク暴逆ニ与ミシケル所以ハイカニト尋ヌルニ、征夷府ノ制度諸司代ヲ勤メシ人ハ往々老中トナルガ大概規定ノ如クナリシヲ、若狹守ハ其事モナクテ溜ノ間詰テフモノニテ居タリキ、家格モ代々侍從ノ任官ナリケルヲ、此度井伊ガ奸謀ニテ、彼ヲ己レガ味方ニナシ、少将ノ官ヲ申シ下シ、且金三万両ヲ与ヘテ、都ノ諸司代タラシメタリ、因テ彼其ヲ辱ミ、忽チ奸党ニ与ミシケルナリ、位官財宝ニ忽チ本心ヲ失ヒ、朝廷ヲ輕蔑シメ奉リ、暴逆ヲ肆ニセシハ実ニ禽獸ノ所行ナリケル、抑今ノ大名テフ者ハ、上代ノ国造・県主ナド、同シク、其ガ制度ハシモ既ク神代ヨリノ定ニテ、皇孫瀧々藝尊ノ天降坐ス時ニ、天神ノ命以テ諸部ノ神等ヲ副ヘ給ヒテ其職ニ仕奉ル事、天上ノ儀ノ如クセヨト御依シ坐シ、詔命ノ随ニ (神カ) 御代ヨリ制度ノ定マリシコト、此 詔命以テ甚ト詳ニ見ユルナリ、然ルヲ世ノ儒者等が大津宮ノ頃ヨリソ制度ハ定マリタル様ニ云ヘルハ、イタク誤レルナリ) 歴世改メ替ル事無ク、橿原宮・瑞垣宮ニ至リテ、弥々皇祖神命

ノ御依ノ隨ニ修メ明ラメ給ヒ、益制度モ正シク定マリ
タリ、其ハ先ツ 朝廷ニ仕奉ル伴造八十友緒ニハ、臣・
連・首ナトノ差別(腕)アリテ、階級正シク別レ、素ヨリ仕奉
リ来シ職掌ノ部々ヲ持分テ仕奉リ、臣ノ加波泥ノ人々ノ上ニ
ハ、別(腕)ニ大臣ヲ置テ統領シメ給ヒ、連ノ加波泥ノ人々
ノ上ニハ、別ニ大連ヲ御任シ坐テ統領シメ給ヒ、此大
臣・大連ノ人ヲ八十友緒ノ棟梁タル臣トシテ、御政ヲ所
聞食シ、各国県里ニ国造テフ物ヲ置テ其ノ中ニ君別・
県主・稻置・直ナトノ差別アリテ、級正シク其所々々(符)
ヲ治メシメ給ヒ(此ハ今ノ大名国主・城主ノ差別有テ、其カ
中ニ官位ノ高下アリテ級正シキガ如クナリ)、内外ノ臣等皆
悉ク其所ノ統領ノ任ヲ守リ、職掌ヲ治メテ朝廷ニ仕奉
ル、内外輕重ノ勢毎ニ相維持テ偏重ノ患ナク君臣尊卑
ノ等正シク、風俗淳厚ニ国体尊嚴ニシテ、万国ノ宗國
秀國タル故ヨシモ、此ヲ以テ著シクナン有リケル、大
津宮ニ至リテ、専ラ唐制ニ擬テ上古ノ制度ヲ改革テ(
上古ノ制度ヲ改革ラレシ事ハ、彼聖德太子ヨリソノ備ヲナシタ
リ、然レト其時マテハ悉クハ改革ラレサリシナリ) 国造ヲ置
キ給ヒシヨサヘ改革テフ、唐土ノ郡県テフ制度ヲ用ヒ
給ヘリ(其ハ時体改革メスシテハ成難キ勢ヒ有ル故ノ

御事ニヤ有リケム、然レト皇祖神命ノ御鴻業ヲ復興シ
給ハムトナラバ、旧制度ノ廢レシヲ挙ケ、因循苟且ノ習
ニ染ミテ、年旧リテ世ノ為ニ害ニナレル事ヲ除テ、皇
祖神命ノ御制度ヲ、循正シ給ヘル御政モ有ル可キ御事
コソ有ラマホシク覺ユ(權原宮瑞垣宮ノ弥ニ皇祖ノ業ヲ循
正シ給ヘル御跡モ有ルヲヤ、古ヲ法則トセンニハ、神代ノ事ハ
云フマクモアラズ、世々ノ中ニハ此ニタ御代ノサマヲコソ法則
トシテ、御政ヲモ物シ給ハム者ゾ)、旧制ノ甚トメタク貴
キ御制度ナリケルヲ、妄ニ改革テ新タニ唐土ノ制度ノ
頻繁(頻)シキニ替ヘ給ヒシハ如何ニゾヤ、 皇室ノ衰微ヘ
給ヒシモ此ニ淵源ケリ、其ガ後ニ世乱テ 皇威振ハズ、
源賴朝々臣ガ霸業ヲ鎌倉ニ肇シヨリ、天下ノ政令ハ皆
武臣ノハカラヒト成リテ、遂ニ北條・足利等ガ如ギ乱
賊ノ党モ出来テ、一日モ世ノ中乱レサル日ハナキ程ナ
リシガ、織田信長卿・豊臣秀吉卿等ノ人々出ラレ、漸
ク世ノ乱ヲ鎮メ、徳川家康卿繼起リテ遂ニ海内ヲ鎮メ
治メラレテ、郡県ノ制ハイツトナク廢レテ、又上代ノ
制度ノ国造ヲ置給ヒシ如クナリタリ(此ハ賴朝朝臣ガ兵
馬ノ權ヲ執リシ頃ヨリヤ、郡県ノ制度モ廢レ行キ、北條・足
利等ガ暴威ヲ振ヒシヨリ月々ニ廢レテ、イツトナク上代ノ制

度ニハ復レルナリ)、楮テ家康卿ガ乱ヲ鎮メラレシ功業ハ、固ヨリ大ナル事稱フマクモ有ラネト、苟モ忠誠ナル志深く、臣子ノ真ノ道ヲ尽サムトナラバ、皇祖命ノ事依シ給ヘル随ニ朝廷ノ御政ヲ循正シ、己レ臣タルノ分ヲ守リテ畏ミ仕奉リ忠勤アル可キ事ナルヲ、然ハナクシテ却テ皇室ノ衰微ヘ給ヒシニ乗テ、天下ノ政權ヲ執リ、彼賊臣タル北條・足利等ガ旧例ニ擬ヒ(農政ハ北條ヲ其他ハ大概足利ニ倣ヘリ、其ハ善キハ取ルコト固ヨリナレトモ、彼等ガ朝廷ヲ制ヘ奉リシ制度ヲモ改メズシテ取レルハイカニゾヤ)、弥ニ己レガ權勢ヲ振ヒ、皇室ヲハ益々衰微ヘシメ奉レルハイカニゾヤ、然レバ家康卿ハ功ノ始メ罪ノ魁トモ可謂ニヤ、其ガ孫ノ家綱ニ至リテ暴逆ヲ逞フシテ、後光明天皇ノ甚ト英明シク坐テ、復古ノ御大志坐シケルヲ忌諱奉リ、御痘瘡ノ御煩坐ヲ幸ニ恐シク毒藥ヲ奉獻リテ奉弑リキ(明正天皇ハ後光明天皇ノ御妹ノ姫皇子坐シケルヲ、家光ノ娘ノ女御ナリシガ、其ガ御腹ニ生坐セル皇子ナルヲ以テカク宸極ニ即セス給ヘルナリ、此事ヲ以テモ徳川氏ガ專權ノ甚ト我假ナルヲ見ルベキナリ)、実ニ北條泰時ノ隨事ヨリモ甚シク、其ガ罪咎如何ニゾヤ、悲憤慷慨ニ得堪ヘズ髮モ逆立テ憤ルメリ(

家綱ガ事ハ室直清カ小説ニモ載セタリ、直清ハ素ヨリ徳川氏ニ諂諛ヒ仕ヘシ者ナレトモ、此ハ頗ル其実ヲ記シタリキ、抑徳川氏ノ事ヲ世ノ儒者等ハ兎モスレバ、稱揚ルナレト、実ハ其ガ罪ノ大ナル事、家綱ガ如キ者モ有ルヲヤ、世ノ時勢ニツレテ、直ニ其ガ罪惡ヲ云フ事ナラザリシカバ、初ヨリ善惡ノ論ハ物セムヨシ、余ハ家綱等ガ罪惡ハ常ニ憤リ思フ物カラ直情ノ尽 此ニ(聊論ヒ置クナリ)、アハレ建武ノ昔興復ノ功業ヲナシ給ヒシ時ニ、深く思ヒ遠ク慮リテ、皇祖命ノ大道ノ隨ニ古今ノ沿革ヲ考ヘ明ラヌ朝廷ノ御大政ヲ正シ、新田・足利・赤松ガ輩ニ其程ニ從ヒテ忠賞ヲ行ヒ、官位ノ級階ヲ定メ(悉ク一二ヶ國ヲ給ハリテ國造トシ、位階ハ四位下五位上ヲ限リ、官ハ侍從少將等ヲ限リトシテ、各其ガ職掌ヲ正シ、其所領ノ國々ヲ治メシメ給ヒナム物ゾ、猶舊シクハ別ニ著セル書等ニ云ヘリ(斯書伝ハラス)、恩信以テ其ガ心ヲ維持テ反離ノ患ナカラシメ、正成朝臣ヲ以テ、上代道臣命饒速日命ノ來自部・物部ヲ率帥テ宮門ヲ衛護リ、矛盾ヲ作り備ヘ給ヘル如ク都ノ衛護ニ任シ、將軍ノ職ヲ掌ラシメ、藤房卿・親房卿等ノ如キ博識忠良ノ人々ヲ重用ヒ、瑞垣宮・玉城宮ノ皇太子ヲ分封シ給ヒシ跡ニ從ヒ、功業アル皇子ヲ畿内ノ地ニ封シ給ヒ、大塔宮ヲ

皇太子ニ定メ (皇太子ニ封シ賜ヘル事モ、大國ヲ余多封

シ給ヒテハ、却テ後々ニ至リテハ害患モアル可キナレバ、國ヲ分ケテ封シ賜ヒ 朝廷ヲ維持奉リ、其ガ勢ヒ強大ニ成行テ 朝廷ヲ庄ノ勢ヒ無キ所置モ有ル可キ事ナリキ)、其他害ニナル

ル制度ヲ除テ弥々ニ (俗カ) 皇祖命ノ制度ヲ循正シ、神祇ヲ敬礼ヒ、民ヲ惠ミ武ヲ尚ヒ、古道ヲ明ラメ給ヒナバ、中興ノ御鴻業ノ盛リナル事、遠ク瑞垣宮ノ昔ニ復リテ、皇道今日ノ如ク衰微

ノ極ニハ至ルマシキヲ、阿那遺憾クナム (國ノ大名達ヨ、能ク皇國ノ皇國タル所以ノ根元ヲ弁メ、各々國々ヲ所預リ官位ヲ授リシモ悉ク 朝廷ノ御恩頼ニ依レル深キ御惠ヲ、誠実ニ畏

ミ辱ミ骨髓ニ徹リテ思ヒ奉リ、イカテ此ノ深キ大御惠ニ奉報ラハデヤハト、一日モ忘レ奉ラズ黒心ナク丹心以テ仕ヘ奉リ、皇國ノ御楯トナリテ、荒ヒナス奸賊ヲハ速ニ征伐テ御代ヲ鎮メ固

メ、夷狄ヲ攘除テ主上ノ 宸襟ヲ一日モ早く奉靖テ、 皇威ヲ海外ニ振ヒ奉ラム者ゾト、雄々シキ猛キ倭心ヲ振起シテ、夜ノ守リ昼ノ守リニ堅確ク 朝廷ニ奉仕ラムゾ臣子ノ真ノ道ニゾ

有リケル、各國ノ主等ノ臣等モ 朝廷ヨリ看行シ坐ス時ハ、悉ク 朝廷ノ臣民ナラザル者ハ無ケレハ、朝廷ヲ崇敬ヒ奉リテ、其ガ主人ヲ補佐テ 朝廷ノ御爲メニ忠勤有ラシメムゾ、家臣ノ

道ナリカシ、然レバ

朝廷ハ大君臣ニ坐テ、其ガ主ハ小君臣ナレバ、事ノ變ニ臨ミテハ輕重大小ノ差別ヲ能ク詳ニ弁メテ、重大ヲ執リテ輕小ヲ捨ル事モ有ル可キ事ナリ、此等ノ義ハ臣子ノハヤク明ラメ弁メ置カズシテ、得有ルマシキ事ナリシ、ユメ征夷府アルヲノミ知

リテ、 朝廷ノ深キ大御惠ヲ忘レ、女々シキ心ニ引カレ、己レガ身ノ榮華ヲノミ思ヒテ君臣ノ大義ヲ廢失ヒ、朝廷ノ御危難ヲハ猶予テ勿望觀ゾ、

○十日天氣ヨク晴レタリ、朝ニ和尚參ラル、越前・土佐等ノ事、昨日近衛殿下ヨリ三條殿下ニ仰談ヒ給ヒケルニ、イマダ 勅書ノ御写ハ遣ハシ給ハサリシ由ニテ、

篤ト御談合坐テ遣ハシ給ヘルニ決定レリ、此ノ御使ニハ余ヲ遣ハシ給フ可キ御内証ナリトゾ、甚ト畏ク辱クナムアリケル、斯テ種々ノ談ニ及ヒテ、和尚ハ近衛殿下ノ御許ニ參ラレキ、斯テ午刻頃和尚ヨリ使来リテ、

隆盛ニ近衛殿下ノ御許マテ參リタヒネト、申シヲコセラレタリ (齊興公上申書參看)、即テ隆盛參ラレキ (此時都ニモ彼ノコレラト云フ病流行テ人多ク死シス、隆盛其ガ治法ヲ、櫻任藏ガ江戸ニテ、効驗有シヲ上梓セシヲ、別ニ水間氏

藩医在邸水間良清ト云、医業ヲ以ナル医師ガ治法ノ一法ヲ加テ都ニテテ有名ナリ、樺山資之日記參看)

藩医在邸水間良清ト云、医業ヲ以ナル医師ガ治法ノ一法ヲ加テ都ニテテ有名ナリ、樺山資之日記參看)

藩医在邸水間良清ト云、医業ヲ以ナル医師ガ治法ノ一法ヲ加テ都ニテテ有名ナリ、樺山資之日記參看)

藩医在邸水間良清ト云、医業ヲ以ナル医師ガ治法ノ一法ヲ加テ都ニテテ有名ナリ、樺山資之日記參看)

上梓ケルヲ、都ノ人々ニ施行ムト、共ニハカライテ其ガ看板ハ予筆ヲ執リ、文ハ季靖伊地知正治旧名ミヤビ文ニ面白ク作ラレタリ、其ハ鍵屋ガ店ニ出シケレバ集来ル人引キモキラス、都テ千五六百人ニモ及ヘリ、ヲカシキ事ニゾ)、申ノ刻頃ニ隆盛帰ラレキ、然ルニ和尚モ諸司代ヨリ嫌疑深ク探索ルコト厳重ナレバ、奈良ニ所縁アレハ彼所ニ趣テ暫シ難ヲ避ケナムト思ヘル由ニテ、彼是カタラヒケルトゾ(委シクハ別ニ記セル物アリ、正治日記中ニモアリ参照)、且余ハ勅書ノ御写シ、三條殿下ノ御直書(勅書ノ御写シトハイヘドモ実ハ 御内勅ノ訳ナリ、其ハ再ヒ 勅ヲ下シ給ヘル事ノ容易カラム故ナレバ、御写ヲ遣シ給ヘルナリ^{土・越})ヲ奉護リテ早ク關東ニ下リ土佐守ニ遣ハシ、越前・宇和島ノ兩侯ニハ土佐守ヨリ達セラル、様ニ云ヘド、近衛殿下ノタマハセタル御言ヲ畏ミ奉リキ、且阿波・因幡兩侯ノ御受書ノ趣キヲモ、詳カニ土佐守ニ云ヘド、近衛殿下ノタマハセタリ(兩侯ニモ 勅書ノ御写ヲ遣ハシ給ヒシカバ、謹テ畏ミ奉リ御受ニ、徳川家ヲ御扶助ノ思食誠ニ難有奉存候、万一事時ハ右ノ 勅書ノ御写ヲ捧ケ奉リテ、一番ニ馳セ参リ、忠勤ヲ可奉尽云々ノ趣ナリ、加賀ノ御請書モ有レト、其ハ云フニ足ラザル者ナリ、佐幕ノ俗藩ナル故)、其他 朝廷ノ機密

ニ關係ル事共、且ツ掛マクモ畏^(キ) 主上叡慮ノ程ヲモ窃カニ拝聞奉レル事モ種々アリシカド、恐ケレバ此ニ記サズ(宸翰甲第^(マ)号ニ参照スヘシ)、斯ク 朝廷ノ重キ機密ノ御使ヲ、余ガ如キ卑賤シキ者ニ命ヲ給ヘル御事、時勢トハ申ナガラ誠ニ恐キ辱キ事、何ト言奉セム為便モアラズ、唯泣涕テ奉畏ルノミ、タトヒ身ハ碎ケ骨ハ粉ニナリス共、此御使ヲ首尾能ク奉勤テ即テ拳義ノ策ヲ定メテ、再ヒ都ニ馳上リナム物ゾト思ヒ決定タリ大久保利通(季靖ト北野ノ辺ニ居所ヲシメテ潜居ル事ナト予メ日記參看)云々カタラヒキ)、斯テ今夜ノ深更ニ発足ヲ定ム、隆盛ハ今夜ノ曉天ニ兼俊(有村)ト共ニ、和尚ヲ送リテ奈良ニ赴行クニ定メ、季靖ハ後ニ残りテ、都ノ事情ヲ窺フニナム定メタリ(此後ハ阿野宰相卿ヨリ、近衛殿下ニハ事情ヲ申シ給ヘルニ決定タリ、此ハ阿野卿ニハ近衛殿下ヨリノタマハセ置カセ給ヘル由ニナム有リケル)、即テ酒宴ヲ催シテ種々ノ會議ニ及ヘリ(隆盛・兼俊ハ和尚ヲ送り、若シ路ニテ奸党捕ヘムトセハ、直ニ切抜ケ伏見奉行内藤豊後守ガ邸ニ切り入り、切死ニ決定タリ各勇奮決、幸有テ事故ナク和尚ヲ送リナバ、直ニ我藩ニ下リ拳義ヲ謀リ、全国義応ナリ難クハ同志ノ士三四百人余モ駈催シ駈上ルニ決定タリ、大久保利通日記參看)、

夜丑刻ニナリテ、余ハ人々ニ別レヲ告ケ、御書宮ヲ首
ニカケ敵重ニ奉護リテ（密勅書及ヒ近衛家ノ御添書、駢
馬ニウチ乗り都ヲ立出テタリ、此度ノ御使ハ実ニ朝
廷ノ重キ御使ニテ容易ラム事ナレバ、若シヤ奸党等見
怪ミ見咎メナバ如何ニモシテ欺キ首尾ヨク關東ニ下リ
ナヌ、然レト如何ニ陳言トモ通ルマシカリセバ、畏レ
ト速ニ御書ヲ引裂キ食ヒノミテ、思フ程血戦テ死ナマ
シ物ヲト前後左右ニ眼ヲ配リツ、馬ヲハヤメタリ、行
々口吟ヒケル長歌

さかしくも荒びなすかも。外国の夷狄に詔ひて。か
りこもの乱れてさやく、東人曲事なして八年の年も
来経行き（夷狄等浦賀に來りしより既に八年になむなりぬ
）、長月の長き恨みも、身にしみていざ言向む、天
雲の向伏す国の物部のことたらばして、敷島の都の
空を夜をこめて出立行けは、大空の弥清きかも、月
影の光りに匂ふ、大内のみ山おろしに、吹かへす衣
手寒し、鴨川の瀬々のさゝ波、立渡りたつきもしら
す粟田山木の間かくれに立騒く百の醜人奸党等此に
百人余の人を隠置て探索るとぞ聞り）いり居りと人は云
えとも、掛まくも綾に畏き大君の御稜威かゝぶり、

大御こと畏み奉り、行く我をとむる関も、荒駒の
岩根踏みさくみ、安らけくいゆきとほして、平らけ
く又も昔に立復る御代の米に相坂の。手向の山の木
の間より近江の海に立浪のえならぬ浦のくまもなく
思ひたらず大空も雲まよい来て時雨降る志賀のか
ら崎、ひとつ松あはれ幾代の年やへし人に有りせば
こと問はましを旧りにし跡も聞かまし物を

物部は死ともたゝにはよもくちし、田道が跡のふ
むべきあるを

此身こそ露とちるともなき魂は、永く朝廷辺守り
奉る

斯クテ大津ノ駅ヨリ時雨フリケレバ加籠ニ乗リカ、セ
タリ、草津ノ駅ニ至リテ夜ハ明ケタリ、
○同十一日、天氣ヨク晴レタリ、草津駅ヨリ同シク加
籠ニ乗リカ、セタリ、石部ノ駅ニ至リテ飯ヲ食シタリ、
辛シテ此所マデ來リシモ実ニ朝廷ノ御稜威ニテ、即
テ奸賊滅亡ルノ前表ニヤナト思ヒツ、且和尚並ニ隆
盛ナトハ如何ニ成行キケルニヤトマテ、種々心苦シカ
リキ、水口ノ駅ヲ経テ鈴鹿山ニテ紅葉ノ散リタルヲ見
テ

よしやよし散らはちるとも紅葉はの大和錦の色はかはすな

坂ノ下ノ駅ヲ経テ、關ノ駅ニテ飯ヲ食ヒタリ、龜山ヲ経テ莊野ノ駅ニ至リテ日ハ暮レス、石薬師・四日市ノ駅ヲ経テ明方ニ桑名ノ駅ニ着キタリ、

○十二日空ヨク晴タリ、卯刻頃桑名ヨリ船ニ乗リテ漕出テタリ、桑名ノ城主ハ些シ志有ル人ナルヨシ聞キ居タリシカト、此モ志ノ堅確ク無キ故ニヤ、今度老中ナル奸賊間部下總守カ都ニ参上ルヨシヲ聞テ、其ヲ輔ケム為ニ都ニ人数ヲ遣ハシケル由ナリ(凡ソ二百余人ト云)、昔ヨリ志アリ氣ニ見ヘタル者モ其心忽チニトロケテ、乱戦ノ徒トナレルガ多キタメシナレバ、怪ムニ足ラズ、斯テ風悪ク午后過ニ宮ノ駅ニ至リ着キヌ、此ヨリ加籠ニ乗リカ、セタリ、鳴海・池鯉鮒・岡崎ノ駅ヲ経テ藤川ノ駅ニ至リテ日ハ暮レタリ、此ニテ飯ヲ食ヒ、又加籠ニ乗リカ、セタリ、赤坂・御油・吉田・フタ川・白須賀ヲ経テ新井ノ駅ニ寅ノ中刻至リ着キタリ、我藩ノ定宿ナル某ガ所ニ至リヌ、主人酒肴出シテモテナシヌ、余快ク酒ヲモ飲ミテ、シバシ寝タリ、斯テ主人帳面チフモノヲ持来テ、余ガ姓名ヲ記シ置給ヘト云フ、

此ハ此所ニ関所アリテ我藩ノ人ハ皆姓名ヲ記置クコト常ノコトナレバカク云ヘリ、余ハ姓名ヲ変テ往来セシカト、思フヨシ有テ此ニハ実ノ姓名ヲナム記シ置キヌ、市廣曰ク、十三日・十四日・十五日ノ三日間ノ記事ハ腐朽不明、

○この腐朽不明部分の記事は、「有馬新七先生伝記及遺稿」ならびに「有馬正義先生遺文」によれば左の如し。補つて掲げる。

○同十三日、天氣曇りて雨降らむとす、卯の刻過新居を船に乗りて漕出でけり、風よく程なく舞澤の駅に至り着ぬ、大雨降出で、此より駕籠に乗り昇たり、路悪くしてはかゆかず、濱松の駅に至りて飯を食ひたり、今日はさして心せきもせず、明日は早く大井川を渡りなむと思ひ、天龍川を渡り見附の駅に至りて日は暮れたり、雨ますく降りければ暫く此駅なる柝屋某が家に宿りぬ、今宵は名に負ふ明月なりしかと、雨降て月照らさず、雨弥々降りければ早く大井川を渡りなむと思ひ、戌下刻頃起出で、駕籠に乗り昇せたり、袋井の駅を経て掛川の駅に至りて夜は明けたり、

○同十四日、雨降る、掛川の駅より馬に乗り、新坂の駅に至りて飯を食ひたり、此より空晴たり、馬に乗り金谷の駅より歩き大井川を渡り、島田の駅より馬に乗り急ぎぬ、藤枝岡崎、舞子の駅を経て、府中の駅の北方にて日は暮れたり、

此駅にて飯を食ひ、此より駕籠に乗り昇^{かかせ}たり、今宵は月くまなく照らし、奥津坂より富士の頂見え渡り、いはぬ方なきけしきなり、由井の駅に至りて夜は明けたり、

○同十五日、天気よし、今日は箱根山を越えむと思ふものから心忙し、駒に鞭うちて急きたり、蒲原の駅にて飯を食ひたり、今日は勅使の關東より帰らせ給ふよしにて、荷物夥しく持通りぬ、因て弥々心ぜさせられ、富士川を渡り過ぎ、吉原の駅に至れば、長持てふ物を荷ひ持て行人を払ひのけ、叱声はげしく通りぬ、因て路の傍に馬より下りて畏み、夫より馬を早めけるに、馬前足を折て落ちたりしかど恙無りければ、又馬に乗り急ぎたり、程なく原の駅に至れば、余多の役人^{たちつひ}立集て勅使の通らせ給ふとて立さはぐ、斯くては路いよ／＼はかゆかじと思ひ、此より歩行にて馳たり、沼津の駅まで馳せ行き、此所にて飯を食ひ、駕籠に乗りたりしかど路はかゆかず、因て又歩行て急ぎに急ぎしに、箱根の程にて勅使に逢ひき、三里三十町の嶮岨道を息をもつがず急ぎければ、關所に至れどいまだに日は西にのこれり、既^{はや}く関所を通りてしばし休み、^{すこ}微し酒をも飲みて駕籠に乗り昇^{かか}せたり、^{はた}波多と云へる所に暫し休み、大磯の駅にて夜明けたり、

○同十六日、天ヨク晴レタリ、夜ノ更行カムウチニ江

戸ニ至り着カム物ト思ヒ、加籠^籠ニ乗リカ、セ、急ギニ急ガセタリ、平塚ノ駅ニテ飯ヲ食ヒ、藤澤・戸塚・保土ヶ谷^{〔神〕}・加奈川ヲ経テ、川崎ノ駅ニ至リテシヤン休ミ、鮫洲ト云ヘル所ニ至レバ漸ク午ノ下刻頃ニナム有リケル、村田某ガ家ニ至リ、酒飲ミナトシテ暫ク寝タリ、態ト日ノ暮レ時分ヨリ此家ヲ立出テ、芝御邸ニ申ノ下刻頃至リ着キ、糺合方^{〔邸内学文所〕}ナル堀貞通^{〔堀仲左衛門、伊地知貞馨旧名〕}ガ所ニ行テ宿リキ、同志ノ士集来テ何クレト種々ノ物語ニ夜ハ深更タリ、

此日記ハシモ今度事アリテ余都ニ参リ上リテ、路スカラ有シ事共思ヒ出ルニ任せ、書記セル物ニナム、深ク家ニ秘置テ人ニナ洩シゾ、朝廷ヲ畏ミ崇敬ヒ奉ルハ人ノ道ノ根元ナレバ、子孫ニ至ルマテ此根元ノ所以ヲ露忘レナムハ不忠ノ甚ダシキ者ゾ、ヨクノ思フベキ事ゾト、^{〔言脱カ〕}

安政戊午ノ秋九月廿日

平ノ武満記ス、

四〇五 都日誌^{下有馬新七}
武満

去月十六日(安政五年九月)都ヨリ東国ニ下リ、同月ノ十七日ニ勅書ノ御写并ニ三條殿下ノ御書、即テ土佐守ニ呈リ、近衛殿下ヨリ御口上ノ趣モ詳ニ申シ、斯クテ毎日越前ノ国福井ノ藩士橋本左内・三岡石二郎、長門ノ国萩ノ藩士山縣半藏(穴戸巖旧名)、土佐ノ橋詰明平其他四方有志勤王ノ人々ニ會議テ挙義ノ策ヲ相謀レリ、水戸ノ藩ハ偶々勃興シテ、小カネノ馭マテ出タリシ人々モ空シク国ニ帰ル事トナリニタレハ、今ハ共ニ談合テ詮ナシトテ、彼ノ藩ニハ謀議サリキ(我党勃興セバ彼藩モ望觀ハ成ルマシケレ共、予メ謀議リ難キ所以モアリキ)、然ルニ九月廿三日ノ夜ニ我党ノ士日下部伊三治、老中松平伊豆守ヨリ御用召有之捕ハレニ就キヌ(此ハ水戸ノ都ノ留主居鶴飼吉左衛門・同幸吉父子酒井若狹守ガ手ニ捕ハレ、去ル八月ニ日下部ハ小吉郎ト共ニ勅書ヲ奉護テ下レル事顯ハレテ、斯クハ日下部モ捕ニ就キタルナリ、甚ト遺憾シキ事ナリカシ)、是ニ於テ我党會議スラク、カク挙義ノ決策遲タリテ定マラズムハ、天下忠義ノ士ハ往々奸党ノ為ニ捕ハレ遂ニ正路ニ復ルノ期無カルベシ、且今有志ノ諸藩トイヘドモ、容易ク決拳ハセマシ、然在レバ空シク時機ヲ過ス中ニ、若シ間部下總等ガ(去月十八

日ニ都ニ參上レリ)奸謀成熟シ、正義ノ大宮人ヲ挫キ奉リ、強チニ將軍宣下ヲ申シ下シナハ、奸党益々勢ヲ得テ、暴威ヲ振ヒナム、然ラバ此議ハ弥々破レテ我党手ヲ動ス事ナリ難カル可シ、斯テアラムヨリハ十月朔日(頭注)并伊直朝ヲ刺スノ議茲ニ厥ルニ井伊掃部頭ガ登城ヲ待チ伏セ、前後左右ヨリ切り入リナハ、彼ヲ討取ル事必定ナリ(斬奸ノ説)、カ、ラハ少シク大義ヲ天下ニ伸ベ、四方ノ義氣ヲ鼓舞スルニ足リナム、然レト今都ニ間部・酒井等有リテ、彼ヲ輔ル国々モ有レバ、速ニ後ヲ繼テ都ニ馳上リ朝廷ヲ奉衛護ル者アラシ、然シテハ恐^レミモ主上ノ御危難坐サムハ眼前ナレバ(彼ノ井伊・間部ガ奸謀ニ、若シモ事有ラバ主上ヲ取り奉テ朝廷ヲ要シテ四方ヲ討ノ謀議モアリシ事、慥ニ聞ケル由ナリケル)○辰翰申第^(ママ)号承久ノ例云々参照)、是ヲ越前・長門ノ人々ニカタラヒ、天下義拳ノ先驅ハ我党ナス可ケレバ、都ヲ奉衛護ノ任ヲ自任シタヒスト堀貞通ト共ニ、橋本・山縣等ノ人々ニカタラヒキ、然在ルニ越前侯遂ニ心ヲ決定ラレ、自ら潛行テ都ニ馳上リ朝廷ヲ奉衛護テ奸賊ヲ討ノ策ヲ定メ給ヒキ、我党雀躍テ喜ヒニ堪ズ(潛行ノ謀計等ハ今此ニ略キタリ)、因テ貞通ハ、東海路ヲ昼夜兼行テ都ニ立寄り、詳ニ決拳ノ策

ヲ近衛殿下迄申奉り、且筑前ノ国福岡ノ城主黒田美濃守近日國ヲ立江戸ニ下リ給フ由故、此タ大坂(ウラ)・伏見ニ滞居リ給フ様ニ近衛殿下ヨリ仰下サレ度趣ヲ申奉リ(黒田侯ノ滞居ヲ期トシテ四方一時ニ振興ノ策ナリ、○黒田家ハ曩ニ西郷カ御親書ヲ携ヘ福岡ヘ行キタリ、其時挙行ノ談ニ及ヒシナラン)、速ニ我藩ニ下リ國ヲ挙テ義心ナリ難クハ、同盟ノ士ヲ催シ、駈上ル可キ決策ナリ(大久保利通日記參看、○貞通ハ十月十三日江戸ヲ発足ノ積リナリ)、余ハ北陸道ヲ潛行テ、大坂ノ城代土屋采女正(常陸土浦ノ城主)ノ公用人大久保要ハ忠義ノ志有ル人故、此人ヲカタラヒ、暫ク采女正ノ關東下向ヲ止メ(采女正ハ忠義勤王ノ志有ル人ニテ深ク時世ヲ憂ヒ、且大坂ノ城ニモ非常ノ爲ニ兵糧七万石余儲置テ、事有ラバ都ヲ奉衛護ラムトノ志ヲ懷ケリ、故ニ奸党既ク之ヲ疑ヒ、頗ル忌諱メルユエニ大坂ニ置ク事ヲ欲セス、近日關東ニ呼下ノ策ヲナセルナリ)、夫ヨリ因幡ノ國ナル鳥取ニ行ニ(テ)因幡守ニ挙義ヲ進メ(是モ固ヨリ勤王ノ志深キ人ナリ、義旗ヲ舉ルハ此モ黒田ノ滞在ヲ期トスルナリ)、即テ都ノ辺ニ潛居テ彼地ノ動靜ヲ伺ヒ、奸党ノ虚実ヲ探クリ、四方ニ布告ノ決策ニテ、儲置タル諸ノ書籍並ニ衣服ノ類ヲ悉ク売リ代ナシ、十月十一日ノ朝

窃ニ築地ノ旅館ヲ立出テ(時ニ余ハ築地ノ門跡ノ辺ナル美濃國加納ノ城主永井肥前守ノ儒臣長戸楨太郎ガ塾ニ止宿レリ、我藩ノ久保田好學ナトモ此ニ宿リ居リキ、因テ近國ヲ遊歴ト欺キテ此ヲ立出ケルナリ)、芝御邸ニ至リテ、同志ノ士ト會議リ、再ヒ対面モ期シ難カルベシト互ニ永訣ヲ告ケ、日暮頃ニ此所ヲ立出テ、向島ナル東橋ノ向側越前侯ノ下邸三岡石二郎ガ旅館ニ至レリ(此ハ櫻任藏ヲ同行スル約定有ル故ニ、今夜酉ノ刻ヲ期トシテ此ニ至ル事ヲ定メ置ケル故ニ、コトサラニ此ニ至レリ、委シクハ別ニ記セル者モ有レバ此ニ略ケリ、○這記事迭ス惜ムヘシ)、三岡・櫻ノ両士マチマフケテ歎喜ヒカタラヒ、斯テ酒宴ニ及ビ佳肴美味トリマカナイ種々ノ物語ニ及ビ、此度ハ必ズ奸賊ノ首ヲ見ム物ゾト互ニ語ルモ勇々シ、斯テ深更ニ及デ旅裝シ、余ハ此度ハ毛利平右衛門ト姓名ヲ變革ヘ、櫻ハ端山仙藏ト改メテ余ガ家来ノ姿ニナリ、丑刻頃此所ヲ立出テ、僕一人ヲ召具シ(此ハ伊勢國ノ産ニテ名ヲ良藏ト云ヘルナリ)、鎗ヲ持セタリ(鎗ハ隆盛ガ江戸ニ遣ハシ置ケルナリ、鎗ヲ持セタルハ諸所ノ関所ヲ通ルニ便リヨケレバナリ)、今宵ハ月甚ト清ケカケレハ(笥)

雲霧も遂に治まる御代なれば、月も限なき武藏の原

兩國橋ノ辺ニテ

隅田川すみにし御代に復さんとたち出る旅の勇まし

きかな

ナト打詠^(メノノカ)メテ、内藤新宿ノ駅ナル役人等ノ熟ク寝タルヲ起シ先触ヲ托シ、速ニ人馬ヲ出サレヨト云ヘハ、役人等云、急ニハ調ヒガタシ、夜ノ明方マデ待チ給ヘ、暫シ宿ヲモ借り參セムトテ、役人案内ニテ山本屋某カ家ニ至リス(此ハ東海道ト違ヒ人馬鮮キ故、前触ハ前日遣ハサレバ急ニハ調ヒカタシトゾ)、櫻ハ今度藤森恭介ガ捕ハレニケル時ニ、櫻モ已ニ捕^(レ脱)ハムトスルヲ辛シテ遁レ、三岡ノ旅館ニ潜居ケルヲ、斯ク同行セル者故、探索ノ為メニカク此ニ止ルニヤト甚ト心苦シク思ハレキ、余謂、タトヒ探索ノ為メナリトモ容易クハ捕ヘ得シ、急遽テハ却テ疑ヲ受クルノ基ナルベシトテ、主ニ酒肴ヲ調ヘサセ互ニ物語シテ笑ヒ梁メリ、既ク夜モ明ケ渡リヌ、

十二日天氣ヨク晴レタリ、辰刻頃ニ至リ馭馬漸ク来リシカハ、櫻ハ步行ニナラハザル故ニ此ヨリ馬ニ乗レリ、余ハ僕良藏ヲ召具シテ步行セリ、高井戸ノ駅ニ至リテ飯ヲ食ヒ、是ヨリ櫻モ步行セリ、此時奸党与力・同心

ノ類ヲ諸所ニ遣ハシ、或ハ商人或ハ乞食ノ体ニ姿ヲ改メ行人ヲ探索シテ、非常ノ人ヲ禁スルコト甚ト嚴重ナリ、余等ヲモ彼等見怪ミケルニヤ、所々ニテ種々問ヒ尋ネ或ハ後ヲ付ケ来リナドスルモウルサシ、櫻声ヲヒソメテハ彼御家人共ニテ所謂隱密者ニマキレナシ、心セヨト秘語カル(櫻ハ二十年余モ江戸ニ住居ケル故ニ、カ、ル類ヲモ能ク知レルナリ)、余ハ態ト何気ナク^(モ)体ニモテナシ、又布田^(白)ノ駅ニ至リテ休ミス、八王寺ノ駅マデ至ル心組ナリシカト、諸所ニ暇取り府中ノ馭ナル玉ノ井屋某ガ家ニ至リテ宿ル、此ハ余ガ相知レル宿ナリ、此ニテ兩具提灯ヨウノ物ナト買求メタリ、彼隱密者等モ此宿リマテシタヒ来テ、主ニサマ〜問ヒ尋ネシガ、主ハ余ガ相知レル者ナル故ニ、事故ナク彼等モ帰レリ(此宿ノ主ヲ相知レル故ハ、此所ノ六社ノ神主猿渡近江、其子ニ豊後トテ父子共ニ忠良ノ者アリ、余カ知己ノ友ニテ、此ハ水戸前中納言齊昭卿ニモ度々參レル人ナリ、余屢々此人ノ許ニ来リシ事アリテ、此宿ノ主ニモ逢ヒ且宿リシ事モ有リテ相識トナルナリ)、此処ノ六社ノ神主猿渡父子ハ余ガ知己ノ友ナレバ、余処ナカラ暇乞ヲモセマホシク思ヘ共、彼父子共ニ水戸ニ所縁アレバ機事ノ洩レ易キヲ恐レ、コトサラ

ニ訪ヒモセサリシ、甚〔最カ〕ト本意ナキ心地セラレ、

○同十三日天氣ヨシ、夜ハ未タ明ケザレド宿ヲ立出タリ、駒木野ノ関所モ事故ナク通り、小佛峠ニテ飯ヲ食ス、去ル頃越前ノ藩士某〔名詳ナラス〕江戸ニ下リケルニ、路スカラ問者ノ為メニ窺ハレ辛シテ下リケルカ、宮根ヨリ此方ハ何ノサハリモ無リシトゾ、水戸ノ藩士某モ然在リシトゾ、因テ関所ヲ越テ後ハ猶心セヨト三岡氏ガ云フニ由テ、弥々心ヲ配リツ、行キ、上野ノ原ノ関所ノ此方ナル川辺〔酒匂川ノ上流ニテ玉川ト云トゾ〕ノ茶屋ニ暫ク休ム、此ハ武藏ト甲斐ノ国界ニテ鮎ノ名所ナリトゾ、斯テ上陸ノ原ノ駅ニ至リ、立花屋某ガ家ニ宿レリ、

○同十四日空ヨク晴レタリ、未明ニ宿ヲ立出テ、鶴川野田尻ノ駅ヲ経テ、犬目ノ駅ヨリ櫻ハ馬ニ乗レリ、鳥澤ノ駅ヲ経テ猿橋ノ駅ニ至ル、此所ノ橋ハ昔猿王ガ架ケ初メタルヨシニテ、猿橋ト名付ケ、ルトゾ、其碑石ヲ橋ノ側ニ立テタリ、甚トアヤシキ橋ナリキ、斯クテ此所ノ茶店ニ暫ク休ミニタレバ、櫻モ追付タリ、此皆〔ヨリ脱カ〕共歩行セリ、駒橋ノ此方ヨリ郡内ノ城見ユ〔此ハ昔シ武田信玄ノ家臣小山田備中守ガ居タリシ城ノ跡ナリ〕、此城嶮

嶮シク実ニ要害タクヒ無キ城ナリ、大月下花崎ノ駅ヲ経テ、上花崎ノ駅ニ未ノ刻頃至リ着キ〔城脱カ〕和屋某ガ家ニ宿レリ、櫻些シ不快ニテ薬用ナトセラレキ、

○十五日、天氣ヨク晴レタリ卯刻頃宿ヲ立出タリ、櫻ハ不快ナル故加籠ニ乗レリ、黒ヌタノ駅ヨリ駒飼ノ駅迄ノ間ニ二里ハカリノ嶮岨キ笹子峠ト云フ坂アリ、此ハ甲府ト郡内トノ界ナリトゾ、此ヲ越テ鶴瀬ノ駅ニ至リ飯ヲ食ヒタリ、此辺ヨリ武田勝頼ガ最後ノ合戦セシ天目山ナト見ユ、当時忠勇無双トテ甚ト可称ハ小宮山内膳ニソ有ケル、杵淵重光ガ筑摩川ニテ主ノ敵ヲ討取リ戦死セント同シサマニ勇々シカリケル壮士ナリ、君ニ奉仕ノ志ハ誰モカクコソ有ラマホン、勝沼・栗原・石和ノ駅ヲ経テ、甲府ノ此方ニ酒折宮〔平田篤胤カ碑銘アリ〕アリ、日本武尊東夷ヲ平ゲ給ヒテ、常陸ノ国ヲ経テ甲斐ノ国ニ至リ、此所ニ暫シ坐シケル旧跡ナリトゾ、詣テ奉拜リキ、初メ伊勢ニ詣テ給ヘル時倭姫命ノ神劔〔姫カ〕ヲ授奉リ給ヒシ時ニ、慎之莫怠ト誠メ給ヒケルハ綾ニ貴キ御誠ナリキ、ナベテノ事皆怠惰ヨリゾ事ノ敗レイデ来ヌル者ニテ、古今ノ成敗治乱モ往々此ノ怠惰ルト慎ムトニ因ラサルハ無シ、況テ大事ヲ懷フ者ハ猶更ニ

慎マテハ志ヲ遂ケ功業ヲ成就コト難シ、纔カノ怠惰ヨリシテ大事ヲ過ル類例シ多ケレバ、能々思フテ慎ム可キ事ニコソ、斯クテ甲府ノウマヤナル甲府屋某ガ家ニ宿リス(此アタリハ織物ノ名座有ル所ニテ、余嘗テ粟田宮ノ御母人ノ云ヘルヲ聞ケル事有リ、此所ニカラ糸織ト云織物アリ、此ヲ以テ衣服ニスレバ、ヨクタモツトナム、余ハ今後ハ野ニ伏シ、山ニ寝ナム事ノミ有ルベケレバ、彼ノカラ糸織ナル物ヲ以テ羽織ニセハ善カリナムト思ヒ、主ニ謀リテ買求メ即テ羽織ニナムセシナリ)、甲府ノ地形四方ハ山連テ内ニ平地アリ、要害ハ云フヘクモアラズ、素ヨリ富饒ノ地ナリ、彼ノ武田信玄ガ此ヲ治ムル、農事ニ心ヲ用ヒ民ニ取ルニ纔二十ノ一分バカリナリトゾ、故ニ今ニ至テモ土民信玄ヲ仰慕テ忘レズ(十ノ一ヲ取ル今モ信玄ノ時ト同シカリシトゾ、其ハ甲斐國ハ國広ク人氣強悍ニシテ、且ツ信玄民心ヲ得タル故ニ、其カ制度ヲ改メテハ治リ難キトノ家康卿ガ遠圖ニテ、今モカク有リシトゾ)、信玄ハ只軍事ニ長セルノミナラス、地ノ利ニ依リ民心ヲ得シ故ニ、無道殘忍ノ挙動ノミ多ケレト、彼ガ在世ノ程ハ敵國其隙ヲ窺フトイヘトモ、遂ニ国内ヲ犯スコトアタハス、威ヲ隣國ニ振ヒケルナリ(古今一時ニ威名ヲ振ヒシ勇將智將民事ニ心ヲ用

ヒサルハ無カリキ、此ハ邦本ノ固キ所以ニシテ、昔ヨリ民(ヲイ)ヲ、ミ宝ト称ヘテ、朝廷ノ大御政ニモ民事ヲハ殊ニ重クン給ヒキ、実ニ然ル可キ御事ニコソ)

○同十六日、天氣ヨク晴レタリ、卯刻頃宿ヲ立出タリ、櫻ハ鹿籠ニ乗レリ、非崎ノ駅ヲ経テ、臺ガ原ノ駅迄ノ間(四里八丁)川ノ辺ヲ通ル路ニテ、小石多ク路甚ト悪シ、頗ル歩行ニナヤメリ(河水溢レタル時ニハ原野ヲ通ル路外ニアリトゾ)、教來石ノ駅ニテ飯ヲ食ヒ、ツタ木ノ駅ニ至リテ紀ノ國屋某ガ家ニ至リテ宿レリ、今日ヨリハ彼隱密者ノ氣遣ヒモ無リキ、

○同十七日、天氣ヨク晴レタリ、寅刻頃宿リヲ立出チテ櫻ハ馬ニ乗レリ、此ヨリ諏訪ノ駅マデノ間ハ立寄ル可キ宿サヘマレナリ、下諏訪ノ駅ニ至リテ湖水ノ邊有ル飯店ニ休ミ飯ヲ食ヒ、此ヨリ櫻モ歩行シテ鹽尻峠ヲ越ヘタリ、此辺所々ニ雪見ユ、寒氣堪ヘ難クナムアリケル、此峠ノ頂ヨリ富士ノ山湖水ノウチ越シニ遙カニ見ヘ云ハムカタ無キケシキナリ、暫ク此ニ休ミ、今日ソ富士ヲ見ルコトノ限りニテ、又モ觀ル事ハ期シ難カルベシト思ヒ甚ト感慨ノ情ヲ起シケル、

あかすたに見てこそ行かぬ富士の山今日を限りの名

残と思へば

斯テ洗馬ノ駅ニ至リ薩摩屋某ガ家ニ宿リス、

○同十八日、天氣ヨク晴レタリ、卯刻頃立出テス、ヤ
コ原ノ駅ニ至リテ飯ヲ食ヒ、此ヨリ櫻ハ馬ニ乗レリ、
福島ノ関所ヲ通り此駅ニ暫ク休ミス、此辺ハ人氣頗ル
義ニ勇メリ、井伊・間部等ガ暴政ヲ深ク憤リ居ケル、事
アラバ義旗ヲ挙ム勢ナリ、櫻殊ニ感シテ此ニ宿リテ奸
党ノサマヲモ略語り聞セムト云ヘル、余不肯、此ハ大
事ノ前ノ小事ニテ苟モ真ノ志アラバ、我党義旗ヲ挙ケ
タリト聞カバ、彼等モ必ス振起リナム、今予メ語り聞
カセテハ、我党忌諱ヲ受ルノ身ヲ以テ、却テ事ノ敗ヲ
モ引出シナムト云ヒケレバ、櫻モ宜然ナリトテ、此ヨ
リ余ハ馬ニ乗リタリ、土民共ノ語ルヲ聞クニ、去ル九
月ニ間部下總守都ニ参リ上ル時、此辺ヲ通りケル時ハ
〔頭書〕當時形勢記スルカ如シ
甚ト嚴戒ノサマニテ自身ノ駕ニハ別人ヲ乗セ供人ニマ
キレ、或ハ此宿ニ宿ルサマニテ自身ハ傍ノ山路ヲ越ヘ
ナドシテ通りケルトゾ、此ハ余江戸ニ居リシ時ニ聞キ
シ事ナリシガ、今土民ノ語ヲ聞クニ果シテ然ナリケリ
〔當時ノ記ニ、間部上京シテ北條高時カ如キ挙動ヲナスナラム
ト、故ニ途次ニ要撃セムト企タルモアリシト私語キタリ、此ノ

風説ヲ探知シテ潛行シタルモ知ルヘカラス、カケ橋ヲ通り
ケルニ紅葉ノ散リ積リケルヲ

乗る駒のつめにもみち葉踏み分けて木曾のかけ橋渡
り行くかも

吹きをろす峯の嵐に散り積みて錦渡せる木曾のかけ
橋

斯テ上松ノ駅ニ至リ近江屋某ガ家ニ宿レリ、

○同十九日、天氣ヨシ、寅刻頃宿リヲ立出テタリ、皆
共歩行セリ、此辺ハ山々甚トヨク繁茂リタリシガ、今
ハ木立マハラニ見ユル所モ多カリキ、余ガ此ヲ通シハ
天保辰ノ年ニテ、今ハハヤ十五年ニナリス、其時ニ思
ヒ比レバ山々ノケンキハ勿論、宿々ノ家居モ大造ニナ
リ、人氣モ奢侈風流ノ方ニ移リニタリ、物換リ時移リテ
カ、ル山野マテモ自然スル風俗ニ押移リケルニヤト、
甚ト感慨ノ情サヘ起リス、櫻ハ東国素生ノ人ニテ、江
戸ヨリ西ニハ初メテ来レル故ニ、カ、ル山野ニモ似モ
ヨラズ言語ヒヤビテ容貌モ鄙シカラズトテ、イトノ
感セラレキ、須原ノ駅ヨリ櫻ハ馬ニ乗レリ、野尻ノ駅
ニ至リテ飯ヲ食ヒ、マコメノ駅ヨリ落合ノ駅マテノ間
サカシキ坂路ナリ、余ハ空臺リテ雨降ラムトスルモノ

カラ、急キテ落合ノ駅ニ至リ着キテ、柏木屋某ガ家ニ至リ宿リス、櫻ト僕良藏ハ馬ニ乗リタリシガ、遅カリシ故ニ雨ニ逢ヒタリ、夜ニナリテ雨イヤマシニ降出テ雷鳴リタリ、明日ハ加籠ニ乗ラムトテ、駅所ノ役人ニ其事ヲ云ヒラコセタリ、

○同廿日、雨イタク降リタリ、余モ櫻ト加籠ニ乗リカセタリ、宿ヲ立出シハ寅過ル頃ナリキ、此ノ辺ヲ木曾ノ十三峠ト称シテ路サカシ、大井ノ駅ニ至リテ飯ヲ食ヒタリ、斯テ雨ハ晴レタレバ、余ハ此ヨリ步行セリ、細久手ノ駅ニ至リテ大和屋某ガ家ニ宿レリ、

○同廿一日、天気ヨク晴レタリ、卯刻此宿リヲ立出タリ、櫻ハ馬ニ乗レリ、此辺ハ飯店稀レニテ立寄ル所ナケレバ、宇治ノ駅マテ飯ハ食ハズシテ至リ、糸屋某ガ家ニ宿レリ、主酒肴トリマカナイテ饗応シケル、此ハ余ガ僕二人召具シタルヲ見テ、少シ利ヲ貪ルノ心ヨリ斯クハセシ者ナリ、謝礼ノ為金子少シハカリ取ラセタリ、

○同廿二日、天気ヨク晴レタリ、卯刻頃宿ヲ立出タリ、皆共步行セリ、加納ノ城下マテ四里八丁アリトイヘト路甚ト遠シ、加納ヨリ櫻ハ馬ニ乗レリ、カ、トノ駅ニ

テ飯ヲ食ヒタリ、路スカラ行人ト列タチテ物語ルヲ聞シニ、彦根領ハ行人ヲ改ムル事甚ト嚴重ニテ、浪士ヨフノ者ハ一宿ヲダニ許サズ、且領内ノ者トイヘトモ、京ニ參ルニハ其ガステノ役人ニ、云々ノ訳ニテ參リ、何日ニ帰ルト委シク其状ヲ申出テ、若シ其ガ日限遅クナルカ、又ハ申出シ状ト道筋ノ違ヒアレバ屹ト糺明ニ及ブ事ゾト、実ニラカシキ仕置モ有レバ有ルモノナリ、斯テ垂井ノ駅ニ至リテ美濃屋某ガ家ニ至リテ宿レリ、斯テ主人ニ酒肴ヲ調ヘサセ櫻ト共ニ飲ミタリ、櫻云フ、彦根領内ハ云々ノヨシナレバ、彼ガ領内ヲ過グルハ大事ノ場合ナレバ昼夜兼行テ急ギニ急ギテ草津ノ駅ニ早ク至ラム、余謂フ、然アリテハ却テ悪シカリナム、方今我等此所ヨリ遽ニ昼夜トナク急ギニ急ギテ急遽シキ体ニテ通ラムニハ、ナカノニ彼等ガ疑ヲ受ク可キ事ナルベシ、唯ナニゲナキ体ニテ寛舒ナル体ヲ示シ、態ト彼ガ領内ニモ宿リナムゾ善カルベシ、假令行人ヲ改ムル事ノ嚴重ナレバトテ、藩士ノ通行ヲイカニ無体ニ手ヲカケ捕フ可キ訳無レバ、何程ノ事アル可キ、關ヶ原ノ古戰場ノ跡ヲモ明日ハ見メクリ行カムト云ヘバ、櫻モ其意ニ從ハレタリ、

○同廿三日、天氣イトヨク晴レタリ、今朝ハ態ト遅ク起テ辰ノ下刻頃宿ヲ立出テタリ、皆共ニ步行セリ、斯テ伊吹山ニ雲カ、リテ風烈シク紅葉ノ散リケルヲ見テ神風のいふきの高根時雨してさそふ嵐にもみち葉散

りぬ

關ケ原ヲ諸所見メグリテ、我先君維新公(十七代義弘公)

ノ御勇戦坐シケルヲ思ヒ出テ奉リテ、甚ト感慨〔感慨に堪へかねたり〕ラル、メリ、公ノ御陣ハ伊吹山ノ方ナリト聞ク

吹をろす伊吹嵐の大刀風に東をのこもをちまとひけり

斯テ柏原ノ駅ニ至リテ飯ヲ食ヒ、鳥木〔本カ〕ノ駅ニ至リテ難

波屋某ガ家ニ宿レリ、実ニ聞シ如ク行人ヲ改ムル事情

密ニテ種々ノ探索メ甚ト嚴重ナリキ、余等ハ態ト知ラ

ス顔ニテ、酒ナド飲ミテ笑ヒ楽メリ、此辺ノ者等ガ語

ルヲ聞クニ、掛マクモ畏キ我大君ヲハ恐ミモ暴主ノゴ

トク申シ奉リ、去月二日九條殿下関白内覽御辞退在セ

シ事モ、九條殿下御諫奏ノ事セシヲ主上殊更 御逆

鱗坐テ、御手ツカラ九條殿下ノ御頭ヲ御打擲坐シケル

故ニ、カク関白内覽ヲモ御辞退坐シケルト申シ触シ(

虚説、惣テ九條殿下ヲ忠良ノ御方トシ、主上ヲ悪シ

サマニ申シ奉リキ、斯ク聞クサヘ恐キ事ナルヲ、此ハ

彼奸賊掃部頭ガ所為ニテ、己ガ領内ニ斯クハ申シ触ラ

シムルニ疑ヒナシ(九條ト井伊ヲ憎ムノ甚シキ、此ノ巷説

ヲ以テ知ルニ足ル)、見ルニ付ケ聞クニツケ阿那耶ト憂

憤切齒ニ堪ヘスナム(間部カ儒臣ニ大湖收藏ト云ヘル者ア

リ、此ハ昌平館ニテ暫シハ居タリシモノナルニ、去月ノ半頃ヨ

リ、恐クモ 主上崩御坐シケルト云フ説ヲ頻リニ申シ触シケ

ル、此モ間部ガ奸謀ニテ、カ、ル雜説ヲ申シ触ラシ、江戸有志

ノ心ヲ疑惑ハシメン下心ナリ、此ハ此ニヨシ無レト彼奸賊等ガ

朝廷ヲ恐ミ奉ラズ、サマザマ奸計ヲナス事ノ略相似タル故ニ、

思ヒ出ルニマカセテ此ニハ記シタリ、○當時種々ノ巷説喧囂

中ニハ、聞ニ忍ヒサル説モ尠カラス)

○同廿四日、空曇レリ、寅ノ半刻頃宿ヲ立出タリ、櫻

云、是レヨリハ殊ニ主従ノ体ヲ正クシ、彼等ガ疑ヲ受

ケサル様ニ挙動ナム、今日モ己レニ勉メテ草津ノ駅マ

デ步行セントテ、三人列テ語り合ヒ行ケケルニ、隱密

者ヲシキ者共四人余等ト後前ニナリテ、窃ニ私語合テ

余ガ体ヲ窺フサマナリ、余ハ態ト知ラズ顔ニテ路ノナ

クサニ何クレト櫻〔ト〕ヲ語り合テ、スリ針峠ト云ヘル所ニ

至リテ茶店ニ休ミ、彼ノ名物テフ団子ナド食ヒタリ、

彼四人ノ者共モ同シク茶店ニ休ミタリ、此所ヨリ近江ノ湖水ヲ見下シテ、湖水ノ水甚ト清ラカニケシキイハム方ナケレバ、

近江の海多ならぬ浦のはる／＼と見れともあかぬ比良の高山

見渡せば浪も静かに比良の根の影うつるまですめる
湖水

斯テ此ヲ立出テケレバ、又彼四人ノ者共モ初ノ如ク付来リヌ、即テ武佐ノ駅ニ至ルニ、此駅ノ入口ニ茶店アリ、此ニ役人ヨウノ者五六人居タリシガ、彼付来リシ者等彼処ニ至リ何角ト私語キシガ、今度ハ六人出テ来ニケル、余等ハ此駅ノハテナル茶店ニ立寄りテ、飯ヲ食ヒタリシガ、彼等モ亦此内ニ来リテ余等ガ体ニ目ヲ配リツ、居タリ、余猶モ見向モセズ、此ヨリ酒モ微シハ飲ミ即テ立出ケレバ、彼等三人ツ、前後ニ別レテ余等ヲ囲ミテ行クサマナリキ、余思ヒケルハ、若シヤ彼等強チニ迫リテ、妄リニ手ヲ動かサバ、直ニ切捨テ跡ヲク라마シ都辺ニ馳上リテ、都ノ地ニ骸骨ヲ曝シナム者ゾト、心ニ秘テ路々櫻ト談リ合ヒ笑ヒ物^(採カ)シテ行ケルニ、守山ノ駅ノ此方ヨリ雨降り出タリ、因テ守山ノ

駅ニ至リテ暫シ休ミ、既ク草津ノ駅ニ至レバ、彼ノ宿引テフ者出テ来リテ止宿リ給ヘト云ヒケル故、即テ山本屋某ガ家ニ宿リヌ、彼ノ付来リシ六人ノ者等モ続テ此家ニ入り来リテ此家ノ主ト私語ク事程久シ、余主ヲ呼テ荷物ノ掛改ヲ托ス、此バカリノ荷物(余等ガ荷物ト云フハ纒ニ風呂敷包ミ三ツアルノミナリ)何ゾ掛改ルニ及ブ可キト云ヘト、余態ト宜ナハス、此ハ此ノ駅ノ制度ナレバ私ナラヌ訳ナリ、必ラズ掛改メヨト強チニ云フニ付テ、僕ノ良藏ヲ添テ主ト共ニ、駅ノ役人カ許ニ遣シタリ、余ハ櫻ヲ伴フテ奥ノ方ニ通り、茶ナト飲ミ今日ノ路ノ遠カリシコトナド何クレト語合ヒキ、櫻窃ニ云フ、荷物ノ掛改ナクシテ済ム事ナラムニハ、其俣ニシテ置テ然ナラム、若シ彼等風呂敷ヲ解テ内ヲ改メテ、若シ些シノ要アル書附ニテモアラバ如何ニセン、余笑フテ云フ、余ハ内ヲモ改メヨガシト思ヘリ、故如何トナレバ初ヨリ斯クアル可キ事モアラムト思ヒシ故ニ、少シク要機ニ関係ル書等ハ悉ク焼捨テ、既ク江戸ヲ立出ムトスル時余ガ相知レル者ヨリ、娼女ノ書キタリシ艷書ヲ請ヒテ荷物ノ内ニハ余多入レ置キタリ、然レハ彼等若シ開キ見タラムニハ興ヲ醒スベントイヘバ、櫻モ

手ヲ拍テ笑ヒタリキ（一ツノ智慮ト云フヘシ）
斯テ僕ノ良藏待テトモ帰ラズ、何事ナラムト危ミ思ヒ
居タリシニ良久シクシテ帰り来リ、何事ニテ斯ハ遅カ
リシト尋ネケレバ、荷物ノ掛改ハライテ駅ノ役人等イ
ヨ／＼薩摩ノ毛利平右衛門ト云ヘル人ナリヤ、近頃ニ
斯ク姓名ヲ替ラレタルニハアラサルヤ、初ノ姓名ハ何
ト云ヘシヤ、何頃江戸ヲ立出テラレシヤ、且ツ其方ハ
何方ノ者ニテ何頃ヨリ彼ノ人ノ僕トナリシヤ、家来ハ
姓名ヲ何ト称フヤナト、種々尋ネ問ハレシニ由テ、云
々対ヘタリ（此ハ初ヨリ篤ト僕ニ云フ付置テ遣ハシタレハ、
ヨク対ヘタルナリ）、甚ト心苦シカリキト語レリ、余笑
テ能クゾ始終ヲチナク対ヘタリ、何事モ尋ル人アラバ
有リシ俚ニ云フゾ善キ、今何事ノアレバニヤ、斯クハ
カリムツカシカリケルゾ、常ハ荷物ノ掛改コスムツカ
シカリシニト云テ物笑ヒシツ、斯テ主出テ来リケル故、
彼ノ六人ノ者共ノ居リシ所ヲ指シテ、彼所ニモ行人ノ
止宿シト見ユ、何方ノ人ニヤ、藩士ナレバ相宿ハ成リ
難キ幕府ノ制度ナルハ固ヨリ知レル筈ナリ、如何ヨウ
ノ者ニヤト態トイヘハ、彼ハ私親類ノ者ナリ、初ヨリ
斯ク申シ侍ルベキニト云ヘル故、然ラハ苦シカラズ止

宿セヨト云ヒ付ケタリ、暫クシテ駅ノ役人兩人来リ、
主ニ種々問尋ネ、僕良藏ニモ亦同シク問尋ネ、彼ノ六人
ノ者ノ所ニ至リテ良久シク私語合テ帰レリ、櫻声ヲヒ
ソメテ此ゾ一大事ノ場合ナリ、謹ムベシト云フ、余云、
我等斯ク黙々トシテ声ヲヒソメ物語リセバ、ナカ／＼
ニ悪シカリナム、酒宴ヲ催シ高談笑語セムトテ、主ニ
酒肴ヲ調ヘシメ、酒ヲ飲ミテ高声ニ雜談笑語セリ、此
駅ノ風俗ニテ所謂娼女ヲ旅籠屋毎ニ置テ行人ヲ欺キ利
ヲ貪ル所ナレバ、余ガ酒宴ヲシホニ例ノ娼女三人列テ
来リ、酌ヲ執リナムト云ヘルヲ余諾ト云ツテ、頻リニ
彼等ニ酒ヲ飲マシメ、大ニ興アル酒宴トナリタリ、余横
手ヲ打テ拍子セハ、櫻ハ彼新納忠元ノ作レル肥後ノ加
藤カ来ルナラバ云々ノ歌ヲ声ヲカシクウタハレシモ、
時ニ取テノ興ニテ面白シ（彼六人ノ者共頻リニ此サマヲ窺
ヒ居タリシナリ、○編者因ニ記ス、肥後ノ加藤カ来たならば、
塩硝着にだんこ方言（丸の）のゑしやく、それでもきかすにきたなら
は首に刀の引出もの、尚外ニ数句アリ、新納、当時国老ノ班ニシ
テ、薩摩国大口郷ノ地頭職タリ、大口郷ハ肥後国境ニアリ、又
同国境出水郷ノ地頭職ニハ山田昌巖ト云ヘル新納ニ（劣カ）又老
功ノ者ヲ置テ不慮ニ備ヘタリ）、櫻ハ態ト酒ニ狂セル如ク

モテナシ、瓶子ノロヨリ酒ヲ飲ミ、大声アケテ今ヨフ
 ヲ歌ヒ、或ハ踊リアルキタリシカバ、娼女等大ニ恐怖
 テ櫻ニハ酒ヲ飲マセシナトスルヲ、余モ亦彼等ヲ愚弄
 シテ、サナガラ不可立ノサマヲナム示シケル、此サマヲ
 見テ彼ノ六人ノ者共ハ些シハ疑晴レニケルニヤ、其後
 ハ音モセザリシ、斯テ彼娼女等ハ銘々ニ金子取ラセテ
 帰ラシメ、今宵ハ一大事ノ夜ナレバ甚ト嚴重ニ心ヲ用
 ヒテ寝ネタリ、深更ニ雪イヤマシニ降りケレバ櫻云、
 明日ハ加籠ニ乗ラレヨ、然ナクシテハ駅所ノ役人等、若
 シ足下ヲ見知リタル者アリテ見咎メハ猶事ムツカシ、
 スクマテ仕済シタルモノヲ此所ニ至リテ捕ハレニ就ク
 事アリテハ、甚ト遺憾シキ事ナルベシ、余宜ナヒテ加
 籠ノ事ヲ主ニ言付ケ、駅ノ役人ニ云ヒ遣リス、
 ○同廿五日雪弥マシニ降ル、態ト遅ク起キ出デケレハ
 娼女等来リテ酒ヲ進ム、因テ又々櫻ト共ニ酒ヲ飲ミ微
 酔ニ及ヒ、辰刻頃宿ヲ立出テ、余ハ頭ニ頭巾ヲカブリ
 テ、加籠ニ乗リカ、セタリ、彼六人者モマタ附キ来レ
 リ、既テ駅ノ前ニ至リケレバ轎夫等加籠ヲ此ニ居ヘタ
 リ、此ハ疑ナク役人等ガ轎夫ニ云ヒ付ケ、スク物シテ
 余ガサマヲ見ム為ノ所為ト察セラレタリ(此ハ余去月七

日急キニ急キテ此駅ニモ暫ク立寄りテ、轎夫ノ事ナトサマノ、
 イソガシク云ヒ、其月ノ十一日ノ曉ニモ此ニシハ立寄りタリ
 シ事モアリテ、其時ハ中根仲之助ト云ヘル姓名ニテ通り、間モ
 ナク又毛利某ト云フ姓名ニテ通ル物カラ、役人等モ怪シク思ヘ
 ルニヤ、且月照和尚ノ事件モアリテ、余嘗チ都ニテ鍵屋ガ家ニ
 宿リシニ、鍵屋モ其ガ後ニ奸党等ヨリ糾明ノ趣モ有リケルヨシ
 ナレバ、余ガ都ニ参上リ又夜中窃ニ下レリケル事モ聞ヘシナル
 ベシ、然レバ斯ク嚴重ニ探索ル者ナルベクヲモユフ)、若シ
 役人ノ中ニ慥ニ余ヲ見知ル者アリテ見咎メナバ、中根
 ト云ヘル名字サヘ薩藩ニハナケレハ、決シテ我輩ニア
 ラザル趣ヲ陳言ナム、彼等上方ノ柔弱キ女々シキ者ナ
 レバ容易クハ手ヲ動スマシ、然シ無体ノ挙動ナサハ、
 最早是迄ナリト心ヲ決定テ、態ト加籠ノ中ニ悠然ニ眠
 リ居タリ、暫シ時ヲ移ス者カラ声ヲ励マシ、轎夫ヲ叱
 リ加籠ヲカ、セタリ、ヤハセノ渡場ニ至レバ此ニモ役
 人等詰メ居テ、行人ヲ改ムル事嚴重ニテ、余等カ姓名
 并ニ江戸ヲ立出タル日限ヲ委シク問テ、一々帳面ニ書
 記シタリ、既ク船ニ乗リシカバ、彼六人ノ中兩人余等
 カ乗リ居タル船ニ乗リ、其他ハ悉ク帰レリ、船ヲ漕出
 テケレバ風ハ強ク雪ハ弥マシニ降りテ、比枝ノ山ハ見

ル中ニ麓ヨリ高根マデ忽チ白砂(妙カ)ナセリ、斯テ湖水ノ中程ニ至レハ弥吹キニ風吹テ、船中ノ人々ドヨヒ合ヒテ、或ハ仏經ヲ唱ヘ珠子ヲツマクリ、或ハ泣沈ム者モアリテ種々ナリキ、宋人程頤ハ倍州トカニ謫サル、ニ、船中ニテ風吹ク(強カ)船覆ラムトセシニ、些モ恐怖ル、色ナカリシカハ、或ル老翁ガ如何ニト問ヒケレバ、心存スル誠敬而已トカ対ヘシトゾ、我ハ男道ナキ身ナレ共、今大事ヲ懷フ身ニシテアレバ実ニ泰山ヨリ重ク、此ニテ空シク水中ノ藻屑トナリテハイカ計リ遺憾シカル可キ、アハレ神ノ幸坐ハ此船恙ナク早ク大津ニ着カシ給ヘカ(強カ)シト、海神ニ祈奉リキ、辛シテ大津ノ石場ト云ヘル所ニ船着キタリ、甚トウレシ、衣服モ皆ヌレタリケレバ、或ル茶店ニ立寄り火ヲ焼テ衣類ヲカハカシ、斯テ此駅ノ此方ナル茶店ニ立寄り飯ヲ食ヒ、酒ヲ飲ミタリシカト寒氣強クシテ惣身冷カナリ、即テ此ヲ立出デ皆共ニ歩行セリ(此ヨリ彼附来リシ兩人ノ者等モ、余等ヨリ先ニナリ行キ過キタリ)、雪踏ミ分ケテ相坂山ヲ越ヘ、寒氣弥々堪ヘ難カリケレバ、追分ノ茶店ニ立寄りテ又酒ヲ飲ミテ立出デ、遙ニ都ノ方ヲ拜ミ奉レリ、櫻ハ都ニハ初メテナレバ余云、此ヨリ都ニ廻ツテ大宮所ヲモ拜ミ奉

リテ、伏見ニ至リナムト云ヘハ、櫻宜ナハズ、斯ク諸所ニテ危難ヲ經歷テ漸ク此マテ来レル者ヲ、今マタ都ノ方ニ参ラハ、ナカナカニ疑ヒヲ受ケムハ疑ナシ、即テ都ヲ見ル時モアルベシトテ、此ヨリ伏見街道ニ赴キタリ、山科ノ大津ノ宮ノ御陵ヲ遙ニ奉拜リテ

たへす降る山科山の御陵の跡なつかしみ積る白雪
斯テ伏見ニ未ノ刻頃至リ着キ、兼春市之丞ガ家ニ至リテ休ミ、余ハ即テ御仮屋守ナル有川氏(名ハ藤左衛門ト称セリ)ガ許ニ至リ、若シ幕人等ヨリ毛利某ト尋ル者アラハ云々答ヘ給ル可シトテ、種々カタラヒ、マタ旅宿ニ帰レリ、此家ノ主ハ其ガ祖父ノ時ヨリ(祖父四郎兵衛ハ、近衛忠熙公御簾中郁姫君附從ノ御広鋪番頭職ナリシト)

余ガ相知レルモノナリケレハ、ネムゴロニ饗応シ酒肴ナドトリマカナイ、拳家集リツ、何クレト語り合ヒキ、暫クアリテ有川氏モ来リ、文珠某ガ娘ナル春女等マデ来リ、興アル酒宴トナリタリ、余モ酒ヲ過シ夜西下刻頃船ニ乗リテ伏見ヲ立出テタリ、路スガラ読メル歌ハ
難波江の入江のあしの立乱れ思を碎く世こそ慷慨き
なには江の繁る葦間をかり払ひ誠の道を世に立てめ
やも

○同廿六日、天氣ヨク晴レタリ、辰刻過キ大坂ニ至リ着キヌ、即テ余ガ相知レル虎屋ガ家ニ至リテ旅宿リス、(實直、大坂城代、土浦藩主)土屋采女正ノ動靜ヲ探リ聞クニ、此ハ去ル十三日ニ此ヲ発駕シテ關東ニ下ラレ、マタ大久保要ハ奸党ノ忌諱ヲ受ケ、辛シテ此モ同日ニ出立ケルトゾ(要ハ五百余人ノ人数ヲ催フシテ都ニ馳上ルナト、巷説マチマチニシテ奸党甚ト忌惡メルトゾ、因テ殊ニ危キ様ナリシカト、種々ニシテ漸ク大坂ヲ立出ケルナリ)、倍テ櫻ハ坐摩宮ノ(今ハ大坂ニテハ便音ニ唱ヘテザマ宮トナム称ヘリ)神主ニ櫻靜馬ト云(頭注)櫻氏初靜ト称シ後東雄ト改ム、常陸筑波郡ノ人、幼ニシテ僧トナリ後太フ人同シ氏ノ人ニテ所縁アレハ、彼所ニ行カムトテ立坂ニ赴キ神宮ヲリ、任藏トハ幼少ヨリ親交セリ出タリ(靜馬モ固ヨリ忠義ナル志シ有ル人ニゾ有ケル)、然ル事ノ体ニテ(我藩諸郷ノ主衛人数モ江戸ヨリ帰レリケルヲ宰相公大坂ニ滞在坐シケル程、近衛殿下ニ御請書奉ラセラレ給ヒテ、右ノ人数五十人バカリ、先ヅ此レバカリニテモ止メ置ケトテ止メ置カセ賜ヒシカト、此モ去月廿日ニ大坂ヲ立出ア下レリトゾ)、此モ国老タル豊後等ガ党ノ所爲ニヤ、甚ト口惜シ江戸郡守衛兵ノ、余ガ友 伊地知季靖・吉井仁左衛門旧名等モ幕府ノ交代掃部ノ參次、奸党等ガ忌諱深ク、此モ同日ニ大坂ヲ立出テケルトゾ)、我党ノ謀議モ些シク機会ヲ失ヘリ、然トモ黒田侯ノ參府、長・因幡(二藩ノ有志者)ノ事件モアレバ、強カチニ

土屋ヲノミ頼ミトセンヤト思ヒ、酒ナド飲ミ居タリシニ、大阪御邸ノ留守居ナル平田某(名ヲ伊兵衛ト称ヘリ)、御邸ニ何ノ状モ申シ出テス、何ノヨシニテ下レルヤト申シヲコセタリ、初メハ遊歴ノ為メニ物セシナト欺キタレト、ナカノ聞入ザリシ故ニ、此人ハ隆盛ヨリモ先君順聖公ノ御心モ洩シ置キ、頗ル志モアリテ今ノ世ノサマヲソ略知レル人ナレハ(先公ヨリ義挙ノ準備ヲ聞キタル人)、些シク事情ヲモ申シナム物ト思ヒシカド、又思ヒ返シテ某ハ去月都ニ上リ、隆盛等ト鍵屋ガ許ニ居リタリシガ、奸党等ガ忌諱ヲ受ケテ、此度我藩ニ下レルナリ、委シクハ貞通(堀)即テ大坂ニ下ル可キナレバ聞キ給ヘト、書ヲ認メテイヒ遣リス、櫻ハ今宵ハ一宿リケルニヤ帰ラズ、(イ)

○同廿七日、天氣ヨク晴レタリ、辰刻頃櫻帰リ来リテ云、彼靜馬ガ許ニテ聞クニ彼レ幕役ニ親シキ者アリ、某ガ云ヘルニ、方今幕役等ガ探索ル人々二十七人計リモ有テ、其ガ中ニ中根某ト云フ者去月江戸ヨリ夜窃ニ都ニ參リ、鍵屋某ガ家ニ兩三日滞在テ程ナク關東ニ下レル由、此ハ薩摩ノ藩士ナルヤト云ヘリ(其時ノ着タリシ袴ハ、小倉織ナル云々ノ袴ナルヨシモ語レリ)、此ハ疑無

ク足下ノ事ナルベシ、然レバ草津ノ馭ナトノサマモ、カクハムツカシカリキ、実ニ危キ事ナリシ、且ツ都ノカタメ嚴重ニテ、淀八幡ノ辺ニ百余人計リ、鳥羽竹田街道モ同シク人数ヲ置キ、西ノ宮・兵庫辺マテモ間者ヲ遣ハシ、サマ／＼探索ル事甚ト嚴重ナリトゾ、然レバ兩人共ニ因幡ニ行ク事ハ危シトモ危キ事ニテ、若シ西ノ宮・兵庫辺ニテ危難アラバ大事去リヌベシ、因テ某独リ因幡ニ行キテ勤王ノ義ヲ説キナムニ、彼藩モ決シテ否トハ云フマシ、足下ハ甚ト危急ナレバ暫クモ此地ニ止リ難シ、且都地ニ行カムモ危ケレバ、一先貴藩ニ下リ、再ビ馳上ルトモ又遅カラシ、死ハ易ク生ハ難シ、今死ス可キノ時ニアラズト諫メラル、余以為ラク、今此時ニ至リテ我藩ニ下ルトモ何カセム、如何ニモシテ都伏見ノ辺ニ潜居テ彼地ノ動靜ヲモ探リ、時ノ至ルヲ待チナム、我今都地ヲ去リテハ誰カ彼地ノ動靜ヲ四方ニ告示スル者有ルヘキ、因幡ハ櫻一人行キナバ事足りヌベシ、因テ彼ニ任カセムト思ヒシカド、櫻頗リニ我藩ニ下レト進ムル者カラ、余陽ニ許諾テ、然ラバ足下ハ因幡ニ行キ給ヘカシ、余ハ此ヨリ我藩ニ下リナムトテ、主ヲ呼テ船ノ事ナト語ラヒ(因幡ノ動靜ハ伏見ナル有川宛

ニテ、余ニ申シヲコシ給ヘト約ヲ定メ、其他サマ／＼カタラヒシ事モアレト略キヌ、○有川ハ有志ノ人ナリ、西郷・大久保等ト交深シ、今宵ハ此ニ宿リ給ヘ、暫時ノ名残ヲモ惜ミナムトテ、酒宴ヲ催シ夜モスガラ種々ノ物語ニ及ヒヌ、○同廿八日、天氣ヨク晴レタリ、船裝モ調ヒシカバ、僕良藏ハ生国ナル伊勢ニ帰シ、櫻ハ因幡国ヘト出立テリ、ステ船ニ乗リタリシカバ、肥前ノ国ナル佐賀ノ藩士團忠三郎ト云ヘル人乗リ居タル、日暮ニ及テ我藩ノ士相良彦次・汾陽仲二ナトモ此ノ船ニ乗レリ、余ハ中国辺ニ遊歴セム為メニ、便船セル由ヲ申シテ、今宵ハ共ニ酒ナド飲ミテ語りキ、忠三郎ガ方今ノ形勢ヲバ己レ独リ知り顔ニ、種々ノ事ヲ語りノ、シリケルモ一與ニテ甚トヲカシ、

○同廿九日、天氣ヨク晴レタリ、余船頭ヲ欺キテ云ヒケルハ、余ハ些シ急ク事ノアレハ、此風ニテハ出帆ノ程モ近日ニアリトモ覚ヘズ(時ニ毎日西風吹キタリ)、因テ陸地ヲ急キ中国ヲ行カムト思ヘルナリトテ、即チ船ヨリ下リタリ(斯クシハシ船ニ乗レル者ハ、櫻氏ガ心ヲ安クセシメ)(増カ)且奸党等余ヲ探索ルヨシナレバ、余ガ船ニ乗リ(脱カ)「又船ヨリ」下リテ、中国ヲ行キタリシト聞ケバ、即チ中国ヲコン尋ヌベシ、然

在ラバ都辺ニ潜居ルニ便ヨカラムト斯クハ物セシニナム)、
 斯クテ虎屋ガ家ニ至リ、云々ニテ中国ヲ行クモノカラ、
 シハン槍ヲ預置キネト托置テ、即テ袴ヲ着テ遊歩ノ体
 ニ立出タリ、世降リテ種々ノ妄説盛ニ起リコトサヤク、
 漢國風俗ニ押移リテ、掛マクモ綾ニ可恐天皇命ノ皇祖
 神ノ事依シ給ヒシ隨ニ、天下所知食ス大御國ノ根元ノ
 所以ヨシヲ弁メ知ラスシテ、一向ニ武臣威權ヲ振ヒ、
 世ノ人徒ニ世ノ時勢ニツレテ幕府ニ諂ヒ仕へ、君臣上
 下ノ名分ヲ失ヒケルヨリゾ、斯ク荒ヒナス醜臣ハ出テ
 来テ、世ノ中浅マシク成リクダチケムカシ、阿那慷慨
 カヤ、斯テ種々ニ思慮テ再ヒ都ニ参上リ、奸賊等ガ動
 靜ヲ窺ヒテ、忠義シキ志アル國々ノ物部ニ告遣リ勤王
 ノ軍勢ヲ起シ、奸賊等ヲ言向テ、可恐クモ我カ天皇命
 ノ宸襟ヲ靖メ奉ラム者ソト思ヒ起シテ、行ク路スガラ
 物セシ長歌並ニ短歌一首

おし照る難波の葦間、踏み分て出立行けは、(玉しきカ)
 の平の都の安らけく。打見る山の弥高く、かき見る
 家庭のさき(不明文字、マテカ)も弥たち栄ゆ、百千
 足皇国のまほの、真秀国の綾に貴き、高坐天津御神の
 大御代ヨリ、天津日嗣しらしく、大君の雄々しく猛く

坐て、直く平らに聞しめ給ひ看し給ひて、千早振人を
 ば和し、弥広に國も真広く百の臣も弥栄ゆくを、曲津
 日の荒ひ怪しき、外国の夷狄に諂ひて、彦根なる城の
 辺の臣か逆事して、世の中痛くさやげりしを、こたひ
 我もまた、掛まくもいと可畏大救命かしこみ奉て、
 朝廷辺をいけらむ極み、物部の八十の心を思ひ充満、
 荒金の吉備の真金の、剣太刀御代の御楯を、執りはき
 ていそしき荒魂、振起し醜の醜臣、うちきたため千万代
 までも、動無く弥歴々に、常しへに八十國までも、弥
 広に豊榮へます、大御代に我も逢へむかも、

反歌

大君になほく仕へて千万代栄行く御代に逢ふよしも
 かも

斯テ八幡ノ此方ヲ行キタリシニ、淀ノ方ヨリ問者等三
 人来レルガ、余カサマヲ怪シト思ヒニタル体ナレバ、
 余ハヤク其体ヲ見テ茶店ノ後ヨリ潜出テ、八幡山ノ後
 ナル竹藪ノ中ニ隠レタリ、即テ彼等急テ通り、未ダ遠
 クハ行クマシナド語リツ、行キ過キタリ、

しぬはらのしげこき中に居隠れていさやと執りつ劔
 太刀はや

此ニテ衣服ヲ着カヘ頭巾ヲカブリ、夜ニ入りテ八幡ノ社ニ詣テ、朝廷ノ安全ク坐ナムコトヲ奉祈テ

掛テ仰ク神ノ幸ニ大君ノ御代を八千代と常盤固盤(常)ニ八幡ノ辺(邊)トリ淀ノ城ノ辺モ、奸党等ガ五十人余ハカリニテ戒備ヲナシ固メタルヨシナレハ、窃カニ間道ヲ潜ヒ通り、辛シテ伏見ニ至リ有川氏ガ所ニ宿レリ、
○同十一月朔日ニ窃ヒテ都ニ参上リテ

玉しきの平の宮を再びも仰ぎ奉るぞ貴きろかも
再び平安宮ヲ拜ミ奉ル事ハ有ルマシクナト思ヒシニ、幸有テ斯ク都マテ参上リケルモ、未ダ余カ命ノ幸有アリテ終ル期ニ至ラサルニヤ、斯クテ姓名ヲハ又岡本文次郎ト換ヘテ、伏見ノ里ニ潜居テ、奸賊等ガ動静ヲ窺ヒケル、伏見ニ潜居タリケル時ノ長歌並短歌一首、

近江の海彦根か城なる醜臣が、逆事なして大御国汚し奉らむと、鳥が啼く東の国の、大城の辺にいはいはひもとをり、外国の夷狄に誂ひて、恐くも 朝廷かたふけ奉らむと計からひし、賊臣をとなひ、さばへなす狭蠅の臣か、(此ハ老中間部下總守を云へり、彼は越前のさはへの城主なればなり) 敷島の都に詣てゝ忠勤し臣の子等をも、捕へつゝ弥荒ひなすを、内日刺す大

宮人は、大内の山に 塵も立てめやと、矢たけ心の梓弓真弓執り持ち、射向はゞいきらひ物と、岩が根も通らさらめや、我も又綾に畏きき 大勅命畏ミ奉りて、物部の雄々しき心、天地に思ひたらはし、旅寝する伏見の里に、潜居ていきつき渡り、我命いけらむ極み、八隅しゝ吾大君の、大御代の御代の榮へを、万代と神に祈りつゝ朝には出ていて歎息(嘆)く、夕には入り居り思ひ、鋌太刀磨しき心を、振立てゝとよみさやける、罪人を払ひ鎮めて、天津日の神隨なる大道を、まなをに執りて千万代拜み奉り、かしこみて仕へ奉らむかも

反歌

天地に思ひ充滿はし大丈夫の
立てし心を神もたすけよ

○同月七日、天気ヨク晴レタリ、長門ノ国ナル萩ノ藩士山縣直彰(名ハ半藏半藏ト稱ヘリ、某ガ父ハ半七ト云テ彼宋字ヲ崇信テ、國史纂論ト云ヘル書ヲ著ハセル人ニゾアリケル)余ガ潜居ヲ訪ヒケリ、斯テ共ニ同列テ都ニ詣ケル、兩人ナガラ大刀ヲモハカテ市人ノサマニ身ヲヤツシテ行キケル、余ハ若シモ事アラム時ノ為ニトテ、短劍ヲ

懐ニセリ、路スガラ作レル長歌並短歌一首、

八隅し、我が大君は、神(カミ)るきの神の命の、事依し給ひし隨に、天下御食国としろしめし、浦安の安国と安らけく、敷ませる山城の、玉しき平の都の、国見れば綾に貴く、山見れば山弥高かし、河見れば河弥清し、家居なす家庭も広し、見渡せる路の八十限、平けく秀国のうちくわし国そ、こゝをしも宜しきまして、八十国は宜も栄(サ)へず、掛まくも綾に畏可き、神(カミ)隠御稜威いかしく、内らをは直く平らに、看し給ひ聞かし給ひて、外事は雄々しく猛く坐せば、雨雲のしはしかくしもかゝとも、み空は弥に照します天津御神の看行し、即て科戸の神風の塵も残らず、吹払ひ御代の栄は、朝日の豊栄のほりに、弥栄へ弥常しへに、天地とかきりはあらし万代までも

反歌

時雨してしはしかくしも曇るとも

弥照りまさむ天津日のかけ

斯テ進藤某(近衛殿諸大夫進藤式部権少輔)ヲ訪ヒ種々カタラヒ、今宵ハ眞葛ヶ原ナル眞葛軒ニ宿リヌ、イタク霰ノ降りケレバ

百に千に思ひくたけて玉霰

あられたはしる眞葛野の原

曉方ニ伏見ニ帰り、伏見ニテ折ニフレテヨメル歌トモ、

かりこもの乱れし世にも物部の

立てし心は動かさらず

物部の矢たけ心の弥ましに

思ひくたくる世にこそ有りけれ

荒ひなす醜の醜臣打払ひ

肇国しらす御代に復さむ

(肇国シラスハ日本記ニ崇神天皇ヲ奉称テ、肇国天皇ト云ヘル

事見ヘタリ、因テカクハヨミニタルナリ)

露のまま忘れかたなき大君の

御代の栄を祈りつ我れは

梓弓引てゆるべす物部の

矢たけ心の止む時あらめや

草深き伏見のさとに置く露は

世を思ふゆゑの我が涙はも

大君の憂き御心を余所にのみ

かくて見つゝも忍ふ可きかは

○同十三日、直彰等ト共ニ宇治ニ物シタリケルニ時雨

ノ降りケルヲ

忍ふにも猶余りあり宇治川の

昔の跡をとふしくれかな

風さそう時雨の雨に袖ぬれて

あはれ身にしむ宇治の山里

平ノ清盛等ガ暴威盛ナリシ時ニ、以仁王 高倉宮首メ
忠義ヲ唱ヘ、義兵ヲ起シ給ヒシ御功業実ニ勇々シカリ
キ、然ルヲ中井積徳カ通語テフ書ヲ著ハシ、何クレト
悪シサマニ論ヒケルハ、例ノコトサヤク漢国風ノサカ
シラ説ナリ(栗山愚ガ保健大紀ノ論ヒハ、略宜々シク聞ヘタル説ナリカシ)、何ハトマレ身命ヲモ願ミ給ハズ、朝
廷ノ御為ニ忠勤シミマセル御志甚ト卓レタル御事ナラ
ズヤ、積徳ガ通語ニ大塔宮護良王ヲモイタク譏リ奉レ
リ、護良王ノ忠勤シミマセル御功業ハ、実ニ当時ノ第
一トモ申シ奉ルヘキ御事ニテ、英明ク坐テマタ忠勇タ
グヒマレナルヲ、積徳等ガ妄説実ニ忌憚ル事無キ者ト
ヤ云ハヌ、今国々ノ大名等多々有ルガ中ニハ、勤王ノ
志シ有ルモマレニハアレド、大概ハ雄心ヲ振起シ、断
然ト義兵ヲ起ス人ナシ、其ハ奸党ノ暴威ヲ恐懼シ、或
ハ利害ヲ計較ノ心ノミ主トナリテ、真情ヨリ忠誠ナル

志無ク、大義ヲ次トスル故ナラズヤ、今ヲ以テ古ヲ觀
ルニ、今ノ人ハ口コソ賢コケレ、実事ノ上ニ就テハ古
人ニ及ハサル事遠キカモ、

大君の御国かたむる物部の

猶予してなと雄心のなき

此ハ国々ノ国主城主等ノ猶予シテ、一人モ雄心ヲ振起
シテ、義旗ヲ挙ル人ノ無キヲ慷慨ミテ読メルナリ、凡
ソ何事モ猶予不断ナリケルヨリゾ敗ル、ガ常多カリ、
況テ 皇国ノ危難ノ時ヲヤ、断リテ行ヘハ、鬼神モ道
シ避クト漢国人モ云ヘルナラズヤ(当時各藩ノ形勢記ス
ルカ如シ)

○同十五日ニ都ニ詣テタリ、此日近衛大納言ノ卿今度
將軍宣下アルニヨツテ 勅使トシテ關東ニ下向リ給フ
二條中納言ノ卿ハ同シ十七日關東ニ下リ給フ、此ハ表向ハ御
官位昇進アル可キニ依テ、二日後レテ下向リ給フヨシナレド、
外ニ 主上ノ深く思食ス趣坐シテノ御事トゾ、委クハ別ニ記ス
ベケレバ、此ニハ略キタリ(別記送ス)、斯ク將軍宣下ヲ申
下シケルハ、問部下總守ト酒井若狹守・内藤豊後守ガ
奸謀ニテ、去月十五日ニ近衛殿下ノ内覽ヲ褫ヒ奉リ、九
條殿下ヲ再ビ閔白ニ復ヘシ奉レルニ依テナリ(此ハ深く

酒井ト間部トノ謀計ニテ、間部ハ暴威ヲ振ヒ、酒井ハ止ム事ヲ得ス幕威ニ從フサマニテ、内実ハ朝廷ヲ崇敬ヒ奉レル体ニモテナシ、窃ニ雲上人ニ忠勤ラシキ説ヲ為シ、間部ガ挙動ヲ悪シサマニ申シナシテ、暫ク彼等ガ申ス意ニマカセ給ハサレバ、不慮ノ大患モ有ル可キナド或ハヲトシ奉リナトシテ、遂ニ九條殿下ヲ闕白ニ復ヘシ奉リテ、將軍宣下ヲモ申シ下セルナリ、其カ種々ノ奸謀ノ次第ハ別ニ記スモノアル故コ、ニハ略キタリ(別記送ス)、固ヨリ主上ノ宸慮ヘ一橋刑部卿ヲ將軍ニ任シ給フ宸慮ナリシカド、斯ク止ムヲ得サセ給ハサル所以ヨシアリテ、紀伊宰相ニ將軍宣下ハ坐シケルナリ、

然レバ弥ニ宸襟ヲ惱シ賜ヒ、深ク彼等ガ暴逆ヲ御憤リ坐シケルトゾ、実ニ憂憤慷慨ニ堪ヘサル事ナリ、斯クテ竹田通ヲ通リタリケルニ内藤豊後守ガ帰ルニ行逢ヒタリ、彼ハ御所ノ御警衛ヲ蔽ニセルト称ヘテ、毎日伏見ヨリ都ヲカケテ往来セル由ナリ、此ハ実ニ朝廷ヲ苦メ奉レル事云フマクモアラズ(十一月十六日ヨリ十二月八日結尾迄ノ数葉全ク腐朽惜ムヘシ)

○この腐朽不明部分の記事は、「有馬新七先生伝記及遺稿」及び「有馬正義先生遺文」によれば左の如し。補つて掲げる。

○同十八日に間部が参内の由聞しゆゑ、窃しひて都に詣で折よくば刺殺しなむものと窺ひたれど、戒備いと嚴重にて近付得ず、

夜に入りて彼が旅館を窺ひたるに、此もいと嚴重なりき、且寝所も定まらずして、居所も何くとも定所なしとぞ、夜更て直彰が旅館に至りて宿り、曉方伏見に帰れり、

○同廿日に江戸の方に都の動静をも委しく申し遣りたり、斯くて都に詣で奸党等が動静を窺けり、雪いたく降りたりければ、祇園社の此方なる茶店に宿れり、彦根よりも三百人位警備の為に都に人数を出せるよしなり、曉方に伏見に帰れり、

○廿五日に曉に伏見を出で、東福寺の内即宗院に先考の御墓有りける故詣でたり、夫より都に詣で、進藤氏を訪ひ、夜をこめて伏見に帰れり、

○同廿七日に因幡の国より櫻が書翰来れり、其趣は、別れし後に危難を犯して漸く彼地に至り、堀安達等の忠まめ助しき志有る人々をかたらひけるに、彼藩より首めに事を挙ることは難けれど、応援の軍勢は疑なく出すべしとの趣なり、斯て直彰訪ひ来りければ、種々の談合に及び、予め義旗を起すの決策を別に定めたり、黒田侯の参府をまち、其が伏見大坂に藩居を期とするの策も有しかど、黒田侯は病氣と称て参府なく、初めの策は悉く成らざりし故に、別に余が策をなし、因幡の応援は疑なれば、長門の応援に有らば云々せむと直彰とかたらひき、悉くはこゝにするさす

○同廿八日、都に詣で、三條殿下の御許に余等が計策の趣を申し奉りたり、斯て直彰と進藤氏を訪ひけり、日晝て伏見より又山科の方に行きたり、此は些奸党等が見恠しみけるに依てな

り、山科にてよめる、

斯て世に有らむ限りは山科の止ます尽きむ大和真情

曉方に伏見に帰れり、

○十二月三日、雪降りたり、我が若殿又次郎の君、近き程伏見に着かせ給ふ由、故に上書らむと思ふものから、終日草稿をなむ物しける、夜になりて直彰訪ひ来れり、因て種々談らひ、直彰は今夜亥頃此を立出で、急ぎに急ぎに国に帰れり此は深く談合ひける趣有りければ帰れるなり

○同八日、又次郎の君伏見に着かせ給ひけり、即て余は御側役なる野山某名は武兵衛と云へり、此は先君の御時より御側役也に見て、此程の世態をも申

して上書る書をも託て、かならず断然と御心を決定給ひて伏見に滞居給ひ、天下義旗の倡をなし、先君順聖の公の御遺志を継述給へかしと深切に申し上られよと云へば、彼の上書の書は自ら上る可きなれど、今は豊後が万事執行ふなれば、此は第一と彼に談合はでは成り難しと云て、御滞居の事を欲りせず余が策するは此に因て余は旅宿に帰れり、然るに余が同郷なる前田十郎訪ひ来れり、余は些し病氣にて四五日滞居せるよしを欺きたり、余が困窮せるを以ての故にや、金壹両を恵まれたり、友朋の情義忝し、然れど大事は洩し難ければ、態と欺くは欺きたり、最と本意なし、今宵は此に宿りなむと云へるものから、夫より

酒肴を調へ饗応し、終夜語り合ひたり、

○同シ(十二月)九日ニ又次郎君(忠義公旧名)、遂ニ伏見ヲ御発駕坐シケル(御相統式御執行ノ為メ御出府ノ途次)、午刻頃伏見ノ御飯屋ヨリ、都ノ留主居伊集院某ヨリ(名ハ太郎左衛門)御用申シ来レリ、因テ彼ノ許ニ至リケレバ云々ノ事ナル故、早速ニ我藩ニ帰ルベキトノ仰セコトノヨシ申サル、(偽旨ナラムト云ヘリト)、余畏奉リテ即テ旅宿ニ帰レリ、既ニ術策ノ施ス可キナク、空シク我藩ニ帰ラムト遺憾シク種々ニ思惱メリ、

○同十一日ニ旅装シテ都ヲ立出ケルモ、甚ト遺憾シク阿那慷慨カヤ(此時空ク帰ル可キ義ナラネト、施ス可キ術策ナク且我が藩忠義ノ志アル者モ鮮カラズ、人数ヲ集ヒナハ四百余人モアル可キ由ナレバ、イザヤ此人々ト共ニ勃興ラバ天下義氣ノ唱ヲ為スニ足リヌベシト思ヒ、此ク都ヲ立出デケルナリ)○大久保利通日記及ヒ岩下方平・吉井友實親話記参照)、大宮所ヲモ拜ミ奉リナムトテ、御所ヲ畏ミ恐ミ拜奉リキ、路スガラヨメル長歌并ニ短歌一首、

雲の上ハ高く貴し、見れとあかぬ宮居も綾に、玉しきの平の宮の、宮柱太しく立て、八隅しく現御神と天下所知食す大庭に、可畏モ拜ミ奉り出て立て、

水底清き鴨川の流をつたひ、音に聞く音羽の山の、
 瀧津瀬を余所に見つゝ、名もしるき大淀川をさし渡
 り、八幡の山に手向して我が越行くは、津の国の尽
 す心を照します神の幸のありませば、又かへり見む
 路の限八十限ごとに、弥歎息き弥憤り、百に千に思
 ひくたけて過行けば、弥遠に里離来ぬ、弥高に山も
 越來ぬ、物部の我が大君の大勅命かしこみ奉り、海
 行かは水漬(海)かはね、山行かは草生屍、朝廷辺に死な
 まし物を、為便のたつきを知らず、難波江のあしま
 踏分け行く路(掃路カ)の阿那慷慨や、梓弓引けば本末すゑ遂
 にいけらむ極み、玉の緒の絶へてもたゞに、よも止
 まし田道の臣の、古の跡を慕ひてこひまろひ我は来
 つるかも大坂の郷

反歌

朝廷辺に死す可き命なからへて

帰る旅路の憤ほろしも

斯テ大坂ノ虎屋ガ家ニ至レリ、月イトサヤカリケレバ
 都地を立隔て行く山の端を

月に詠めて帰るあはれさ

都思ふ心隈なき月影を

みてのみ慕ふなには江の浦

○同十二日、空ヨク晴レタリ、今朝大坂御邸留守居ヨ
 リ御用アリケル故ニ即テ出テタリケレバ、方今幕府ノ
 探索厳密ナレバ、速ニ船ニ乗リ帰ル可キトノ事ナリ、
 余良ミテ帰リケル、船ノ事共主人ニ托シ置キタリ、小
 牟田某(名ハ源五右衛門) 訪ヒ来レリ(鹿兒島加治屋町同
 郷ノ人)

○同十三日、雪降リタリ、其時ニ都ノ方ヲ詠メテ作レ
 ル長歌并ニ短歌一首、

弥に遠に都離て、なには江のいめも結(結)はば、夕月夜

五更闇の、不明にも雲居の空へ、見得分かて三雪降

りけり(危)な大日枝の山もかくりて、八幡山白旗(な)にせる、

白妙の目妙しきかも、何かかく錦の御旗、大内の御

山おろしに吹靡かせ、我大君の御車の御供たまひて、

先駆て草生屍露霜の消ぬ可き時に、逢ふよしもあり

なむ者と思へとも、まづ程遠き筑紫男の為便しらて、

天地(満足はシテカ)に満言て慕ふかも阿那慷慨や、我こそは国の罪

人、朝廷辺(危)へ宸襟(服食すを脱カ)苦しく斯て見つゝも、帰るか

も我身を恨み、哭涙袖さへ所潰て、弥思ふ悲物は世

間有

反歌

余所にのみいつまでか見む都地の

八幡の山に降れる白雪

○同十四日ノ朝船ニ乗リタリ、宇治川橋ノ下ナル富島ト云ヘル所ニ船宿リセリ、今宵千鳥の啼ケルヲ聞テ身を恨み世を歎息く我は友千鳥

啼てなにはの夢も結はず

○同十五日ニ我藩ノ友等關東ヨリ下ルトテ、余ヲ訪ヒ来リタリ、因テ近江屋某ガ家ニ至リテ、關東ノ動靜ナド委細シク聞タリ(我藩ノ奸魁某島津ヲ中原某^藩介ガ刺殺ス策モ有リシ由、委細シクハ此ニ記サズ、○中原後ニ親話セシコトアリ、石室秘稿參看、互ニ世態ヲ歎息キ泣哭ヨリ外無カリケル、斯テ人々云ヒケルハ如此ル涯ニ成テ、イカテ我藩ニヲメノト婦ルベキ、如何ニモシテ潜居テ事ノ變アラバ速ニ馳上リ、朝廷辺ヲ守リ奉ラムト欲ス、^{足下ハ脱カ}如何思ヘルヤト奮慨テ云ヒケル、余深ク其ガ真情ヲ感テタリ、且ツ友等ガ朝廷ヲ奉畏コトノ深切ナド実ニ感ヌルモ余リアリ、余モ(カクセマシカ)ト幾度ノ思ヒシカト、熟ラ今時勢ヲ觀察ルニ、有志ノ国々ト雖モ、將軍宣下有リシ後ハ、大概觀望ノ体ニ成行キ、急ニ義旗

ヲ挙クル者モアルベカラズ、兎ニ角大義ヲ唱ヘテ先驅スル者ナクシテハ、誰モ手ヲ拱テアリナム、然レバ我藩ノ同志等モ此月五日ヲ限リニ勃興ノ約ヲ定メ置キタレバ、今暫シ此ニ時日ヲ延ハシマチ見ハ、略近況ノサマモ知ラルベシ、若シ勃興ノ事延引セバ、直ニ我藩ニ下リ諸友等ト勃興ノ決策ヲナシナム、我藩ヨリ三百人モ勃興ラバ義旗ノ唱ヲ為ス事難カラザルベシ云々(以下腐朽、文字不明)

○以下の腐朽不明部分の記事は、「有馬新七先生伝記及遺稿」及び「有馬正義先生遺文」によれば左の如し、補つて掲げる。

かからは四方有志の国々も時日移さず振起る可し、恥を忍び堪へ難きに堪へざれば、如何で大事をなさむや、足下等も今暫時我が藩の動靜をまち、勃興のさまなくば速に下向る可し、然無ればなか／＼に我が藩の奸党に妨けられ大事を敗る可し、と種々に云ひ諭しければ、人々も許諾ひけり、斯くて微しく酒をも飲みて語り合ひ、今宵は此に宿りける、

此の日記の中に長歌など物せしも甚とをかし、予は歌のさまをもしらねども、心に思ひ感くることをありのままにかく詠めけるにまむ、其が辞詞のよしあしは更に歌人にまかせなむものぞ、

〔有馬新七先生伝記及遺稿(渡辺藤衛)ならびに有馬正義先生遺文(久保田政)にて補訂〕

四〇六 有馬新七建言(前記ノ如ク本書腐朽、此時建

言シタル者ナルハ下文ニ照シ明ナリ、因テ別冊ニアルヲ茲ニ挿入ス、読者亮セヨ)

乍恐謹テ奉言上候、

私式微臣 浅陋誠ニ以不堪恐懼畏謹之至候得共、当時皇国御危急且夕ニ相迫リ不容易折柄ニテ、恐多モ深被為惱

叡慮実ニ天下ノ安危興廢ノ所關係、為臣子者片時モ安然徒視難罷在儀ニ御座候故、難默止方今ノ事体、且ハ愚存ノ趣不奉願恐左ニ言上仕候、

近年來夷賊禍心ヲ包蔵シ、度々我カ辺隙ヲ覬覦シ、殆ト大難將到来之砌御座候処、幕府政令淆乱シ、恐多モ奉背勅意、諸夷ヲ近ケ和親ヲ結候ヨリ、追日夷狄ノ患甚敷、当夏以來大老井伊掃部頭・老中間部下總守・太田備中守等ノ輩政柄ヲ執リ威權ヲ弄シ、加之奉輕蔑朝廷不臣ノ罪不遑枚挙、此佩ノ勢ニ候ハ、大義晦塞シ名教墜地候儀無疑、然処 近衛殿・三條殿・鷹司殿初メ忠義誠確之三公御大臣方 朝政御輔佐被為在、殊ニ主上神武聰明千載不世出ノ

聖主ニ被為渡、攘除夷狄 皇威ヲ海外ニ被為振候

叡慮確乎トシテ御卓立被為在(宸翰甲第^{マツ}号參看)、夷

狄ヲ近ケ開港条約ヲ結候幕府ノ処置不被為叶

叡慮候ニ付、御許容難被遊

叡慮ノ趣、再応關東へ被仰下候得共、掃部頭初メ關東ノ奸賊等曾テ不奉承服、勅許ノ有無ニ不拘、遂ニ夷

狄へ開港条約差許シ、徳川家ヲ御補助忠義勤王ノ志有

之候親戚水戸前中納言様・尾張中納言様・松平越前守

様等ノ三侯ヲ、何之罪モ無キニ隱居ノ上令蟄居、弥増

我意ニ募リ候故益被為惱

叡慮、当御代ニ当リ夷狄ノ為ニ 皇国ヲ汚穢候テハ

皇祖大神宮ヲ初メ奉リ御歴代へ被為对、

天位ノ御任不被為濟、既ニ 御讓位可被 遊被仰出候

得共、近衛殿初メ忠誠ノ群卿方偏ニ御願ニテ、是非

(宸翰甲第^{マツ}号參看)

叡慮相立候様御執計可被為 在トノ御事ニ付、漸ク

思食止ラセ賜ヒ、因テ徳川家御介助、奸賊ヲ逐斥シ、

公武御合体攘除夷狄賜フ

叡慮ニテ、幕府并水戸へ被下 勅書^{水戸へ勅書ヲ被下候ハ、}

達トノ趣ニ御座候得共、水戸中納言様(慶應)奸党ニ欺カレ猶子相

成候(伊右ノ御写ハ、近衛殿ヨリ送ニ 宰相様(有興公)へ御遣シ相成

〔頭注〕御書及ヒ上申書參照

候也、勅意御奉戴之趣、御糾問ノ趣被為、在候得共、是以

違背仕リ、殊ニ水戸ヘノ、勅書ヲ偽書同然ニ執計候謀

議モ致シ、水戸中納言様ヲ以欺キ、〔甘言ヲ詭カ〕勅意之趣諸大名ニ

被達候儀ヲ拒ミ、剩間部下總守上京以來在京有志ノ士

ヲ初メ、諸大夫迄探索相捕ヘ、暴威ヲ以テ堂上方ノ心

胆ヲ挫キ奉ラムト工ミ、九條関白殿下關東ヘ御内通

有之候ニ付御退職相成リ、去ル九月三日、近衛殿下ヘ

内覽宣下有之候也、近衛殿内覽ニテ坐シ候得ハ、奸

賊等我俣之拳動出来兼、將軍ノ任モ一橋刑部卿賢明之

聞得有

之候ニ付、右ヲ將軍ニ被為任候

叡慮ニテ候也、此ハ当春堀田備中守ヘモ仰出サレ、備中守御請、仕リ、前將軍モ固ヨリ、叡意奉戴之含ニテ候由、

是非紀伊宰相卿〔慶福〕ヘ將軍宣下不申下候テハ、己レ

ノ罪逆モ難逃詎合ニ付、種々ノ奸謀ヲ廻シ、遂ニ九條

殿下ヲ被為復再職候様執計、幼若ノ紀伊宰相卿ヘ將軍

宣下ヲ申下シ、且桑名・彦根等ノ人数ヲ呼集メ、声勢

ヲ張り、伏見奉行内藤豊後守ヘ申付、御所向ノ警備

ヲ敵密ニ為致〔宸翰甲第、号參看〕、上下之名分ヲ不顧、

虎狼ノ威勢ヲ逞シ無道ノ奸謀不一方、只今ノ勢ニ候ハ、遂ニ乍恐奉幽閉〔当時都鄙専ラ唱ヘタリ〕

主上候機顯然ト相著ハレ、外患内憂並起リ、実ニ朝

廷ノ御危急皇國ノ興亡且夕ニ差迫リ、誠ニ不存永慨憤

激儀ニ御座候、依之誠ニ以恐懼ノ至奉存候得共、又

次郎様〔忠義公旧名〕御不例之由被仰立、爰許〔伏見〕ヘ

御滞在被為遊、早速御國許ヘ巨細事情被仰遣、敢死ノ

士五百余人モ潜ニ被招呼〔大久保利通日記參看〕、皇居

御守護奸賊御誅伐ノ御策略被為在度伏テ奉敷願候、爰

許ヘ御滞在被為在候ハ、奸賊等ガ嫌疑モ不鮮詎合御

座候得共、問部・酒井等ガ分際ニテ、彼方ヨリ妄ニ兵端

ヲ開キ、無体ニ押寄候儀ハ〔幕府怯懦ナル記スルカ如シ〕、

万々有御座間敷候ニ付、御國許人数潜行馳登リ候迄ノ

間ハ、如何様共被仰立御滞在可被為調所置ハ可有御座

儀ト奉存候、固ヨリ御國ノ勇武ハ、天下ニ秀テ諸藩ノ

所畏ニ御座候得ハ、五百余人モ駈登リ、又次郎様御

滯伏勤王被遊候趣、諸方ヘ聞得候ハ、奸賊下總守等

ガ輩倉皇愕錯奔走ニ不遑、其中ニハ長門ノ萩・因幡ノ

鳥取等固ヨリ義心ノ國ニテ御座候得ハ、不日ニ勃興相

違無御座、彼ノ奸賊等ヲ致誅伐候儀何ノ難キ事可有御

座哉、且彼等小藩ノ城主彦根・桑名等ノ人数少々相加

ハリ居候トモ、上方素生ノ弱敵不足恐者ニ御座候間、

何卒被為決 御尊慮 皇國ノ御為ニ被為尽御忠節、天下ニ大義ヲ御唱ヘ被遊候ハ、奸賊ヲ誅伐シ奉靖

勲慮皇室御興復ノ儀、全ク御家ノ御功業ニテ実ニ此ノ一挙ニ相決シ可申、尤在京奸賊伏誅ノ上ハ、不移時日於關東モ水戸・尾張・越前・土佐・宇和島等初メ有志ノ諸藩勃興、掃部頭等ガ輩ヲ討取候儀ハ、差見得居候間、一時ニ皇國ヲ掃清メ、其勢ニ乗シ攘除夷狄ノ策ハ如何程モ可有御座儀ト奉存候、上ハ奉崇敬

朝廷、内ハ誅戮奸賊(櫻田ノ挙當時ニ起レリ、大久保日記見ルヘシ)、外ハ攘除夷狄候儀ハ方今ノ急務ニテ、固ヨリ人臣当然之職分、大義明白成ル儀奉建言迄モ無之、殊更順聖院様平素深ク 朝廷ヲ御遵捧被遊、明大義正名分除攘夷狄、 皇室御再造被遊候御大志赫然タル御事ニテ、度々御奏聞(近衛忠親公・三條實萬公ヲ以テナリ)ノ訳モ被為在、御忠義誠確ニ坐シ候段ハ達

天聰勲感不淺、深ク御依頼被 遊候御訳合ニテ(宸翰甲第号參看)、御逝去ノ後迄モ 近衛殿へ度々御沙汰ノ趣被為 在(御歎惜ノ勅語原田才輔通知書參看)、実以御國ヲ股肱柱石トモ被 思食候儀ニ御座候得ハ、何レノ筋此節 朝廷ノ御危急

ヲ御望觀被為在候御義理筋無之、是非 順聖院様御遺志御継述被為 遊、

皇室御興復ノ御忠略無之候テハ、不被為濟御義理合ト乍恐奉存候、左様御座候ハ、 順聖院様 朝廷之御為ニ種々御尽力御周旋被遊候御誠心益相輝キ、御家ノ御鴻業千載ノ後迄モ不朽、御國威弥相振ヒ、乍恐 又次郎様御忠孝ノ御志シ天下ニ卓立シ、古今ノ規範ト罷成候儀ニテ、只今ノ時勢実ニ難再得、決テ不可失ノ大機會ニ御座候、誠ニ恐懼至極恐多キ申分ニ御座候得共、

目前ノ小利害ニ御係累無之、遠大ノ御深慮被為 在度御儀ト奉存候、私式至愚淺陋ノ微臣ニ御座候得共、窃ニ 順聖院様御遺志ヲ奉銘佩服寤寐難忘、殊ニ眼前奸賊等ガ暴威ヲ振ヒ、 朝廷御危難ニ被為迫候ヲ不忍奉望親、切齒憤慨ニ不堪儀ニ御座候、況乎 又次郎様ニハ親數 順聖院様御遺命ヲ被為受、御繼嗣ニ被為立候御事ニ御座候得ハ、 順聖院様御志業ヲ不被為遂、中道

ニテ御逝去被遊候御儀ニ付テハ、猶更御痛心御憂歎被為遊候御事ト窃ニ恐察仕リ、不堪涕泣悲慟、僭越冒為ノ罪モ不奉願、此段言上仕候、奉犯非分候儀ニ付テハ如何様ノ罪ニ被処候共、固ヨリ所奉甘心ニ御座候間、

何卒 皇国重大ノ儀、天下安危ノ所関係ヲ深ク被為在御遠凶、非常ノ御英断ヲ以テ正大光明ノ御措置被為在度奉仰願候、誠惶々々謹言、

午十二月八日

有馬新七正義

謹

上

右安政戊午之冬十二月八日、又次郎様初テ江戸御下向ノ節ナリ伏見御着有之、予時ニ伏見ニ潜居、因テ右ノ通建白仕候、尤取次ハ御側役豎山武兵衛ニテ候、且萩・鳥取等ヘハ予予メ牒合セ置候訳モ有之候故、巨細豎山ヘ演説ノ含ニテ候処、方今ノ事情略演説建白ノ趣ヲ申述候処、却テ仰天ノ体ニテ(豎山等ノ俗吏等驚愕甚シク、後患ヲ恐れ帰斃ヲ命シタリ)、漸ク建白ノ一封迄ヲ相受取、御前ヘハ可差上下ノ趣ニ候故、迎モ事ノ行ハレ候儀ハ覚束ナク相考候故巨細ハ不申述候、

四〇七 有馬新七・山縣半藏三條前内府公ニ上ル

封事

乍恐奉言上候、

夷賊禍心ヲ懷藏シ、我カ辺隙ヲ覬覦スル事、固ヨリ不

一日 神州ノ大患

朝廷之御安危ニ係リ、誠ニ以テ不容易御時節御座候処、

近年征夷府政令致混乱、大老井伊掃部頭・老中間部下

總守等カ輩權勢ヲ専ラニシ、私党ヲ結ビ、酒井若狹守・

(頼胤、高松藩主) (忠実、新宮藩主)

松平讚岐守・水野土佐守等此レニ与ミシ、相共ニ邪議

ヲ唱ヘ、不畏懼

朝廷、夷狄ヲ近ケ、尊嚴之御国体ヲ汚辱シ、徳川家ノ為

ニ奉戴

叡意被尺忠節候御親戚方一々令幽囚、遂ニ夷狄ト和親ヲ

結ビ、開港条約悉ク彼カ所乞ニ從テ差許シ、饗応善美

ヲ尽シ、邪教寺迄モ致造立候時宜ニ相成(此時マテ外人

居留地ニ礼拝堂アリシノミ)、此俛ニ差置候ハ、遂ニ彼カ

術中ニ陥リ、赫々タル 神州夷狄腥膻ノ俗ニ陥没シ、

天下万民塗炭ノ苦ヲ受候様可罷成ト奉存候、依之可畏

モ深ク被為惱

叡慮辱クモ被下

勅命、再応御料明被為

在候得共、曾テ不奉畏服、剩間部下總守上 京以来、

諸大夫初メ在京有志ノ士ヲ致探索及捕方(探偵ノ密ナリ

シハ三浦七兵衛・長野主膳等カ往復書中ニ詳ナリ)、押テ紀

伊宰相殿へ將軍宣下ヲ申下シ、三公方御賢明坐候テ、御忠誠ヲ被為尽

朝政御輔佐被為在、近衛殿下へ内覽宣下被為在候処、

間モ無ク内覽ヲ奉褫、遂ニ九條殿下ヲ再ヒ関白内覽

ニ奉復、

朝廷之御羽翼ヲ奉殺(宸翰甲第 号参看、上下隔絶ノ、恐)

多モ

主上御孤立ノ勢ニ(宸翰甲第 号参看)、執計リ、天下ノ有

志ヲ屏息シ横暴ヲ肆ニ致候儀、可畏モ

玉体ニ奉迫候機明白ニ相顯(宸翰甲第 号参看)、実ニ無

道ノ奸賊、天誅所不容、人可得誅者ニテ(鋤姦説起ル之)

ヲ扱トス外患内憂並起リ、神州之興廢実ニ旦夕ニ差

迫候御時節、為臣子者須叟モ不忍徒視望觀、臣等僻遠

浅陋之微臣御座候得共、窃ニ不堪憂憤永慨、誓テ奸賊

井伊等カ徒ヲ致誅戮、神州ノ御為奉尽微力度種々碎

心肝候得共、纔ノ孤兵ヲ以テ拳事候テハ輕拳暴動ノ事

モ恐多、且

朝廷眼前ノ御危難モ難測、却テ不忠ノ所為ト可相成欤ト

乍無念時日ヲ移シ罷在候処、此節越前・長門・因幡等

ノ藩へ謀合セ、臣正義カ主君又次郎(忠義公幼名)近日

伏見へ致着筈御座候ニ付、暫ク滞居有之候様仕リ、右

ヲ期限トシテ東西一時ニ振起シ、奸賊ヲ致誅戮、其勢

ニ乘シ、夷狄ヲ攘除ノ策相決、奉靖

叡慮候様仕度臣等窃ニ申合候、其期ニ至候ハ、

皇居幾重ニモ嚴重ニ奉護衛、直ニ酒井若狹守・間部下總

守等カ輩ヲ誅戮シ、奸党ヲ討払ヒ申度、其後ノ処置第

一ノ事ニテ不容易儀ト奉存候間、猶又奉願事件モ(鋤

姦及ヒ討幕ノ令詞ナラン)可有御座候ニ付、其節ハ可然様

御取計被下度、此等ノ儀モ予メ御含置可被下奉願候、

臣等妄ニ干戈ヲ動シ都下騷擾ノ儀相企候儀、

叡慮ノ程モ恐多如何ト奉存候得共、非常ノ御時勢実ニ不

得已儀ニ御座候故、不奉願僭越冒為ノ事、右之策相決

申候間、近比奉恐入候得共、何卒以御都合達

鳳聞候様御取計被下度奉願候、誠恐々々謹言、

薩摩藩臣 有馬新七

戊午十一月廿八日 長門萩藩臣

山縣半藏

謹

上

右三條殿下へ奉上册候草稿

四〇八 安政四年巳十二月江戸邸ニ於テ建言〔安

政四年〕

○この文書は、「鹿児島史料 斉彬公史料」第二卷の第五一六号文書の安政四年十一月二十九日付有馬新七建言（島津斉彬宛）と同文重複により略す。